静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第70集

小鹿杉本堀合坪遺跡

平成６年度静岡県立大学短期大学部静岡校（仮称）建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1996

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第70集

小鹿杉本堀合坪遺跡

平成６年度静岡県立大学短期大学部静岡校（仮称）建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1996

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

当研究所では設立以来、国道１号線静清バイパス建設に伴う埋蔵文化財調査を手掛け、多くの成果を上げてきた。なかでも奈良時代から平安時代にかけての条里遺構の検出は、条里型地割が静岡平野北部地域で、広く行われたことを解明したという点で特筆される。しかし、静岡平野南部地域においては表層での条里型地割は確認されているものの、埋没条里遺構の検出は１例にすぎないという状態であった。

今回の調査では、後世の建造物などによる遺構面の破壊が多く、遺跡の全容を明らかにするような調査を行うことはできなかった。しかし、条里型地割にかかわる坪界線そのものの検出は認められなかったものの、擬似畦畔の検出により、静岡平野南部地域でも条里型地割が平安時代に行われていたことが明らかになった。また井戸など当該期の集落の一端も検出することができた。近接する曲金北遺跡では古代東海道の発見もあり、静岡平野南部地域での歴史解明が進展することが期待される。

調査ならび本書の作成に当たっては、静岡県企画調整部学術・大学課、静岡県教育委員会、静岡市教育委員会をはじめとする関係機関各位に大変お世話になった。心から感謝と敬意を表したい。

本書が埋蔵文化財保護行政の基本資料として、また埋蔵文化財に対する理解の一助として活用されることを願う。

1996年３月

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所
所　長　斎　藤　　忠

例　　言

1　本書は、静岡市小鹿に所在する小鹿杉本堀合坪遺跡の発掘調査報告書である。

2　調査は、平成６年度県立大学短期大学部静岡校（仮称）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査事業として、静岡県企画調整部大学室（現学術・大学課）の委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもとに静岡市教育委員会の協力を得て、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が、現地調査を平成６年12月１日から平成７年３月31日まで、平成７年度事業として現地での補足調査を平成７年４月１日から５月31日まで、整理作業を平成７年４月１日から９月30日の間実施し、平成８年３月までに報告書を刊行し事業を終了した。

3　調査体制は、次のとおりである。

平成６年度

所長　斎藤忠、常務理事　鈴木勲、調査研究部長　小﨑章男、調査研究二課長　佐野五十三

調査研究員　中鉢賢治、川本忍

平成７年度

所長　斎藤忠、副所長　池谷和三、常務理事　三村田昌昭、調査研究部長　小﨑章男

調査研究二課長　佐野五十三

調査研究員　中鉢賢治

4　本書は、中鉢賢治が執筆した。

5　石製品の石材の同定は静岡大学名誉教授伊藤通玄先生に行っていただいた。

6　発掘調査にあたりテフラ分析・年代測定分析を㈱古環境研究所に委託し、その結果は付編として掲載した。

7　木製品の樹種同定については、東北大学助教授鈴木三男先生の指導をうけた。

8　遺物写真撮影は楠華堂（楠本真紀子）に委託した。

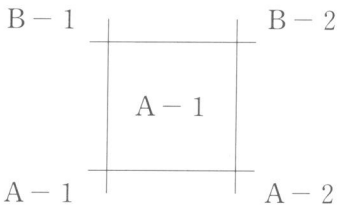
9　本書の編集は、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所があたった。

10　発掘調査資料は、すべて財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が保管している。

凡　　例

本書の記述は、以下の基準に従い統一をはかった。

1　調査は10m×10mのグリッドを設置して行ったが、南西隅を起点に呼称している。



2　遺構・遺物の表記は次のとおりである。

遺構（S）		遺物	
D	溝状遺構	P	土器
E	井戸	W	木製品
F	土坑	S	石製品
H	掘立柱建物跡	M	金属製品
P	小穴(ピット)	E	その他
X	その他		

3　遺物の実測図は土器、木製品、石製品は縮尺１／３を基本とし、金属製品を縮尺１／２とした。ただし、井戸部材については縮尺１／６とした。

4　土器の実測図については施釉部分をスクリーントーン ▭ で示した。

5　木製品の実測図においては木目を断面図中に模式的に示した。また、欠損部分を ▭ で、炭化部分をスクリーントーン ▭ で、圧痕部分をスクリーントーン ▭ で示した。漆についてはスクリーントーン ▭ で示した。

6　石製品の実測図については断面に⊢――⊣で砥面の範囲を示した。

7　土器観察表において、法量の〈　　〉は復元計を示している。色調については農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帖』をもとに表記している。なお、釉の色調は下段に（　　）で示した。また墨書土器について、□は解読不明の文字或いはその残画を示し、×は欠損のため文字は現存していないが、かつて一字以上の文字があったと推定される場合を示した。

8　木製品計測表において、曲物の〈　　〉は推定復元径、その他の（　　）は残存長、漆器の数値は底径を示している。

9　キセル計測表において、〈　　〉は推定径を示している。

10　金属製品計測表において、（　　）は残存長を示している。

目　　次

序
例　言
目　次

第Ⅰ章　調査の経過 …… 1

第１節　調査に至る経過 …… 1
第２節　調査の方法 …… 1
第３節　調査の経過 …… 3

第Ⅱ章　位置と環境 …… 6

第Ⅲ章　基本層序 …… 9

第Ⅳ章　遺構と遺物 …… 12

第１節　遺構 …… 12
第２節　遺物 …… 35
1　土器 …… 35
2　木製品 …… 39
3　石製品 …… 49
4　金属製品 …… 50

第Ⅴ章　トレンチ調査の結果 …… 52

第１節　調査区外のトレンチ調査 …… 52
第２節　体育館建設予定地のトレンチ調査 …… 53

第Ⅵ章　まとめ …… 59

引用参考文献 …… 64

付編　　静岡県、小鹿杉本堀合坪遺跡の火山灰分析・年代測定　　（株）古環境研究所 …… 65

挿図目次

第１図　遺跡周辺地形図 …… 2
第２図　グリッド配置図 …… 3
第３図　周辺遺跡図 …… 7
第４図　土層柱状図 …… 10
第５図　２区第１遺構面遺構全体図 …… 13
第６図　２区第１遺構面エレベーション図 …… 14
第７図　畦畔ＳＫ301実測図 …… 15
第８図　第２遺構面遺構全体図 …… 17・18
第９図　井戸ＳＥ162実測図 …… 19
第10図　土坑ＳＦ118・120・131・151実測図 …… 20
第11図　土坑ＳＦ110・132・160実測図 …… 21
第12図　溝状遺構ＳＤ121～130実測図 …… 22
第13図　溝状遺構ＳＤ218～226・228～235・240～244・247～249実測図 …… 23・24
第14図　溝状遺構ＳＤ203～210・253・258実測図 …… 25
第15図　溝状遺構ＳＤ312～321・355・356実測図 …… 26
第16図　溝状遺構ＳＤ335～338実測図 …… 27
第17図　１区擬似畦畔実測図 …… 31
第18図　３区擬似畦畔・溝状遺構ＳＤ325～327実測図 …… 32
第19図　杭列概念図 …… 33
第20図　１区第３遺構面全体図 …… 35
第21図　出土土器実測図 …… 37
第22図　出土木製品実測図（１） …… 41
第23図　出土木製品実測図（２） …… 42
第24図　出土木製品実測図（３） …… 45
第25図　出土木製品実測図（４） …… 46
第26図　出土木製品実測図（５） …… 47
第27図　出土石製品実測図 …… 49
第28図　出土金属製品実測図 …… 50
第29図　調査区外トレンチ土層断面図 …… 55・56
第30図　体育館建設予定地内トレンチ土層断面図 …… 57・58
第31図　小鹿杉本堀合坪遺跡周辺条里推定図 …… 60
第32図　溝状遺構方位図 …… 61

挿表目次

表１　遺跡地名表 …… 8
表２　溝状遺構計測表 …… 28

表３　杭計測表 …… 34
表４　土器観察表 …… 38
表５　木製品計測表 …… 48
表６　石製品計測表 …… 51
表７　キセル計測表 …… 51
表８　金属製品計測表 …… 51
表９　溝状遺構方位別一覧表 …… 61

図版目次

図版１　周辺地形（空中写真）
図版２　１　遺跡遠景（南東から）　２　調査前状況（３区）
　３　調査前状況（１・２区）
図版３　１　２区第１遺構面遺構検出状況（南西から）　２　２区第１遺構面完掘状況（南西から）
　３　畦畔ＳＫ201（北東から）　４　畦畔ＳＫ202（北西から）
　５　畦畔ＳＫ301（南西から）
図版４　１　１区第２遺構面全景（西から）　２　１区擬似畦畔（北西から）
　３　１区杭列（南東から）
図版５　１　井戸ＳＤ162全景（北から）　２　井戸ＳＤ162隅柱・横桟木組み合わせ
　３　井戸ＳＤ162水溜内曲物
図版６　１　土坑ＳＦ118（東から）　２　土坑ＳＦ120（南東から）
　３　土坑ＳＦ131覆土堆積状況　４　土坑ＳＦ131内下駄出土状況
　５　溝状遺構ＳＤ129・130　６　溝状遺構ＳＤ124～127
　７　１区曲物出土状況　８　１区陽物出土状況
図版７　１　２区第２遺構面全景（南西から）　２　溝状遺構ＳＤ203～207他
　３　溝状遺構ＳＤ211～217・256
図版８　１　３区第２遺構面全景（北から）　２　３区擬似畦畔・溝状遺構ＳＤ325～328
　３　溝状遺構ＳＤ334～340・350
図版９　１　１区第３遺構面全景（南西から）　２　１区北壁土層断面（東から）
　３　１区北壁土層断面（西から）　４　１区第３遺構面出土木片
　５　３区第３遺構面全景（南東から）　６　３区東壁土層断面
　７　３区東壁７層攪拌状況　８　３区西壁土層断面
図版10　出土遺物（土器）
図版11　出土遺物（木製品１）
図版12　出土遺物（木製品２）
図版13　出土遺物（木製品３）
図版14　出土遺物（木製品４）
図版15　出土遺物（石製品・金属製品）

第Ⅰ章　調査の経過

第１節　調査に至る経過

県内医療の充実を図るため、県企画調整部大学室（以下大学室）により医療系の短期大学として県立大学短期大学部静岡校（仮称）建設が計画された。平成３年11月には大学室より静岡県教育委員会文化課（以下文化課）に建設予定地内の埋蔵文化財の有無についての照会がなされた。大学室と文化課との協議の結果、現状では周知の遺跡とはなっていないが、弥生時代後期の「曲金式土器」の標式遺跡である曲金Ａ遺跡や奈良・平安時代と考えられる三菱工場内遺跡が隣接しており、埋蔵文化財包含地が建設予定地にまで広がっている可能性が高いことから事前に調査を実施する必要があるとの結論が出された。

一次調査は文化課によって平成４年７月６日から８月７日にかけて遺跡の存否の確認を中心に行われた。20m ごとに試掘坑を設定し、土層観察およびプラント・オパール分析を行った結果、平安時代の水田跡が存在する可能性が高く、遺跡として認識できるという結果が出され、曲金東遺跡という名称が付けられた。

二次調査は前回調査の結果を踏まえ、平面調査による確認の必要性から平成５年７月６日から９月７日にかけて文化課が担当し実施された。7 m×20m の調査区２ヵ所による平面調査と試掘坑による土層観察が行われ、上層の砂層からは坪界線と考えられる畦畔、下層の黒褐色土層からはシガラ状遺構を検出した。上層からは平安時代から近世にかけての土器、下層からは木製品が出土した。

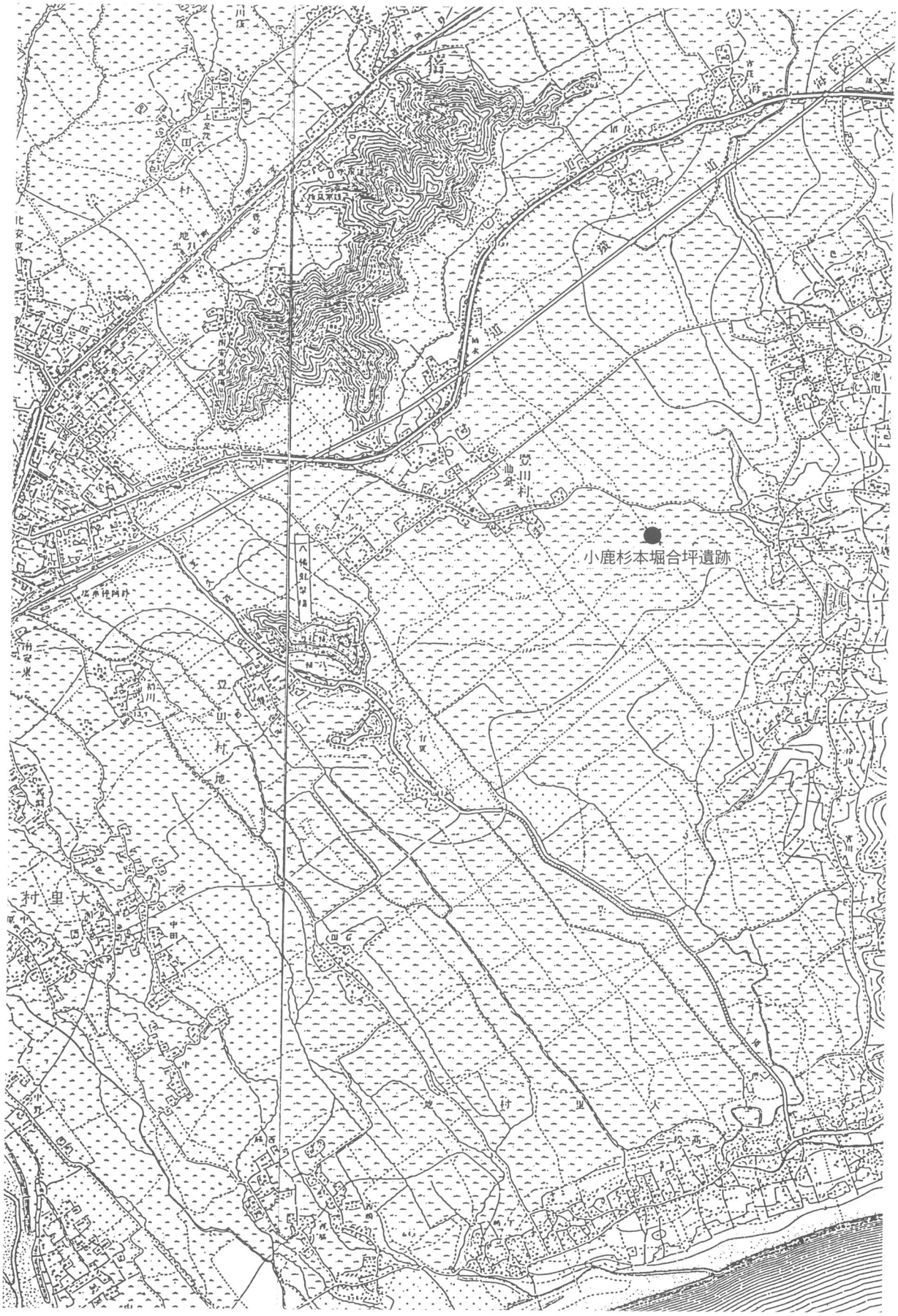
三次調査となる今回は建物の配置・構造の決定を受け、建築予定地全面を対象に発掘調査を行うこととなった。しかし、二次調査の下層で検出したシガラ状遺構については建築物の方向からずれることから対象外とし、条里型地割の施工に伴う坪界線の検出を目的として、指導機関文化課、実施機関財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所（以下研究所）の体制で調査を実施することとなった。この際に静岡市教育委員会社会教育課(以下市教委)、文化課、研究所との三者協議により曲金東遺跡であった名称を市教委の遺跡名称の付け方に基づき、小鹿杉本堀合坪遺跡に変更した。

第２節　調査の方法

今回の発掘調査は、校舎２棟と体育館１棟を対象に調査を行った。体育館に関しては既存の図書館と体育館の解体工事終了後にトレンチによる確認調査を行うこととしたため、本格的な調査は一般教育棟と管理厚生棟の２か所となった。このうち一般教育棟の建設予定地には樹木・フェンス・Ｕ字溝などの施設が存在していたため、当初１調査区の予定を２つの調査区に分割して行うこととなった。そこで一般教育棟の東側部分を１区、西側部分を２区、管理厚生棟を３区として調査を進めた。

調査にあたっては調査区相互の位置関係を明示するために10m×10m 方眼のグリッドを設定した。グリッド基軸線は、国土方眼を用い、Ｘ＝－11410・Ｙ＝－7400をＡ－１列とし、南西隅を起点に南から北にＡ・Ｂ・Ｃ…のアルファベット、西から東へ１・２・３…の数字を付した。この組み合わせによりグリッド杭の北東の面をＡ－１のように表記したが､確認調査等により調査範囲が広がったことから､Ａ－１列より南西方向はＢ′－２′のようにダッシュをつけて表記した。

表土の除去には重機を用い、各遺構面は作業員の手作業で発掘し、土砂の運搬にはベルトコンベアを使用した。発掘調査は層位的に行い、各遺構検出面ごとに遺構、遺物出土状況の実測図作成と写真撮影を行った。遺構平面図・土層断面図は縮尺1:20を基本とし、必要に応じて一部１:10縮尺図を作成した。



第１図　遺跡周辺地形図

（明治33年陸地測量部1/20,000地形図を1/25,000に縮小）

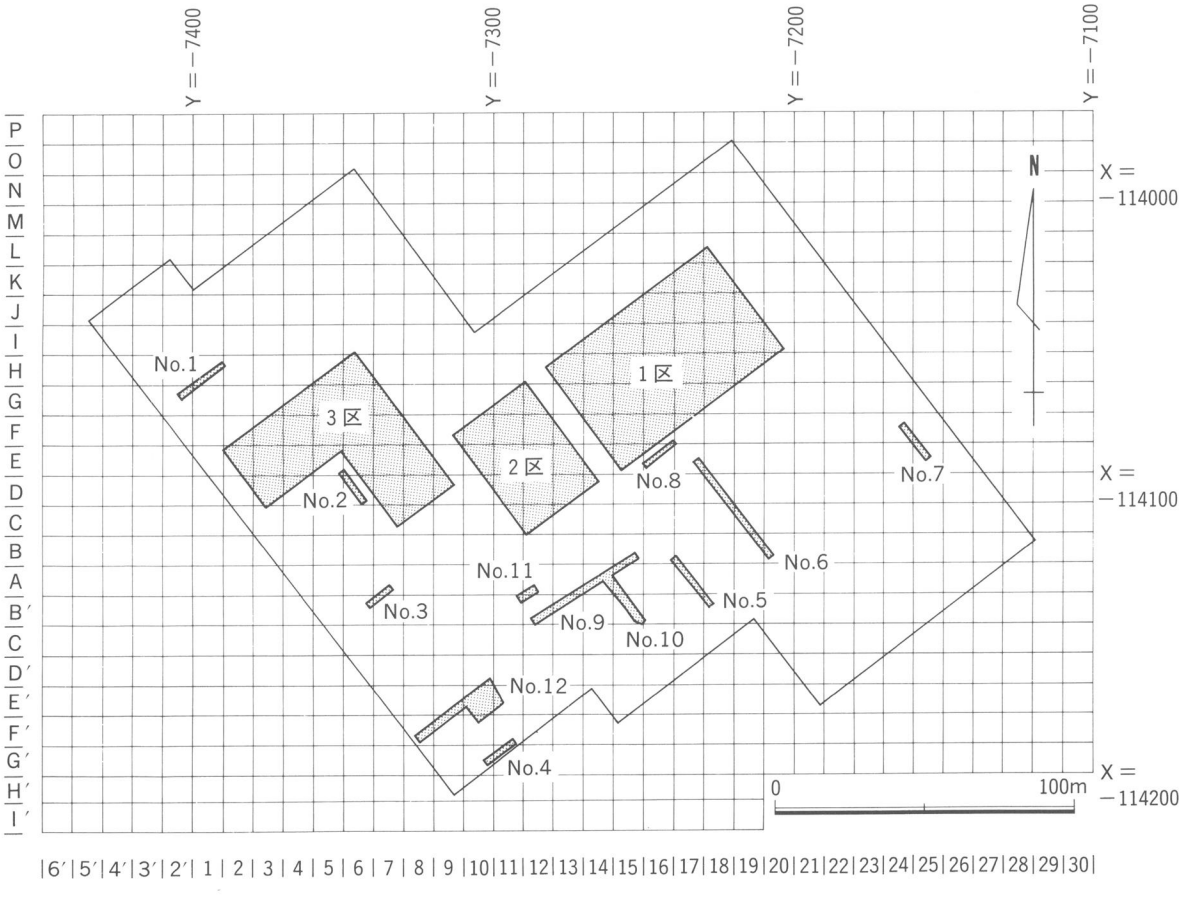
出土遺物はグリッドごとに、層位別・遺構別に取り上げ、土器・木製品・石製品・金属製品等に分けて台帳に登録した。

写真撮影は、4×5判（カラースライド・白黒）、6×7判（白黒）、35mm（カラースライド・白黒・カラーネガ）の組み合わせで記録を行い、調査区全景写真および遺構写真は適宜高所作業車、ローリング・タワーを使用して撮影した。

また調査にあたっては、1・3区からテフラ分析のための試料、3区から年代測定のための試料の採取を行っており、その結果は65頁以降に掲載している。

第3節　調査の経過

小鹿杉本堀合坪遺跡の調査は先述のとおり、条里型水田の坪界線の検出を目的として始められた。当初、二次調査の結果から3層での検出を想定していたが、表土除去中に再確認した結果、二次調査2区で大畦畔とされた部分が自然流路の立上がりと判断できたことや水田土壌としては2層が適切と考えられたことから、2層上面での坪界線検出と水田耕作土を除去した面での2面の遺構検出に切り替えることとした。さらに、調査開始直後から近代以降の建築物や旧県立薬科大学の校舎の基礎などの攪乱部分が非常に多く、遺構面の乱れが著しいことから、調査区外にトレンチを入れ、坪界線を確認すること、また2次調査時におけるシガラ状遺構の広がりを確認するために、1・3区で部分的ではあるが、下層の平面調査を行うことも今回の調査に加えた。なお、体育館部分の調査は既存の体育館・図書館の解体工事を待って、トレンチによる確認調査を4・5月に実施した。



第2図　グリッド配置図

12月１日～16日　発掘資器材の搬入、作業員の雇用手続きなど現地調査の諸準備を行う。

12月19日～22日　１区　重機による表土除去、集水桝の設置、排水溝掘削、安全フェンスの設置を行う。二次調査２区を再掘削し、土層の検討を行う。これ以後、２層上面を対象として調査を進める。２区　22日より重機による表土除去に入る。

12月26日～27日　１区　排水溝掘削、法面の養生を行う。２区　重機による表土除去、集水桝の設置、安全フェンスの設置を行う。

１月５日～６日　２区　重機による表土除去およびごみ捨て穴（空襲の跡の可能性あり）の掘削、排水溝掘削、撹乱土の除去を行う。３区　重機による表土除去、集水桝の設置、安全フェンスの設置を行う。

１月９日～13日　１区　グリッド杭の設置。２区　重機による表土除去、法面・排水溝掘削、撹乱土の除去を行う。３区　重機による表土除去を継続する。撹乱部分が非常に多く、調査対象として残るのは島状に残るごく僅かな部分のみである。

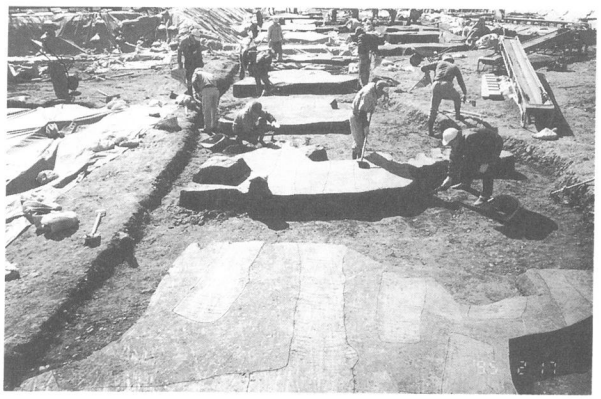
１月17日～19日　１区　排水溝の拡幅を行う。２区　手掘りによる撹乱土除去。３区　表土除去終了(17日)。排水溝掘削の継続。安全フェンスの取り付け完了。

１月23日～27日　１区　土層断面図、平面略測図の作成。２区　２層上面での遺構検出作業を始める。幅５～10cm前後の浅い溝状の遺構が見つかる。３区　２層上面での遺構検出作業を行う。

１月30日～31日　１区　土層断面図、平面略測図の作成を継続する。２区　遺構検出作業の継続と排水溝の掘削を行う。３区　畦畔ＳＫ301検出。

２月１日～３日　１区　土層断面実測の継続。２区　遺構検出作業の継続。３区　ＳＫ301の写真撮影、実測を行う。

２月６日～10日　２区　ＳＫ201・202の検出。３区　ＳＫ301の解体、平面実測図の作成。



3区第2遺構面調査状況

3区第3遺構面調査状況

調査区外トレンチ掘削状況

体育館建設予定地内トレンチ掘削状況

2月13日～17日　2区　2層上面での遺構検出終了。全景写真・遺構写真の撮影、平面実測図の作成を行う。3区　2層の掘り下げを始め、下面での遺構検出作業に着手する。

2月20日～24日　2区　平面実測作業の継続。終了した部分から一部掘り下げを行う。3区　下面での遺構検出作業を継続する。F－7グリッド付近で畦畔状の高まり、その他の部分では幅約20～30cmの溝状遺構を検出している。調査区外トレンチ　トレンチNo.1～8までを重機で掘削する。

2月27日～28日　2区　2層の掘り下げを継続する。3区　溝状遺構の写真撮影、断面実測を行う。調査区外トレンチ　手掘による掘削、写真撮影、断面実測図の作成を行う。

3月1日～4日　1区　2層上面の遺構検出及び、攪乱土除去。2区　2層の掘り下げ、一部下面での遺構検出を開始する。3区　2層下面での全景写真、遺構写真の撮影を行う。調査区外トレンチ　写真撮影、断面実測図の作成を継続し、終了した部分から埋戻しを行う。

3月6日～9日　1区　2層上面の遺構検出作業を継続するが、明瞭な遺構を確認できなかったため、2層を掘り下げ、下面の遺構検出作業に入る。2区　2層下面の遺構検出作業を行うが、3区と同様の溝状遺構が検出された。3区　平面実測を終了し、8日より泥炭層での遺構を確認するための平面調査を開始した。調査区外トレンチ　写真撮影、断面実測図を作成し、すべてのトレンチを埋戻し終了した。

3月13日～18日　1区　2層を掘り下げ、下面の遺構検出作業を継続する。2区　遺構写真の撮影、平面実測図の作成を行う。3区　9層上面での遺構検出作業を行うが、遺構の存在が確認されなかったため、16日より下層の土層堆積状況を確認するため、重機による掘削を行う。

3月20日～25日　1区　2層下面の遺構検出作業を継続する。溝状遺構、ピット、土坑などを検出。遺構精査を行い、遺構断面写真の撮影、断面実測図の作成を行う。また坪界線にあたると考えられる位置からは畦畔状の盛り上がりと杭列を検出した。22日からは下層の遺構確認のために3区と同様の平面調査を始め、9層上面での遺構検出及び土層断面図の作成を行った。さらに西側部分の深堀りを行い、写真撮影と土層断面図を作成した。2区　平面実測を24日までに終了し、遺物の取り上げ作業に入る。

3月27日～30日　1区　全景写真の撮影、遺構写真を撮影し、平面実測図の作成に入る。また深掘りした部分の埋戻し作業を行う。2区　遺物の取り上げを終え、すべての作業を終了した。3区　28日に㈱古環境研究所によりテフラ分析のための試料及び年代測定のための試料の採集が行われた。29日には下層調査部分を埋戻し、すべての作業を終了した。

4月4日～8日　1区　平面実測図および遺物の取り上げ作業を行う。杭の引き抜き作業のときに井戸ＳＥ162を検出。

4月10日～15日　井戸枠内の覆土除去。平面実測図の作成を行う。

4月17日～21日　ＳＥ162の断面図の作成、遺物の取り上げ作業を行う。

4月24日　井戸ＳＥ162を完掘し、写真撮影、埋戻しを行い、1区のすべての作業を終了した。

4月26日～28日　体育館確認トレンチ　旧体育館部分でＴ字型に2本のトレンチ設定し、重機による掘削を行い、断面実測・写真撮影を行う。28日までに埋戻しを終え、作業を終了した。

5月16日　1～3区　建設工事開始までの安全対策として水中ポンプの設置を行う。

5月23日～25日　体育館確認トレンチ　旧図書館部分でトレンチ調査を実施した。25日までに埋戻しを終え、全ての調査を終了した。

第II章　位置と環境

第１節　地理的環境

小鹿杉本堀合坪遺跡はＪＲ東海道線静岡駅の東約2.5kmの静岡市小鹿２丁目２番１号に所在しており、遺跡の南には静岡競輪場、三菱電機静岡製作所などがある。

遺跡の所在する静岡平野は、主に安倍川の堆積作用によって形成された沖積平野であり、西から北にかけてアルカリ火山岩類からなる高草山･賤機山･竜爪山などの中起伏山地、東は丘陵性の有度山によって囲まれ、南を駿河湾に開いている。静岡平野の西半部は浅間神社付近を扇頂とする安倍川扇状地が占めているが、平野中の孤立丘である谷津山、八幡山によって東方への張り出しが規制されており、孤立丘の両端や隙間沿いには北東～南東向きのいくつかの微高地が形成されている。これらの微高地と有度山丘陵に挟まれた部分は南北に細長い大谷－池田－長沼低地となっており、安倍川とは水系を異にする巴川沿いに形成されている平野北東部の巴川－麻機低地に連続している。小鹿杉本堀合坪遺跡は駿府城付近から曲金・小鹿を結ぶ曲金微高地（小鹿街道微高地）の南側縁辺に位置する。

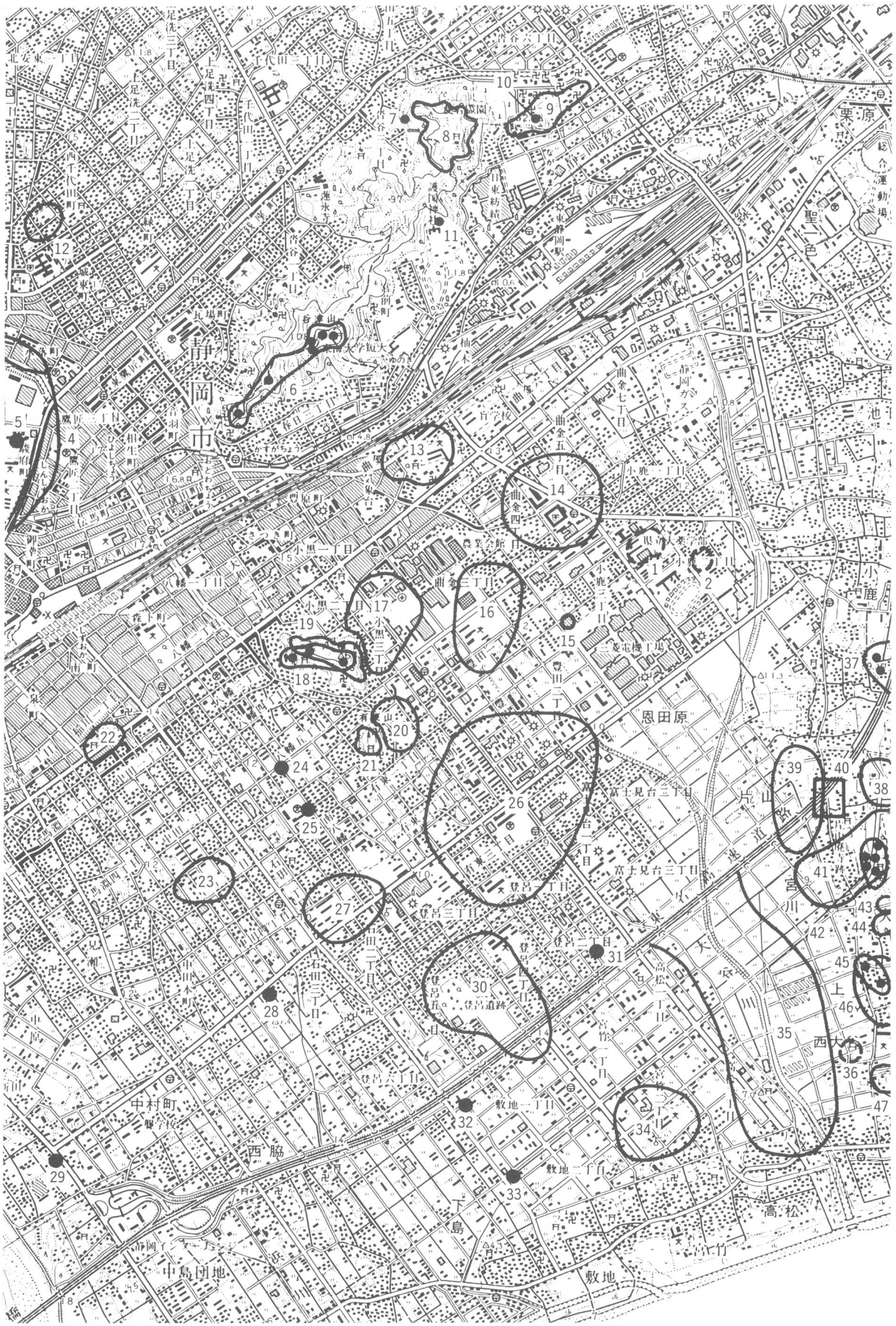
第２節　歴史的環境

小鹿杉本堀合坪遺跡の所在する静岡市内の遺跡は静岡平野および平野縁辺の丘陵地にその多くが分布している。

旧石器時代遺跡については宮川遺跡や大段Ｉ遺跡などでの出土が伝えられているが、その詳細は不明である。縄文時代の遺跡は早期の宮川遺跡や中期の上ノ山遺跡などのほか、元宮川神明原遺跡で後期から晩期にかけての土器・石器・木製品が出土している。さらに隣接する蛭田遺跡では縄文時代後期の屋外炉や水晒し場などが検出されており、発掘調査による内容の解明も進みつつある。これらの時代の遺跡は有度丘陵とその縁辺に多く認められる。

平野部に本格的に進出するのは弥生時代中期中葉以降のことであり、いずれも安倍川扇状地およびそこから延びる微高地に集落を営み、その周辺に広がる後背湿地で水田経営を行うという姿が浮かび上がる。安倍川扇状地の扇央部には駿府城内遺跡、久能街道微高地には拠点的集落の一つと考えられる有東遺跡（中期・後期）があり、その支脈である富士見微高地には国指定特別史跡の登呂遺跡（後期）が位置している。同様のあり方は他の微高地にも認められる。小黒微高地の小黒遺跡(後期)、墳丘が残存した方形周溝墓を検出した石田微高地の鷹ノ道遺跡（中期･後期)、中田微高地の汐入遺跡（後期)、「曲金式土器」の標式遺跡である曲金微高地の曲金Ａ遺跡、またその支脈の微高地に位置する豊田遺跡（後期）などをあげることができ、後期段階で遺跡数が著しく増加している。鷹ノ道遺跡でみられるように中期の方形周溝墓群が廃絶された後、後期には水田が営まれるなど、中期から後期にかけて土地利用の変化（可耕地の拡大）があったことが窺える。

古墳時代には前代と同様の立地に集落が形成されているようであり、継続して営まれる遺跡もある。丘陵部の遺跡では古墳時代初頭に上ノ山遺跡で方形周溝墓・円形周溝墓、宮川遺跡で円形周溝墓が確認されている。谷津山１号墳（前方後円墳　全長110m）は静清平野最初期の古墳であり、小黒遺跡、豊田遺跡など周辺遺跡との関連が考えられている。しかし中期段階では前代からの遺跡の多くは廃絶されており､何らかの社会的な画期として当地域では捉えることができよう｡後期には有度丘陵の全域にわたって古墳が構築され、群構成を成している。池田－大谷低地に面する有度山北西側斜面では北から谷田古



第３図　周辺遺跡図

墳群、池田山古墳群、小鹿古墳群、静岡大学構内古墳群、宮川古墳群、井庄段古墳群などが存在する。これらに対し、同じ有度山丘陵には３支群からなる伊庄谷横穴群が構築されており、注目される。

歴史時代になると国指定史跡の片山廃寺が有度山北西麓に存在する。戦前からその存在は知られており、駿河国分寺とも考えられていたが、戦後数次にわたる発掘調査が行われ、七間四面の金堂、四間四面で内部に須弥壇を有する講堂と長大な僧房からなる奈良時代中期に創建された私寺として考えられている。また片山廃寺の南には宮川瓦窯跡がある。このうち、小段地点は丘陵緩斜面末端近くの標高17m 付近に位置している。残存状況は良好ではないが、小規模な地上式の平窯で、出土した単弁蓮華抽象文をもつ軒丸瓦は片山廃寺に使用されているものの一種であることから、片山廃寺に製品を供給していたと考えられている。清泉寺窪地点は小段地点からさらに200m 程東南に位置しており、発掘調査によって有階有段式の２基の登窯とロストル式の平窯１基が検出されているが、灰原の検出からさらに１基の窯跡が想定されている。平城宮第２期（721～745年）の系統を引く均整唐草文をもつ軒平瓦が出土している。また、遠江国分寺跡に類例を持つ均整Ｓ字文の軒平瓦が出土していることから、片山廃寺造営と遠江国分寺との関連が推察されている。

当遺跡から北へ５ kmほどの曲金北遺跡からは８世紀半ば以降と考えられる古代東海道が検出されている。道幅９ mほどで両側に幅２～３ mの溝をもつもので、南西から北東方向にのびている。これは静清平野における条里型地割の東西軸に一致しており、広域条里の施工基準線になっていたと考えられる。この古代東海道の西の延長上には曲金Ｂ遺跡（軍神社周辺）があり、井戸跡のほか奈良期の須恵器や平瓦片が見つかっており、この一帯が有度郡衙ないしは横田駅に比定されている。

表１　遺跡地名表

番号	遺　跡　名	時　　期	種　別	番号	遺　跡　名	時　　期	種　別
1	小鹿杉本堀合坪遺跡	平安～近世	集・田	25	女子商校遺跡	弥生（後）	集　落
2	小鹿蟹合坪遺跡	古代～中世	水　田	26	有東遺跡	弥生（中・後）、古墳、中世	集・田
3	曲金北遺跡	弥生（中）～平安	道・田	27	鷹の道遺跡	弥生（中・後）、古墳、平安	田・墓
4	駿府城内遺跡	弥生（中・後）～中世	集・墓	28	南消防署内遺跡	弥生、古墳	集・田
5	駿府城	中世～近世	城　館	29	中野橋下遺跡	弥生（後）	集　落
6	谷津山古墳群	古墳（前・後）	古　墳	30	登呂遺跡	弥生（後）、古墳	集・田
7	井上邸古墳	古墳（後）	古　墳	31	天神森遺跡	古墳	散布地
8	愛宕山城	中世	城　館	32	水洗遺跡	弥生（後）、古墳（前）	集　落
9	長沼古城（長沼砦）	中世	城　館	33	下島遺跡	弥生、古墳	散布地
10	茶臼山古墳	古墳（後）	古　墳	34	汐入遺跡	弥生(後)、古墳、中世	集　落
11	柚木瓦窯跡	古代	古　窯	35	元宮川神明原遺跡	縄文（後・晩）～中世	集・祭
12	西千代田遺跡	弥生（後）	散布地	36	蛭田遺跡	縄文（後）、古墳	集　落
13	曲金Ｂ遺跡	古墳、古代	集・官	37	小鹿古墳群	古墳（後）	古　墳
14	曲金Ａ遺跡	弥生（後）、古墳	集　落	38	静岡大学構内古墳群	古墳（後）	古　墳
15	三菱工場内遺跡	古代	散布地	39	片山遺跡	弥生(後)、古墳、近世	散・集
16	豊田遺跡	弥生（後）、古墳（初）	集・田	40	片山廃寺跡	古代	寺　院
17	小黒遺跡	弥生（後）、古墳（初）	集・田	41	宮川（小段）遺跡	旧石器～中世	散・集
18	八幡山古墳群	古墳（後）	古　墳	42	宮川古墳群	古墳（後）	古　墳
19	八幡山城	中世	城　館	43	清泉寺窪瓦窯	古代	古　窯
20	有明遺跡	弥生（後）	集　落	44	清泉寺窪（清泉寺）遺跡	縄文	散布地
21	有東砦	中世	城　館	45	井庄段（大正寺山）遺跡	縄文、弥生	散・集
22	稲川遺跡	平安	散布地	46	井庄段（伊庄）古墳群	古墳（後）	古　墳
23	ケイセイ遺跡	古墳	集　落	47	上ノ山遺跡	縄文～古墳	集・墓
24	八幡５丁目遺跡	古墳	散布地				

第Ⅲ章　基本層序

小鹿杉本堀合坪遺跡の基本層序は１・２次調査との整合性を持たせるために基本的に１・２次調査の基本土層を踏襲している。第４図は１・３区の下層調査時に入れたトレンチを基本に作成した。特に砂とシルトの互層といった自然堆積層に関しては調査区の各部分でかなり状況が異なる点や繁雑になるのを避ける点からある程度のまとまりとして捉えることとした。１区と３区の土層をみる限り時期による高低差はあるものの概ね対応する。ただし13～15層は３区のみでの確認であり、１区では砂とシルトが薄く堆積しているだけである。

盛土

１区では旧県立静岡薬科大学のグランド用であり、下位には排水用に砂や砕石が敷かれ暗渠となっていた。２・３区では旧県立静岡薬科大学の解体工事後に客土が盛られ、最終的に地盤改良として、砕石が敷かれているという状況である。

1層　暗灰色砂質粘土

旧表土と考えられる。砂・小礫を含んでいる。全体に砂質が強く、粘性は低いが良くしまっている。攪乱が顕著であり、造成による削平をかなり受けている。

2層　灰色砂混じり粘土

層厚は約20～30cm で、粘性が強く良くしまっている。砂の混入が均質に認められる。部分的ではあるが、下位に砂の混入が顕著な土や砂が混入せずしまりの強い粘土が堆積する部分もある。建物の基礎など撹乱部分が多い。２・３区ではこの層の上面と下面において、１区は下面で遺構確認を行った。

3層　砂・シルト互層

灰色の中粒ないし粗粒の砂とやや明るい色調の灰色シルト（～細砂）との互層が基本であるが、粗砂や小礫混じりの箇所も認められる。基本的には最上位で部分的に厚く堆積している箇所も見受けられた。また明瞭な攪拌痕跡は認められないが、この層の上位に堆積している砂には細かい粘土がブロック状に混入する部分があり、水田（２層）の下層土として考えられる。

4層　灰褐色シルト

やや粘性が強く、しまりがある。層厚は約10cm を計測するが、南に向かって厚さがわずかに増している。３区では下位に炭酸鉄がブロック状に集積していた。

5層　黒色粗砂

非常に粗い粒子の砂で混入物はほとんど含まない。しまり・粘性ともにない。特に１区での堆積は顕著である。

6層　砂・シルト互層

やや粘性の強い灰色シルトと暗灰色細砂との互層である。中位から下位に堆積するシルトはさらに粘性が強い。

7層　灰色粘土

色調の違いからａはやや褐色を呈すもの、ｂはやや明るい灰色のものとして分けた。両層ともに粘性・しまりは強く、ａにはｂの粘土がブロック状に混入している。ｂでは上層への巻き上げや炭酸鉄が認められ、わずかに砂が含まれる。ａを耕作土、ｂを下層土とすることができるかもしれない。

8層　黒色泥炭

植物遺体が残存している。粘性はあるが、しまりはやや弱い。混入物はほとんど認められない。層厚は５～８ cm である。

9層　暗褐色土

粘性、しまりともにやや欠ける。植物遺体、赤褐色粒子、小礫、砂を含む。1区での堆積が顕著である。1・3区において、部分的ではあるが平面調査を行った。

10層　暗褐色礫混じり土

小礫を多量に含む。粘性は低く、しまりはややある。下位に混入する礫がやや大きい傾向にある。

11層　砂礫

灰色粗砂をベースに小礫が混入している。ベースの粗砂はしまりが強い。

12層　灰色粗砂

11層のベースの粗砂に類似しており、しまりが強い。上層にわずかだが、植物遺体が含まれている。

13層　砂・シルト互層

中粒程度の砂と灰色ないしは褐色のシルトとの互層で層厚約50cmを計測する。シルトの部分は粘性に欠けるものの非常に強くしまっており、植物遺体が認められる。砂の部分は粘性、しまりともにない。含水が多く、湧水が著しい。

14層　シルト・粘性シルト互層

灰色ないし褐灰色の粘性シルトと灰色シルトと互層で層厚は約50cmを計測する。いずれの層も非常に良くしまっており、ラミナが発達している。

15層　褐色シルト～細砂

漸移的に上位から下位にかけてシルトから細砂へ粒子が変化している。しまりが強く、下位には植物遺体が多く含まれている。

16層　灰色シルト・灰色粘性シルト互層

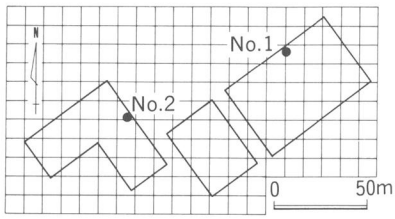
層厚20cmの中に各2層ずつ認められ、いずれもよくしまっている。植物遺体が多く残存しており、粘性シルト部分にはラミナが顕著である。

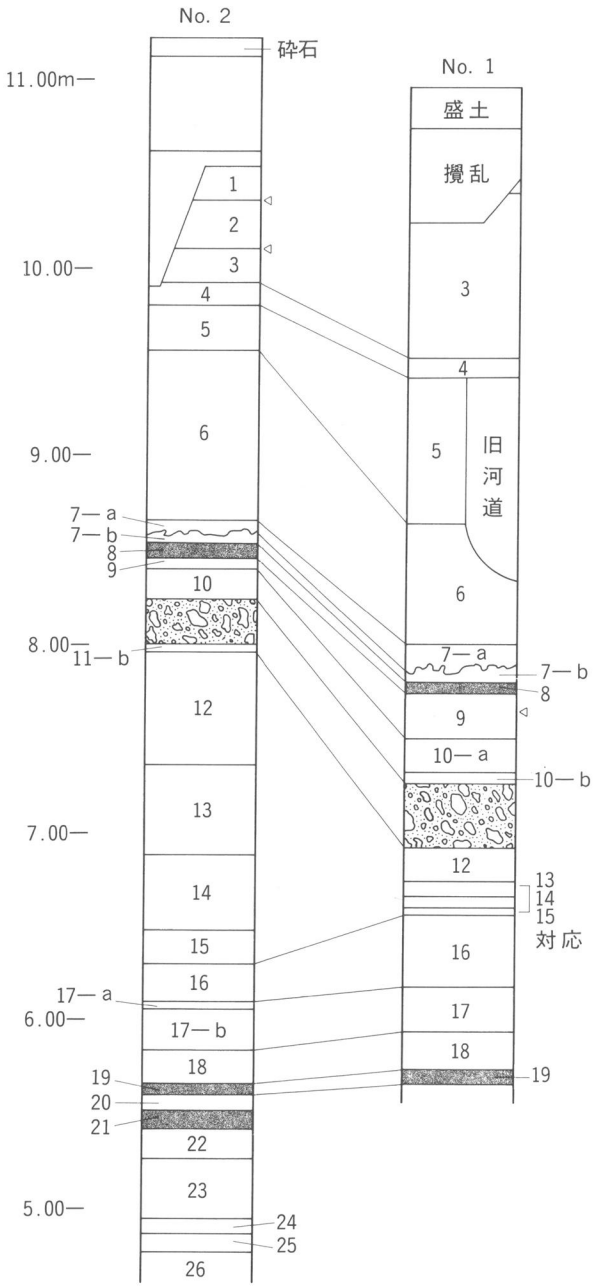
17層　灰色粘土

層厚約20～30cmを計測する。aは腐植土によるラミナが認められる層で、3区でのみ確認することができた。bは非常に粘性、しまりが強く、ラミナが認められ、植物遺体を含んでいる。粘土の質はa，bともに類似している。

18層　灰色粘性シルト

粘性が非常に強いシルト層で、ラミナが発達し、植物遺体を含んでいる。色調は18層と非常に似ている。





第4図　土層柱状図

19層　黒色泥炭

粘性がやや低いが、よくしまった層で、層厚は5～8 cmを計測する。植物遺体が多く認められる。

20層　褐色粘土

層厚は約8～10cmを計測する。粘性、しまりともに強く、混入物はほとんどない。

21層　黒色泥炭

21層以下は3区での確認である。しまりは多少あるものの粘性がやや低い。粒子の細かい砂を多少含んでいる。

22層　褐色粘土

色調および小礫の混入の度合いからａ、ｂの2層に分けたが、両層ともに、しまり、粘性が強い。ａは小礫の混入が少なく、黄褐色の粒子を含んでいる。ｂはやや暗い色調を呈しており、小礫を含んでいる。

23層　灰色粘土

しまり、粘性ともに強い粘土で、混入物はほとんど認められない。

24層　暗褐色泥炭

上位から下位にかけて漸移的に明るい色調に変化する。質的な変化はほとんど認められず、粘性、しまりともに強い。

25層　灰色粘土

やや暗い色調で、層厚は約10cmである。粘性、しまりともに強く、混入物は認められない。

26層　灰色砂

しまりが強い砂層で、上位から下位にかけて粒子が粗くなる傾向がある。

第Ⅳ章　遺構と遺物

第１節　遺構

小鹿杉本堀合坪遺跡では２層上面、２層下面での遺構検出作業を行い、それぞれを第１遺構面、第２遺構面とした。また一部ではあるが、１・３区で９層上面での平面調査を行った。今回の調査では遺構そのものの検出はなかったが、第２次調査時に杭列およびシガラ状遺構の検出が認められたことを考慮して、第３遺構面とした。

１　第１遺構面

２層の灰色砂混じり粘土層で検出した面で、水田遺構、溝状遺構を検出している。全体に攪乱が著しく、検出状況は極めて悪い。

水田遺構（第５～７図　図版３－１～５）

２層を耕作土とした水田である。２層は第１次調査で行ったイネのプラント・オパール分析で4.700個／ｇという高い数値を示している。またこの層は調査区により多少状況は異なるものの遺跡全体に安定的に堆積している層といえよう。先述したように調査区内は攪乱が多く、水田の全体的な様相をつかまえることはできなかったが、比較的残りのよかった２区では、最大比高差25cmで、北東から南西への傾斜が認められる。水田の時期については出土した灰釉陶器や山茶碗から10世紀前半から12世紀前半という幅を持っていたと考えられるが、第２次調査時には近世の遺物も出土していることが報告されており、さらに長期にわたって耕作していた可能性もある。２層中には下層のものと考えられる砂が混入していたが、その砂は巻き上げ痕といったある特定の時期を示す状況ではなく、層中に均質に混入している状態であり、永年にわたる耕作が行なわれていた結果として考えることができよう。この水田に伴う畦畔は２・３区で検出した東西方向のＳＫ201・203、南北方向のＳＫ202・203・301であるが、坪界線ではなく、坪内部の地割畦畔として捉えられるものである。静清平野に施工された広域条里の主軸方位からは２～３°のずれがあるが、概ね踏襲したものと考えられよう。

ＳＫ201（第５・６図　図版３－３）

ＳＫ201はＤ－11、Ｅ－11･12グリッドから検出した畦畔で、西側は調査区外となっている。検出長14.6m，上端幅10～20cm、下端幅27～52cm、高さ約４cmを計測する。全体として西側の幅が狭く、東側の末端で幅が広くなっている。Ｅ－12グリッドで切れており、水口を形成していた可能性が考えられる。主軸方位はＮ－54°－Ｅである。

ＳＫ202（第５・６図　図版３－４）

ＳＫ202は２区の東端に位置する南北畦畔で主軸方位Ｎ－36°－Ｗを計るが、Ｆ－12グリッド以北、Ｅ－13グリッド以南では検出できなかった。また畦畔の東辺は排水溝によって切られており、全体が確認できたのはＦ－13グリッド付近のみである。検出長は11.4m、上端幅12～27cm、下端幅46～55cm、高さ４～５cmを計測する。

ＳＫ203（第５・６図）

ＳＫ201から東に伸びる畦畔で、約40cmの間隔が開いている。検出長7.4m、東側は攪乱により切られており、ＳＫ202との交差関係などは不明であった。上端幅46～54cm、下端幅78～90cm、高さは最も比高差

のある部分で約６cmを計る。主軸方位はＳＫ201と同様Ｎ－54°－Ｅである。

ＳＫ204（第５・６図）

Ｅ－11グリッドで検出した南北方向の畦畔で、ＳＫ201とは交差せず、約８cm程の間隔をもっていた。北側方向は途中で終息してしまい検出した長さは1.5m にすぎない。上端幅48～52cm、下端幅64～75cm、高さは４～５cmを計測する。ＳＫ202とは主軸方位が同一であり、その間隔は約15.6m を計測する。

第５図　２区第１遺構面遺構全体図

ＳＫ301（第７図　図版３－２）

３区Ｆ－４グリッドで検出した南北方向の畦畔である。北側は終息し、また南側は攪乱により切られている。検出長3.4m、上端幅10～18cm、下端幅49～56cm、高さ約12cmを計測する。主軸方位はＮ－36°－Ｗである。

溝状遺構（第５図　図版３－２）

２層上面の溝状遺構で、全ての調査区から検出されている。全て東西方向で、主軸は概ねＮ－54～56°－Ｅと先述した東西畦畔に類似する。幅10～30cm程で、長さは一定しておらず、最長のもので検出長4.7mである。深さは５～12cm程の浅いもので、覆土は全て１層の暗灰色砂質粘土である。第５図および図版３に２区の検出状況を掲載したが、Ｆ・Ｇ－11グリッドおよび東西畦畔ＳＫ201・203を挟んだ南側で顕著であった。これについては畦畔の北側についても存在していたと考えられるが、旧薬科大学の樹木の根により荒れており、明瞭な溝としては検出できなかった。出土遺物がなく時期は限定できないが、ＳＫ201上に形成されたものやＳＫ203を切るものが存在していることから、２層水田よりも後出するものと考えたい。また性格についても馬鍬の痕跡なども考えられたが溝の幅・間隔などから疑問があり、不明とせざるを得なかった。

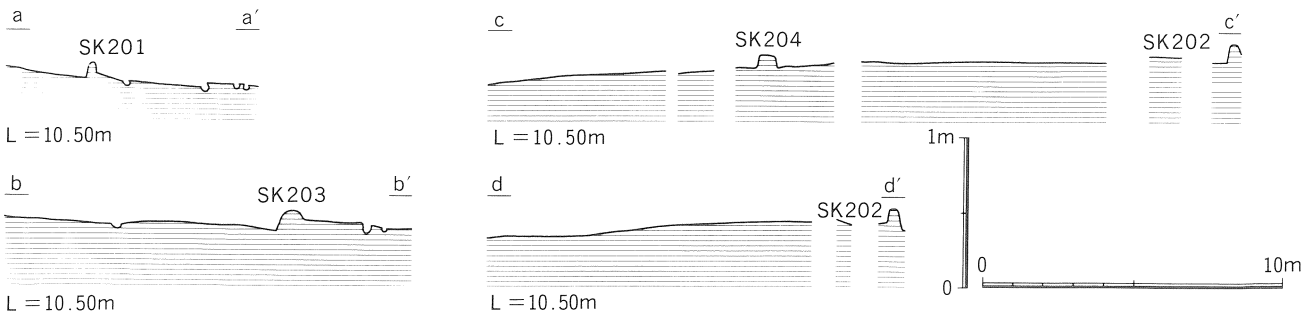
２　第２遺構面（第８図　図版４－１・７－１・８－１）

水田耕作土である２層を除去することにより、水田の下層の状況を調べることを目的として行ったものである。ここでは井戸、土坑、溝状遺構、杭列、擬似畦畔などを検出した。当初想定していなかった集落関連遺構を図らずも検出することになったが、先述したように永年耕作の結果、２層中では生活面を特定することができなかった。

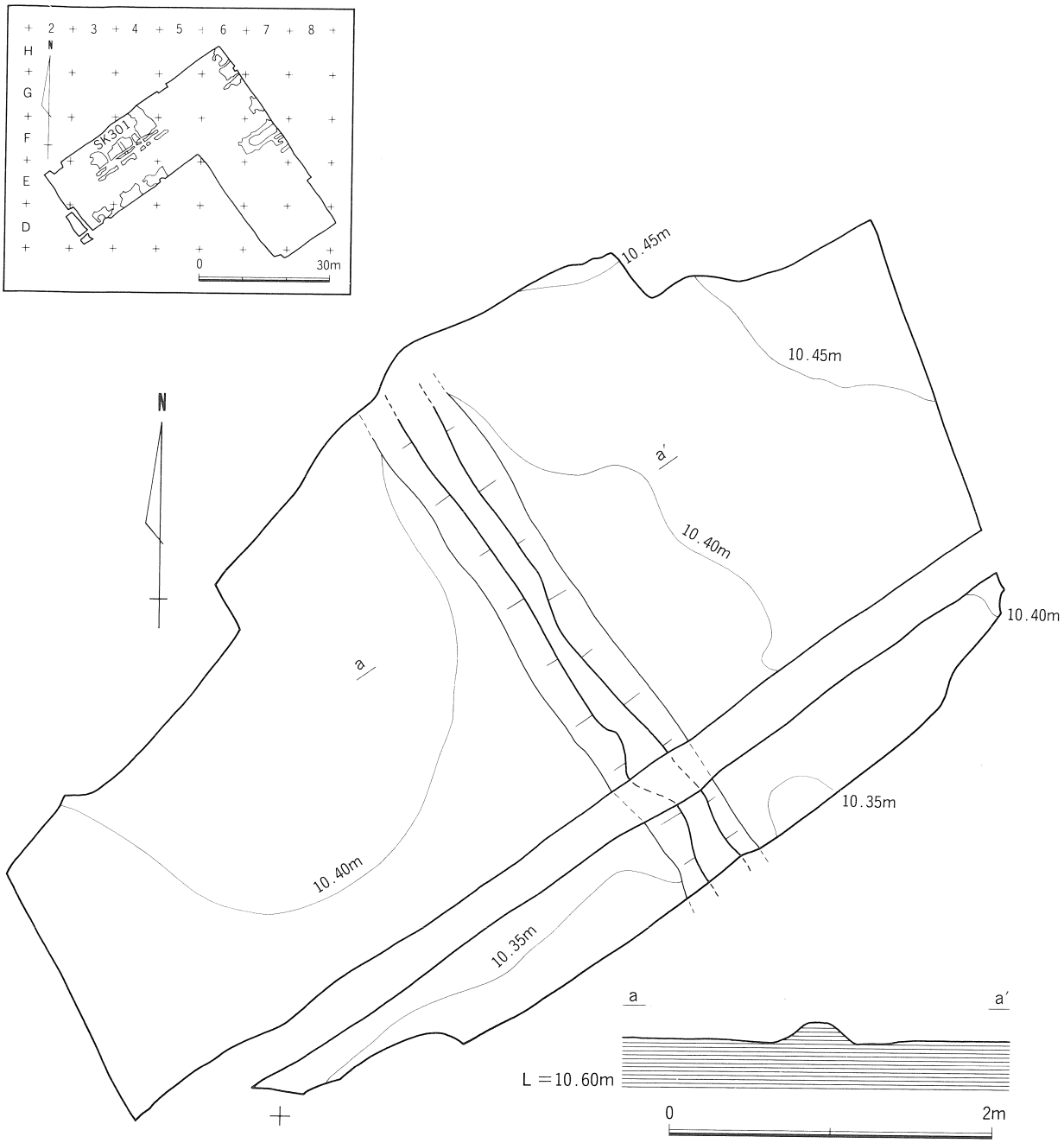
井　戸

ＳＥ162（第９図　図版５）

１区のＨ－15グリッドから検出した井戸である。径2.6m の円形の掘り方を持つ。掘り方は検出面から約60cmまでは垂直に近く、それより下位はすり鉢状に掘り込むが形は均等ではなく、西側が緩やかである。また検出面下1.2m ほどから水溜めが設けられている。井戸側は北東寄りに組まれており、一辺約90cm程の正方形を呈すと考えられるが、北辺は土圧により内側に倒れ込んでいる。宇野隆夫氏による分類（宇野　1982）ＢIV類縦板組隅柱横桟どめに該当する。隅柱は長さ1.12～1.28m、幅12.5～18.7cm、厚さ7.0～7.9cmの角柱で、２段にホゾ穴を開けており、横桟の仕口はいわゆる包込ホゾで組まれている。桟木は、径5.0～5.7m を計測する丸太材を用いている。縦板は２重ないし３重に打たれており、幅12～30cm、厚さ２～４cmの割り材である。遺物の項で述べるように先端の加工から３種類に分類したが、用い



第６図　２区第１遺構面エレベーション図



第７図　畦畔SK301実測図

られた箇所との相関関係は認められなかった。井戸側は粘土を多く含む中粒砂を裏込めとして固定されている。水溜めには復元径50.3cmの曲物が用いられていた。Ⅴ層以下が湧水層となっているが、特にⅦ層は現在でも激しく水が湧き出しているため、井戸底は明らかにすることができなかった。井戸側からは灰釉陶器片、土師器片、曲物の底板、楔、糸巻具、板状木製品、棒状木製品、桃の種などが出土したが、土器片はいずれも小片であった。掘り方の裏込め内からは灰釉陶器、須恵器、木片などが出土している。井戸の時期については掘り方内出土の遺物がより掘削時期に近いと考え、遺物から９世紀後半以降としておきたい。

土　坑

ＳＦ110（第11図）

１区Ｇ－14グリッドに位置する。長径1.07m、短径0.98m、深さ約14cmを計測する。底部は平坦ではなく、浅いボウル状をなす。覆土は３層に分かれるが、１の灰色砂混じり粘土は砂をブロック状に含んでおり、竪根が発達していた。遺物の出土はなく、時期の判断もできなかった。

ＳＦ118（第10図　図版６－１）

１区北側のＩ－14グリッドから検出したものである。径1.85m、検出面からの深さ64cmである。検出面から約40cmまでは緩やかに掘り込むが、それ以下はほぼ垂直で円筒状となる。覆土は７層に分かれるが、１～５まで竪根が認められた。また５～７のシルトが堆積し、土坑が半分ほど埋まった段階で、石が多量に出土している。石は熱を受けており、赤化あるいは煤の付着が顕著であった。覆土中には熱を受けた痕跡が認められなかったことから、他所で加熱した石を投棄したものと考えられる。遺物は灰釉陶器、土師器、陶器、山茶碗、砥石が出土している。このうち山茶碗は２層水田からの流れ込みの可能性が高い。主体をなしていた灰釉陶器から10世紀後半代に位置づけておきたい。

ＳＦ120（第10図　図版６－２）

１区Ｆ－14グリッドに位置する。北東側の一部は攪乱により上端を欠いているが、円形を呈すると考えて良いであろう。残存部の径1.7m、検出面からの深さ約70cmを計測する。掘り方はほぼ垂直の円筒状をなしており、底部も平坦である。覆土は６層に分層できるが、基本的に砂混じりの粘土であり、砂および炭化物の混入の度合いによって分層したが、下層ほど砂の混入が少ない傾向にある。また１・２層中からは河原石が出土している。遺物は灰釉陶器、陶器、土師器、緑釉陶器が出土している。遺物から一応10世紀代としておきたい。

ＳＦ131（第10図　図版６－３・４）

１区の南側Ｆ－16グリッドに位置する土坑であるが、南側は排水溝によって、北側は攪乱により、上端を欠いており、下端から円形と判断した。残存部分の径1.5m、検出面からの深さは約55cmまで確認したが、湧水が激しく底に関しては正確さを欠いている可能性がある。覆土は全体を９つに分層したが、上位の２層は他の土坑と同様に砂混じりの粘土であるが、３層以下は炭化物・腐植土を多く含む土層である。特に３層は黒色の炭化物からなる層と褐色の有機質からなる層とが互層をなしていた。また４層中では、炭化物からなる薄い層を包含し、６・８層では腐植土が堆積している。遺物は灰釉陶器、陶器といった土器のほか、杓子、匙状木製品、下駄などの木製品が出土している。年代は出土した灰釉陶器から11世紀前半に位置づけられよう。

ＳＦ132（第11図）

１区Ｅ－15グリッドから検出した土坑で、北東部分の上端を攪乱によって欠くが、円形を呈したものであろう。残存部の径約70cm、検出面からの深さは約18cmを計測する浅いものである。覆土は４層に分かれるが、１～３まではしまりの強い砂混じりの粘土であるが、１には炭化物が多く含まれる。遺物は灰釉碗の小片が出土したが、時期を決めることはできなかった。

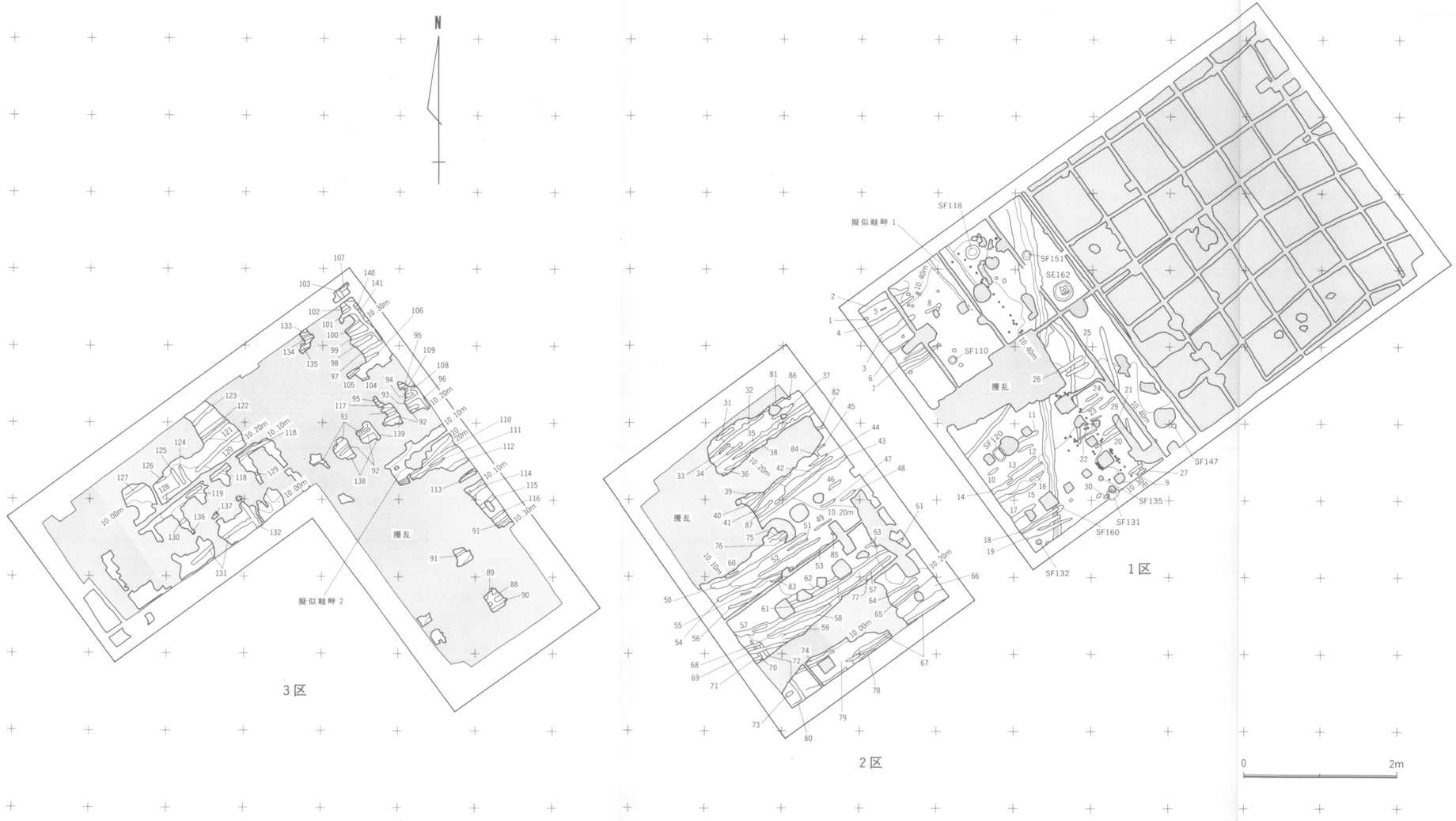
ＳＦ135

Ｆ－16グリッドに位置する。径約65cmの不正円形を呈する。検出面からの深さは14cmで浅いボウル状をなす。覆土はシルト混じりの砂でわずかに粘性を有す。遺物は灰釉碗の小片、木片を出土している。

ＳＦ147

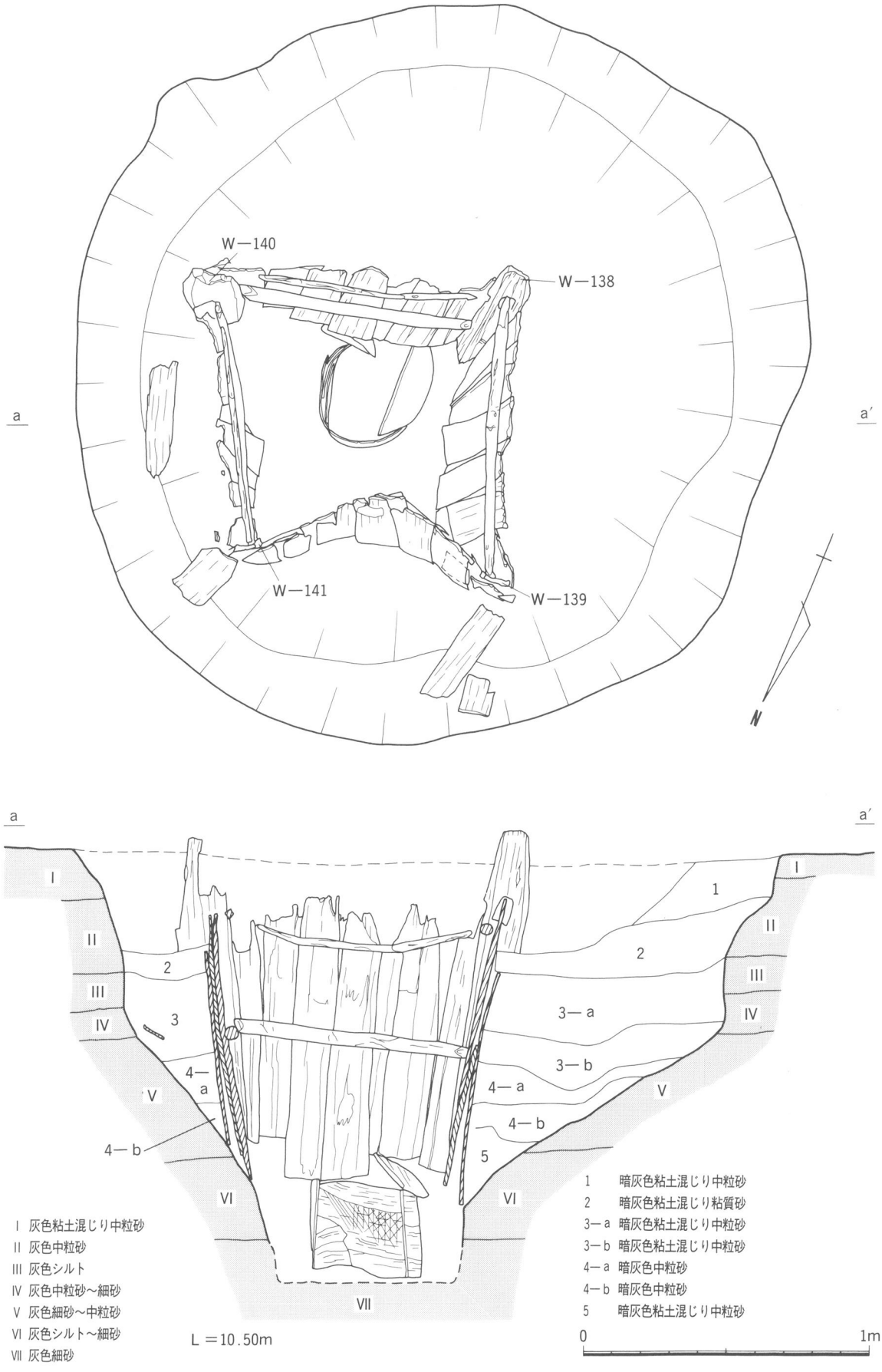
１区Ｆ・Ｇ－17グリッドに位置する。径約65cm、深さ８cmの円形を呈する。覆土は３層に分かれ、上位２層は灰色砂混じり粘土、最下層は灰色粘土混じり砂である。遺物の出土は認められなかった。

ＳＦ151（第10図）



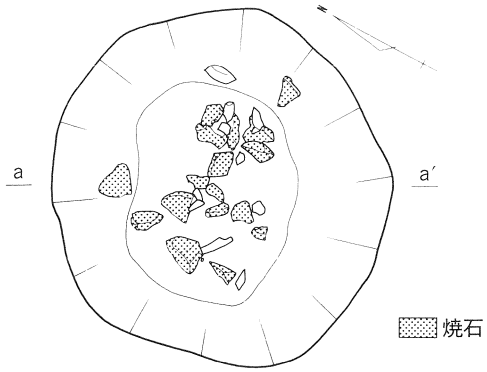
番号	遺跡名(溝)	番号	遺跡名(溝)	番号	遺跡名(溝)	番号	遺跡名(溝)
1	SD101	37	SD209	73	SD245	109	SD324
2	SD102	38	SD210	74	SD246	110	SD325
3	SD103	39	SD211	75	SD247	111	SD326
4	SD104	40	SD212	76	SD248	112	SD327
5	SD105	41	SD213	77	SD249	113	SD328
6	SD106	42	SD214	78	SD250	114	SD329
7	SD107	43	SD215	79	SD251	115	SD330
8	SD112	44	SD216	80	SD252	116	SD331
9	SD119	45	SD217	81	SD253	117	SD332
10	SD121	46	SD218	82	SD254	118	SD333
11	SD122	47	SD219	83	SD255	119	SD334
12	SD123	48	SD220	84	SD256	120	SD335
13	SD124	49	SD221	85	SD257	121	SD336
14	SD125	50	SD222	86	SD258	122	SD337
15	SD126	51	SD223	87	SD260	123	SD338
16	SD127	52	SD224	88	SD303	124	SD339
17	SD128	53	SD225	89	SD304	125	SD340
18	SD129	54	SD226	90	SD305	126	SD341
19	SD130	55	SD227	91	SD306	127	SD342
20	SD136	56	SD228	92	SD307	128	SD343
21	SD137	57	SD229	93	SD308	129	SD344
22	SD138	58	SD230	94	SD309	130	SD345
23	SD139	59	SD231	95	SD310	131	SD346
24	SD140	60	SD232	96	SD311	132	SD347
25	SD141	61	SD233	97	SD312	133	SD348
26	SD142	62	SD234	98	SD313	134	SD349
27	SD145	63	SD235	99	SD314	135	SD350
28	SD148	64	SD236	100	SD315	136	SD351
29	SD149	65	SD237	101	SD316	137	SD352
30	SD153	66	SD238	102	SD317	138	SD353
31	SD203	67	SD239	103	SD318	139	SD354
32	SD204	68	SD240	104	SD319	140	SD355
33	SD205	69	SD241	105	SD320	141	SD356
34	SD206	70	SD242	106	SD321		
35	SD207	71	SD243	107	SD322		
36	SD208	72	SD244	108	SD323		

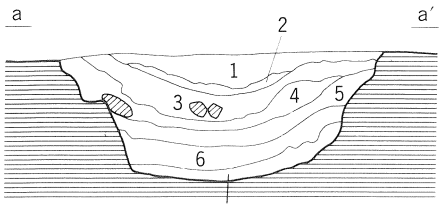
第 8 図　第 2 遺構面遺構全体図



第９図　井戸SE162実測図

SF118

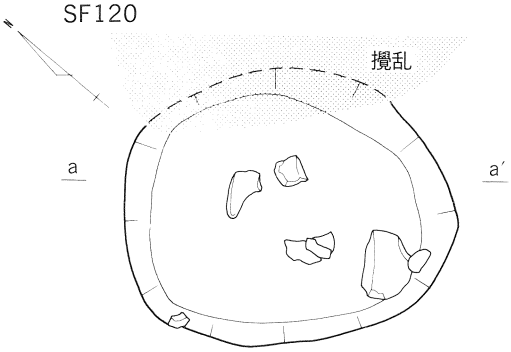


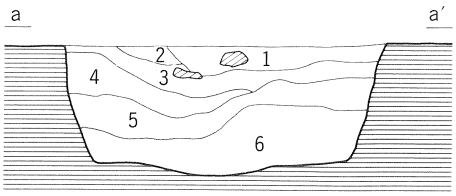


L＝10.50m

1 褐色粘土
2 茶褐色粘土混じり砂
3 褐灰色粘土
4 褐灰色粘土混じり砂
5 灰色砂混じりシルト
6 灰色シルト
7 暗灰色シルト

SF120

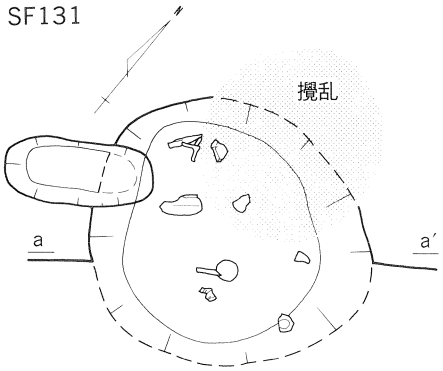


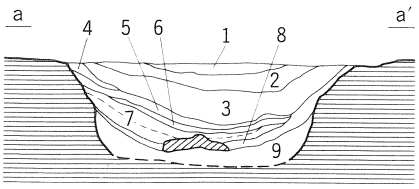


L＝10.40m

1 灰色砂混じり粘土(砂の混入多い)
2 灰色砂混じり粘土
3 灰色砂混じり粘土(炭化物少ない)
4 灰色砂混じり粘土(炭化物やや多い)
5 明灰色砂混じり粘土
6 明灰色粘土

SF131

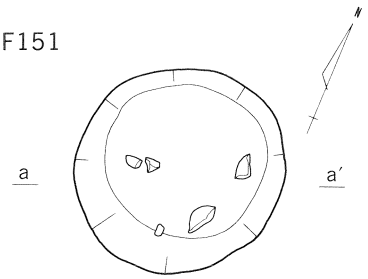


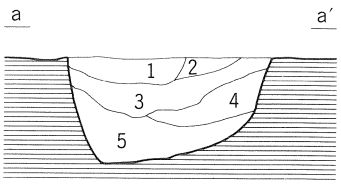


L＝10.40m

1 暗灰色砂混じり粘土
2 暗灰色砂混じり粘土(砂の混入多い)
3 褐色有機質土
4 灰色混じり粘土
5 灰色粘質シルト
6 褐色腐植土
7 褐色粘質砂
8 褐色腐植土(粘土ブロック含む)
9 灰色砂混じり粘土

SF151

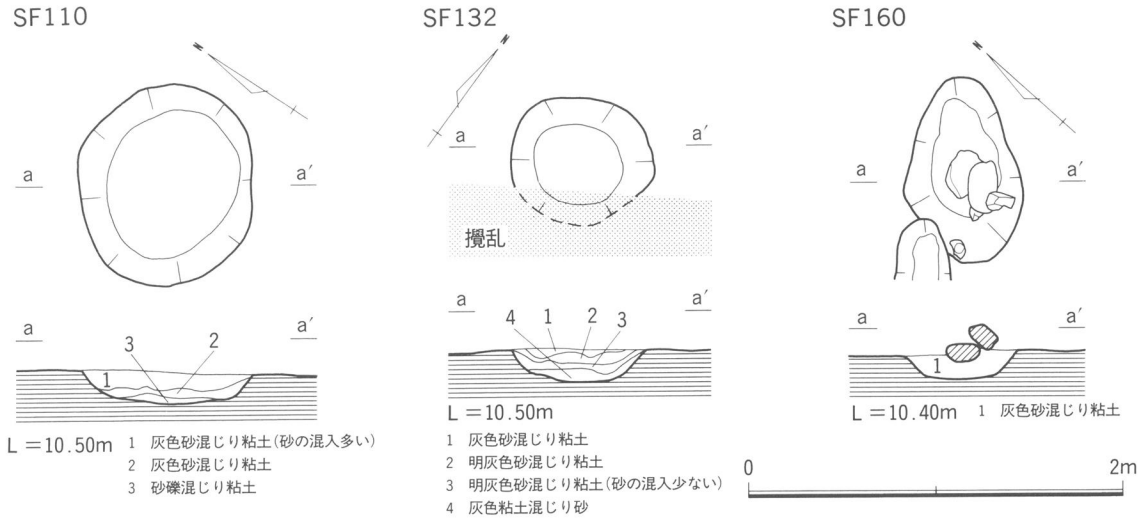




L＝10.50m

1 暗灰色砂混じり粘土
2 暗灰色砂混じりシルト
3 暗灰色砂混じり粘質シルト
4 灰褐色シルト
5 暗褐色腐植土

第10図　土坑SF118・120・131・151実測図



第11図　土坑SF110・132・160実測図

1区北側のⅠ－15グリッドから検出された土坑である。最大径1.1m、検出面からの深さ約65cmを計測する。円筒状に掘り込んであるが、西側がより深い。覆土は5層に分かれ、上層は砂混じりの粘土、2～4の中層はシルトが主体となって堆積している。下層の5には暗灰色腐植土が厚く堆積しており、同層の上位から石が検出された。遺物は灰釉陶器、土師器を出土しているが、いずれも小片のため、時期の特定はできなかった。

ＳＦ160（第11図）

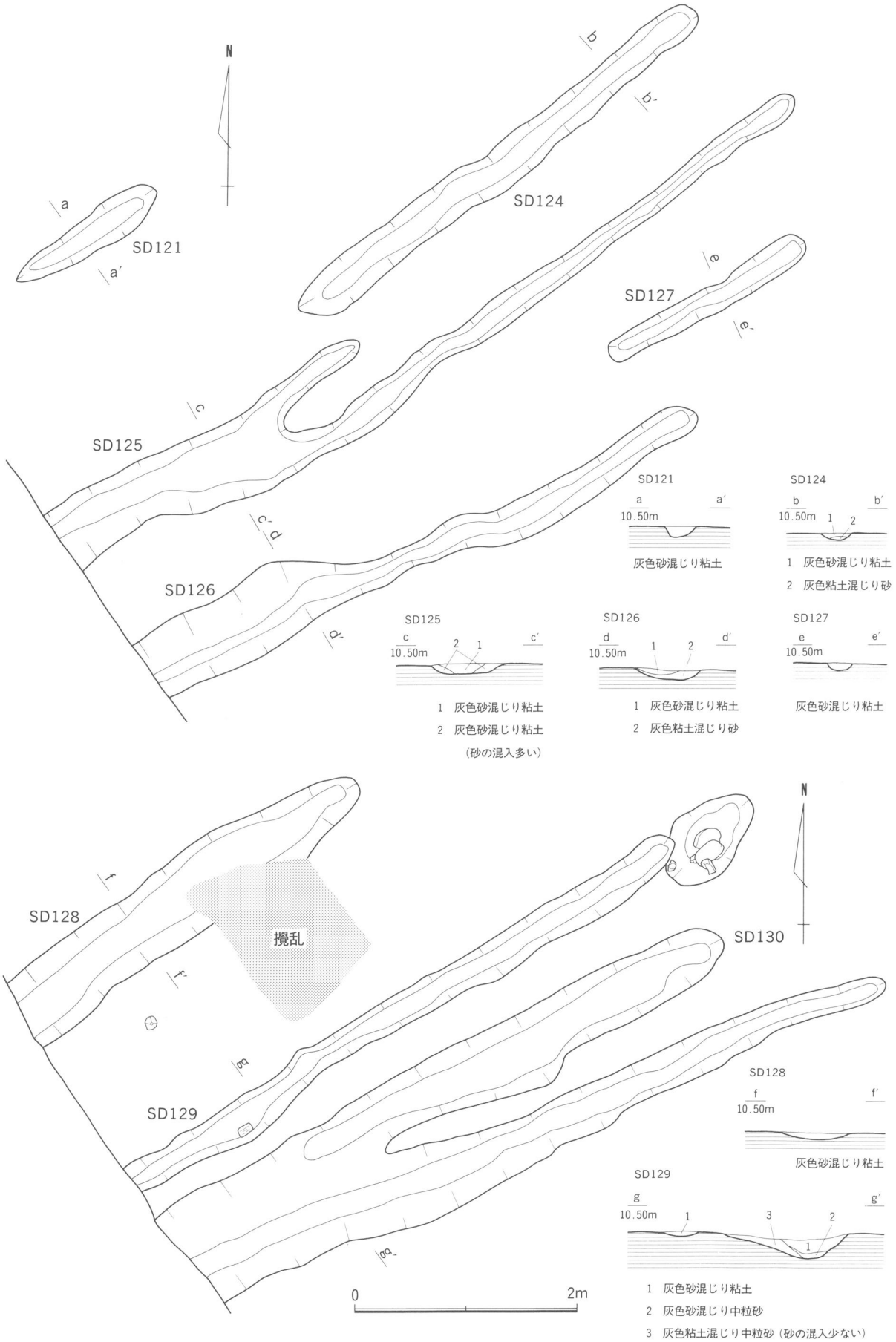
1区の南東端Ｅ－15に位置するやや南側が膨らむ楕円形を呈する土坑である。南東側をＳＤ129に切られている。長径98cm、短径64cm、検出面からの深さ約10cmを計測する。覆土は灰色砂混じり粘土のみである。河原石が粗雑に積まれたような状況で出土したが、最上位にあった石のピークが検出面よりも12cmほど高いことから、本来2層中で形成された土坑と考えられる。遺物は中型の灰釉陶器碗を出土しており、10世紀末から11世紀前半に位置づけておきたい。

溝状遺構（第12～16・18図　図版6～8）

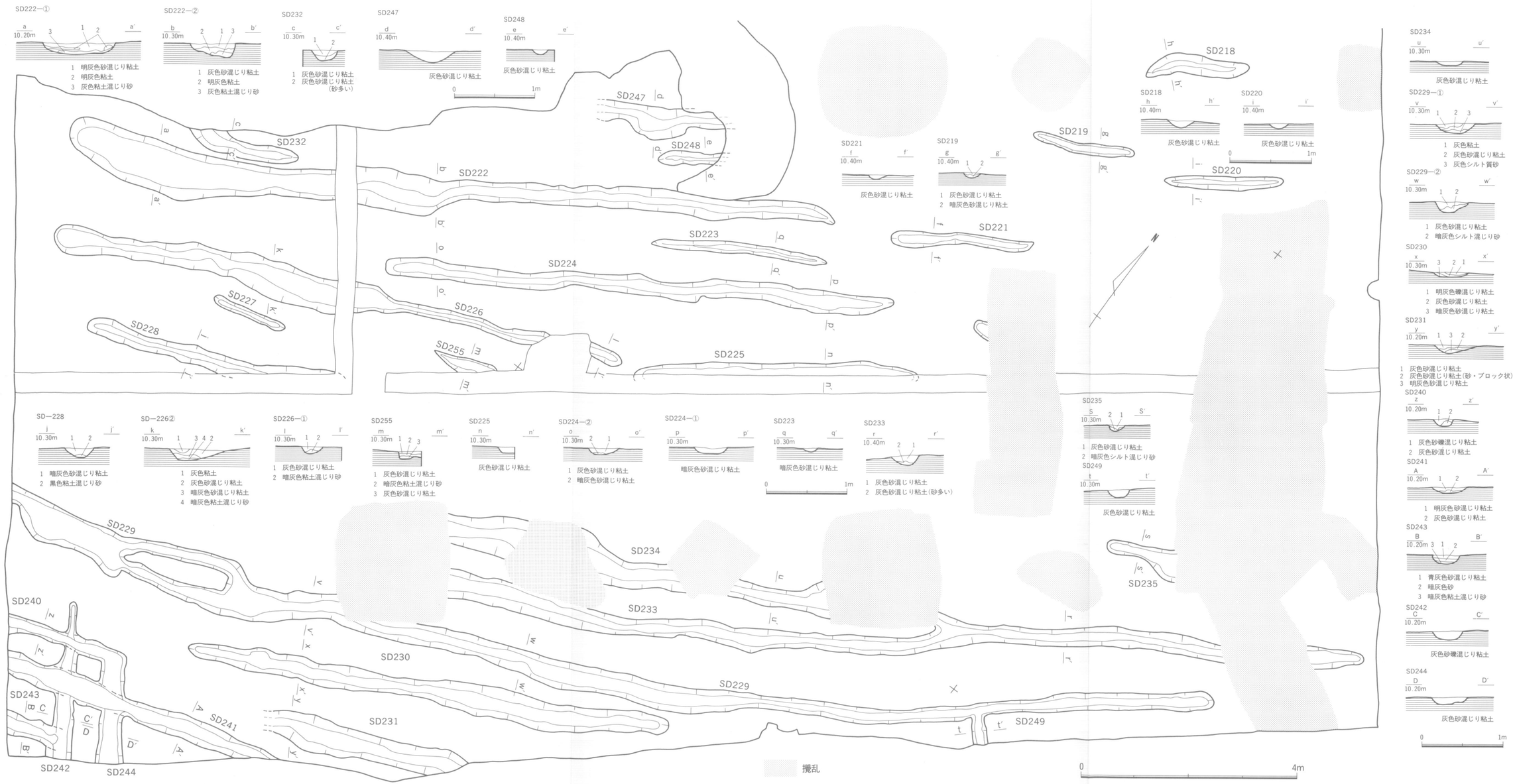
各調査区から検出されている溝状遺構で、合計で141条が確認された。また第11トレンチの調査でも断面で溝状の落ち込みを確認しており、1区の北東を除く全域に広がっていた可能性が考えられる。各区の内訳は1区30条、2区57条、3区54条である。しかし、調査範囲外となったり攪乱などによる破壊などから全容が分かるのは35条にすぎない。その内、最短のものはＳＤ105の0.73m、最長のものはＳＤ222の15.09mである。しかし、ＳＤ229のように調査区外となっているが残存長20.5mを計測するものもある。また幅も11～166cmと規模の差が大きく、平均では44cmとなる。また深さについては計測地点による相違が大きく、一概にいうことはできないが、2～48cm、平均で10.6cmである。規模についての企画性はあまりないと考えてよさそうである。

方位については東西方向が127条、南北方向が14条となっている。またＳＤ208のように検出部分が短く、便宜上南北方向としたが、東西方向に含めても良いものもあり、圧倒的に東西方向が卓越している。溝の主軸方位についてはカーブするものなどもあり、正確な数値としては表現しにくいが、東西溝の方向についてはＮ－30°－ＥからＮ－82°－Ｅ、また南北方向もＮ－27°－ＷからＮ－86°－Ｗとなっており、ばらつきが大きい。

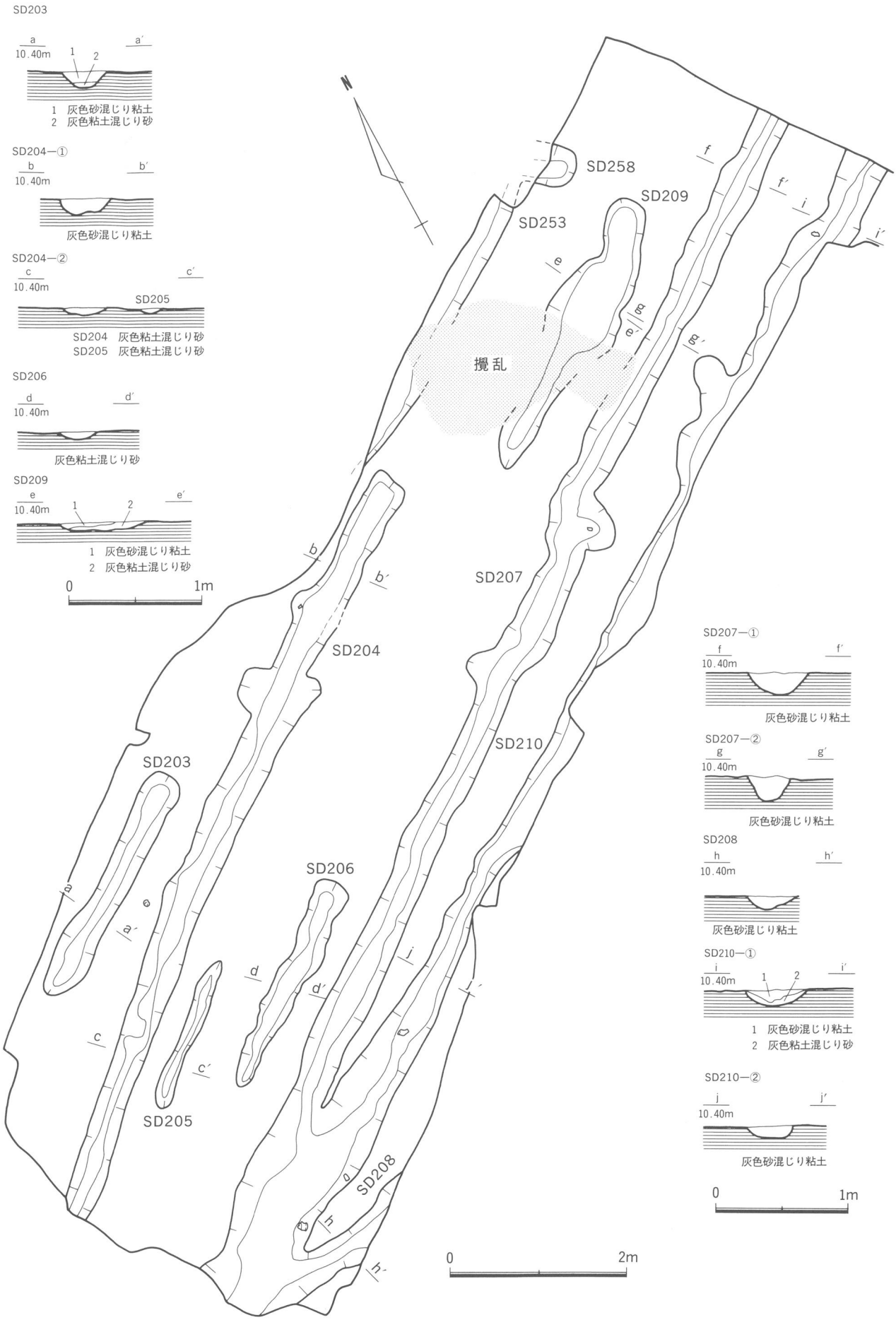
覆土は遺構による相違はあるものの基本的には灰色砂混じり粘土と灰色粘土混じり砂からなっており、



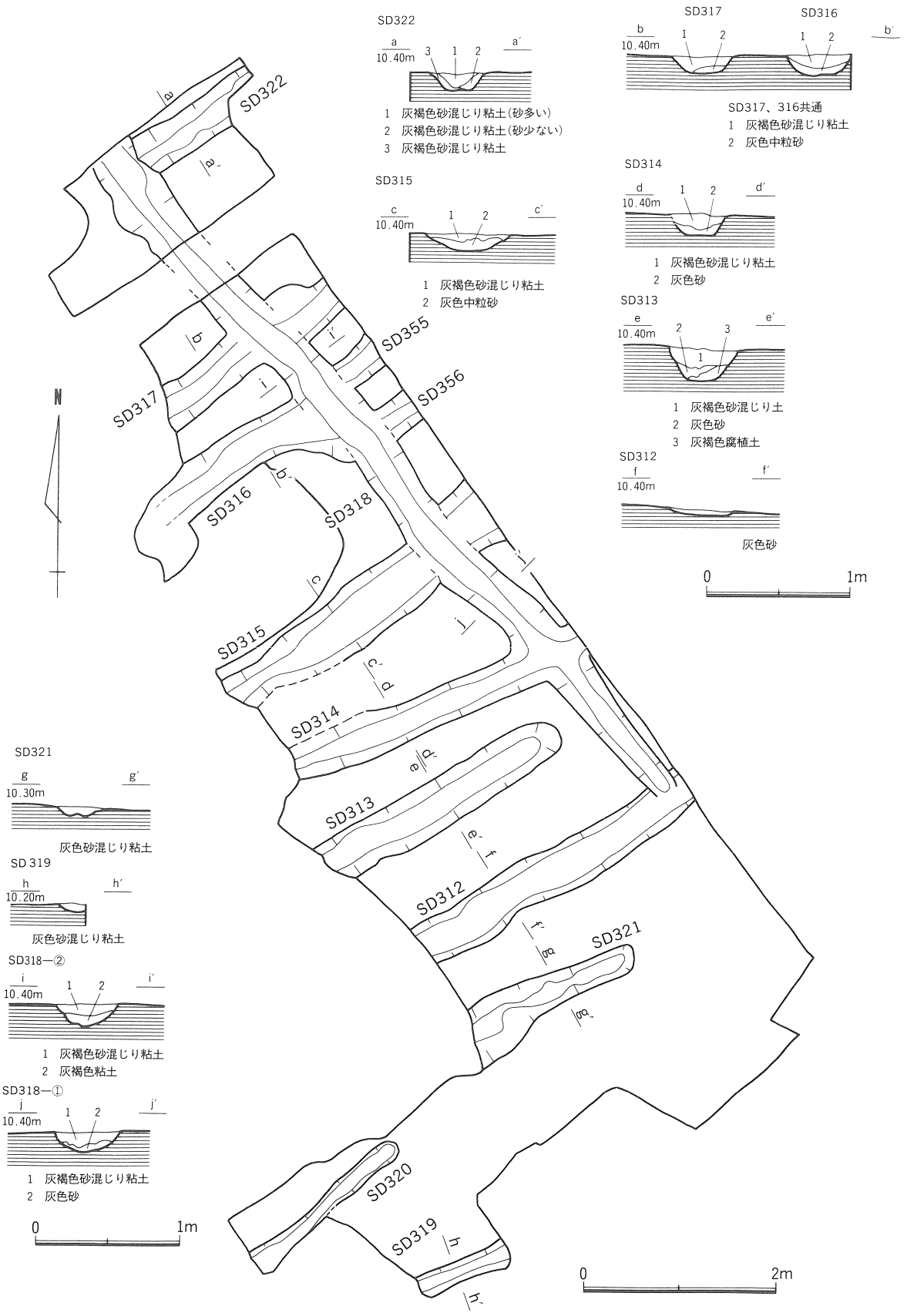
第12図　溝状遺構SD121～130実測図



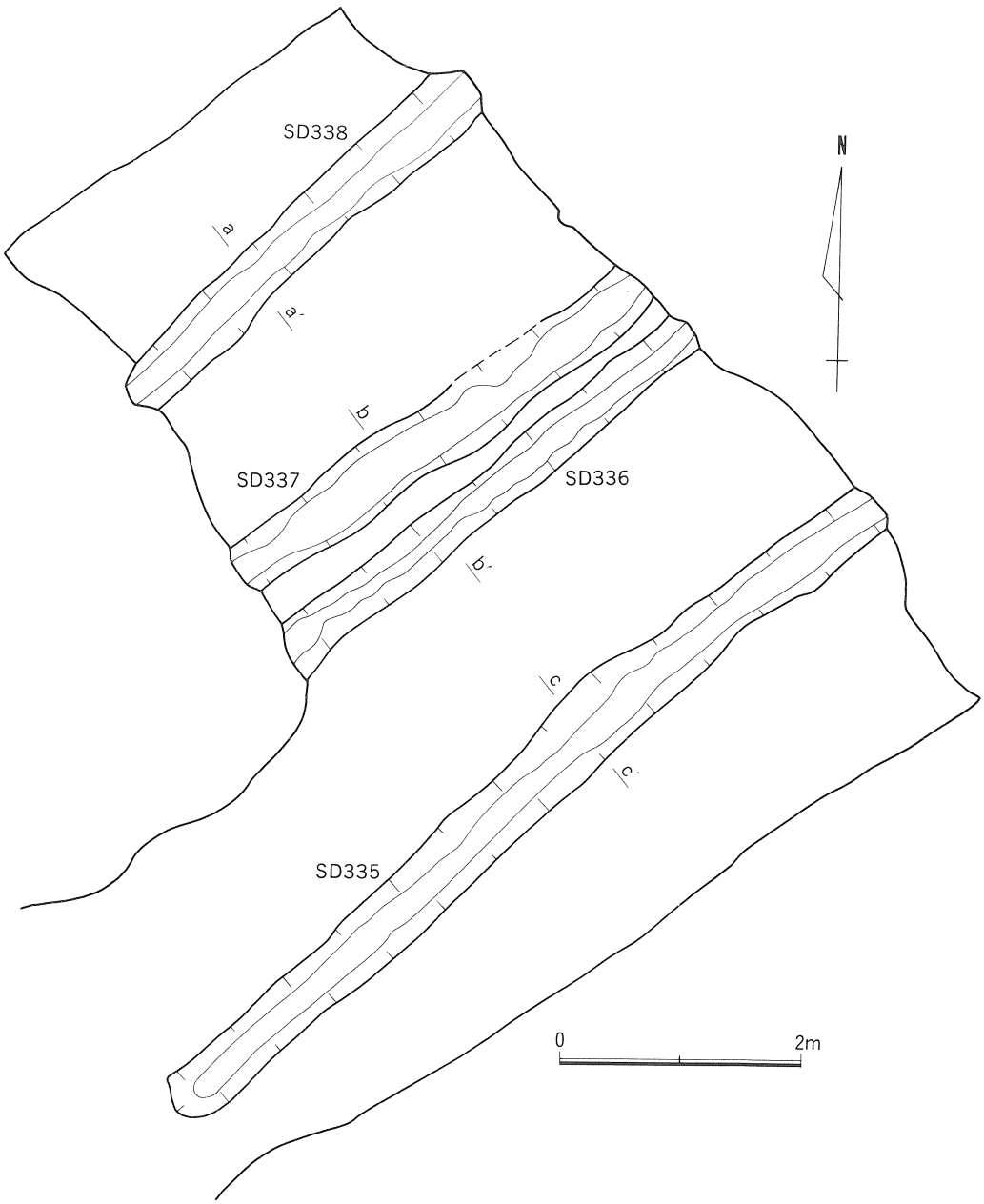
第13図　溝状遺構SD218～226・228～235・240～244・247～249実測図

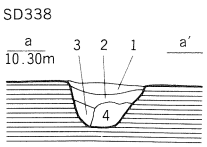


第14図　溝状遺構SD203～210・253・258実測図

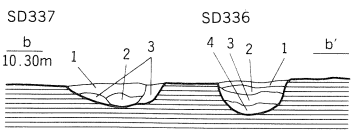


第15図　溝状遺構SD312～321・355・356実測図



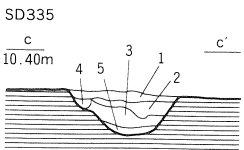


1 灰色砂混じり粘土
2 灰色粘土(しまり強い)
3 灰色粘土
4 暗灰色粘土混じり砂



SD337
1 灰色粘土
2 灰色砂混じり粘土
3 灰色粘土混じり砂

SD336
1 灰色砂混じり粘土
2 灰色砂混じり粘土(砂多い)
3 灰色砂混じり粘土(しまり強い)
4 灰色粘土混じり砂



1 灰色砂混じり粘土
2 灰色砂混じり粘土(砂多い)
3 灰色砂混じり粘土(しまり強い)
4 灰色砂
5 灰色粘土混じり砂

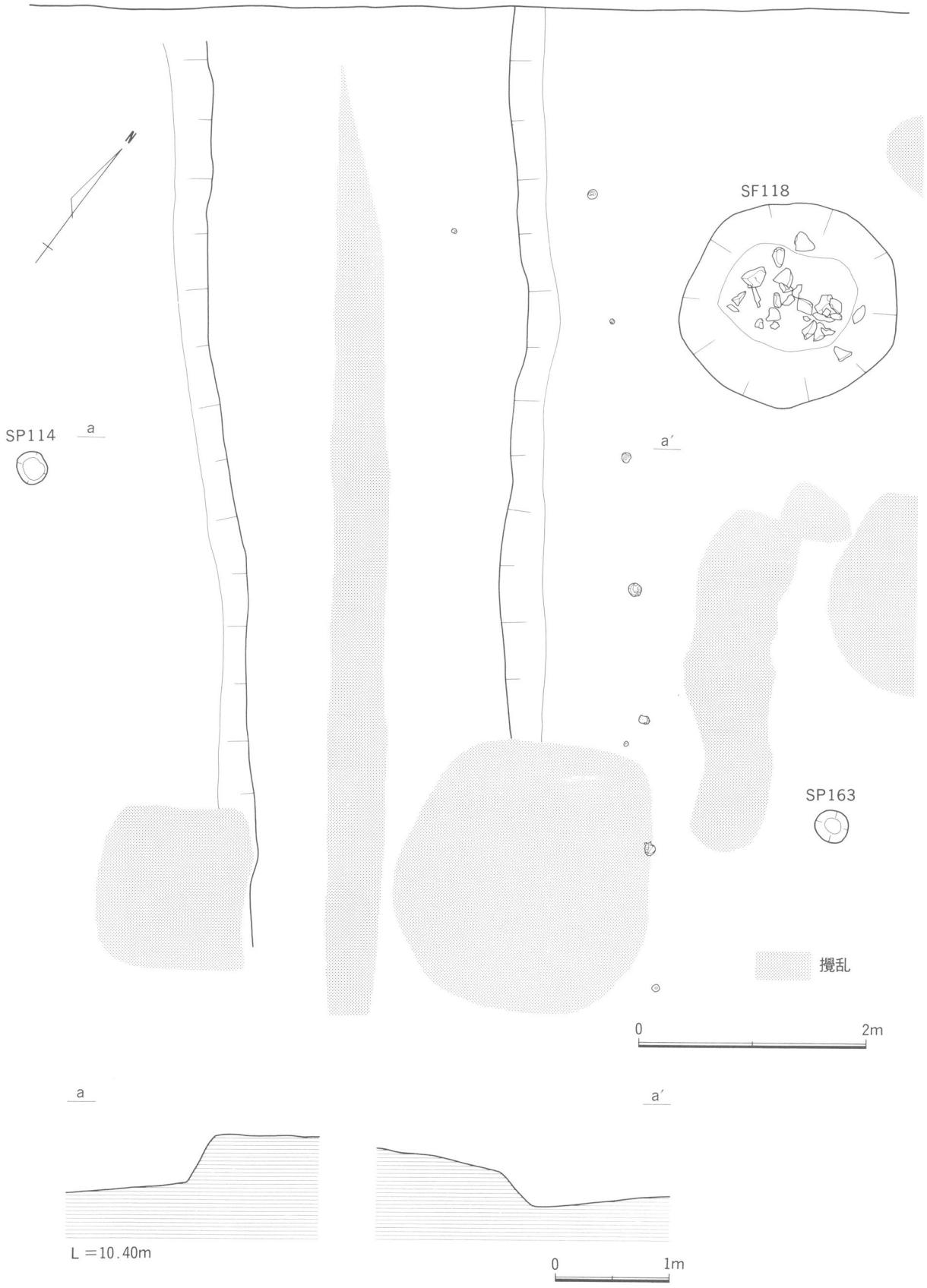
第16図　溝状遺構SD335～338実測図

表２　溝状遺構計測表

番号	遺構名	区	グリッド	長さ(m)	幅　(m)	深さ(cm)	主軸方位	覆　　土	遺　　物	挿図
1	SD-101	1	H-13	(0.43)	0.36	9	N60°E	①灰色砂混じり粘土		
2	SD-102	1	H-13	(6.70)	1.10	9	N60°E	①灰色砂混じり粘土		
3	SD-103	1	H-13	(5.53)	0.82	6	N55°E	①灰色砂混じり粘土　②灰色粘土混じり中粒砂		
4	SD-104	1	H-13	(6.90)	0.48	7	N60°E	①灰色砂混じり粘土　②灰色粘土混じり砂		
5	SD-105	1	H-13	0.73	0.17	4	N65°E	①灰色砂混じり粘土		
6	SD-106	1	G･H-13	(3.04)	0.50	6	N50°E	①暗灰色粘質砂混じり粘土		
7	SD-107	1	G･H-13･14	(6.03)	0.42	17	N65°E	①灰色砂混じり粘土　②灰色砂混じり粘土(砂多い) ③灰色粘土混じり砂		
8	SD-112	1	H-13･14	2.30	0.40	3	N60°E	①灰色粘土混じり砂　②暗灰色粘質砂		
9	SD-119	1	F-16	2.20	0.27	7	N53°E	①灰色砂混じり粘土		
10	SD-121	1	F-14	1.48	0.29	10	N56°E	①灰色砂混じり粘土		12
11	SD-122	1	F-15	(3.00)	0.50	8	N60°E	①灰色砂混じり粘土　②灰色砂混じり粘土(砂多い)		
12	SD-123	1	F-15	2.21	0.28	8	N60°E	①灰色粘土　②灰色砂混じり粘土		
13	SD-124	1	F-14･15	4.41	0.28	8	N53°E	①灰色砂混じり粘土　②灰色砂混じり粘土		12
14	SD-125	1	F-14･15	(7.66)	0.50	6	N53°E	①灰色砂混じり粘土　②灰色砂混じり粘土(砂多い)		12
15	SD-126	1	E･F-14/F-15	(5.38)	0.60	12	N58°E	①灰色砂混じり粘土　②灰色粘土混じり砂		12
16	SD-127	1	F-15	2.20	0.22	5	N60°E	①灰色砂混じり粘土		12
17	SD-128	1	E-14･15	(3.67)	0.57	5	N55°E	①灰色砂混じり粘土		12
18	SD-129	1	E-15	(5.77)	0.34	6	N57°E	①灰色砂混じり粘土	木片	12
19	SD-130	1	E-15	(6.80)	1.66	16	N65°E	①灰色砂混じり粘土　②灰色粘土混じり中粒砂 ③灰色粘土混じり中粒砂(粘土ブロック混入)		12
20	SD-136	1	F-16	(3.81)	0.43	11	N57°E	①灰色砂混じり粘土　②灰色砂混じり粘土(砂多い) ③灰色中粒砂		
21	SD-137	1	F-16	(2.03)	0.41	7	N55°E	①灰色砂混じり粘土　②灰色中粒砂(粘土ブロック混入)		
22	SD-138	1	F-15･16	2.26	0.27	14	N60°E	①灰色砂混じり粘土　②灰色中粒砂　③灰色シルト		
23	SD-139	1	G-15･16	3.33	0.30	11	N53°E	①灰色砂混じり粘土　②灰色砂混じり粘土(砂多い) ③灰色中粒砂(粘土ブロック混入)		
24	SD-140	1	G-15･16	1.80	0.26	11	N55°E	①灰色砂混じり粘土(砂少ない)　②灰色砂混じり粘土		
25	SD-141	1	G-15	3.36	0.45	7	N60°E	①灰色砂混じり粘土(粘性強い)　②灰色砂混じり粘土		
26	SD-142	1	G-15	(3.74)	0.50	9	N57°E	①灰色砂混じり粘土　②灰色砂混じり粘土(砂多い)		
27	SD-145	1	F-16	1.29	0.35	10	N57°E	①灰色砂混じり粘土		
28	SD-148	1	G-15･16	(1.58)	0.11	6	N63°E	①灰色砂混じり粘土　②灰色粘土混じり中粒砂 ③灰色砂混じり粘土　④灰色シルト		
29	SD-149	1	G-16	2.41	0.12	6	N50°E	①灰色砂混じり粘土　②灰色砂混じり粘土(砂多い)		
30	SD-153	1	F-16	(0.55)	0.45	13	N62°E	①灰色砂混じり粘土		
31	SD-203	2	F-11	2.79	0.35	9	N58°E	①灰色砂混じり粘土　②灰色粘土混じり砂		14
32	SD-204	2	F･G-11	(8.99)	0.37	9	N50°E	①灰色砂混じり粘土		14
33	SD-205	2	F-11	1.77	0.17	3	N50°E	①灰色粘土混じり中粒砂		14
34	SD-206	2	F-11	2.52	0.34	7	N51°E	①灰色粘土混じり砂		14
35	SD-207	2	F･G-11/G-12	(14.63)	0.45	16	N53°E	①灰色砂混じり粘土		14
36	SD-208	2	F-11	(2.25)	0.38	12	N82°E	①灰色砂混じり粘土		14
37	SD-209	2	G-11･12	3.30	0.68	5	N55°E	①灰色砂混じり粘土　②灰色粘土混じり砂		14
38	SD-210	2	F-11･12/G-12	(14.62)	0.48	9	N58°E	①灰色砂混じり粘土　②灰色粘土混じり砂		14
39	SD-211	2	F-11	(1.56)	0.51	10	N55°E	①暗灰色粘土混じり砂		
40	SD-212	2	E･F-11	(2.77)	0.26	4	N50°E	①暗灰色粘土混じり砂		
41	SD-213	2	E-11/F-11･12	(6.90)	0.28	9	N45°E	①青灰色砂混じり粘土　②明灰色砂混じり粘土		
42	SD-214	2	F-11･12	9.47	1.06	2	N49°E	①灰色砂混じり粘土		
43	SD-215	2	E-11･12/F-12	(14.0)	0.72	5	N52°E	①灰色砂混じり粘土　②暗灰色粘土混じり砂		
44	SD-216	2	F-12	2.73	0.30	3	N55°E	①灰色砂混じり粘土		
45	SD-217	2	F-12	(1.79)	0.30	16	N55°E	①灰色砂混じり粘土		
46	SD-218	2	F-12	1.90	0.44	9	N55°E	①灰色砂混じり粘土		13
47	SD-219	2	E-12	1.93	0.21	6	N63°E	①灰色砂混じり粘土　②暗灰色砂混じり粘土		13
48	SD-220	2	E･F-12	2.19	0.21	6	N55°E	①灰色砂混じり粘土		13
49	SD-221	2	E-12	2.60	0.23	5	N57°E	①灰色砂混じり粘土		13
50	SD-222	2	D-11/E-11･12	15.09	0.92	17	N58°E	①灰色砂混じり粘土　②暗灰色砂混じり粘土 ③暗灰色粘土混じり砂		13
51	SD-223	2	E-12	3.23	0.18	4	N60°E	①暗灰色砂混じり粘土		13
52	SD-224	2	D-11/E-11･12	9.38	0.40	10	N58°E	①灰色砂混じり粘土　②暗灰色砂混じり粘土		13
53	SD-225	2	E-12	(5.27)	0.20	7	N55°E	①灰色砂混じり粘土		13

番号	遺構名	区	グリッド	長さ(m)	幅 (m)	深さ(cm)	主軸方位	覆　土	遺　物	挿図
54	SD-226	2	D-11/E-11・12	10.72	0.68	14	N66°E	①灰色粘土　②灰色砂混じり粘土 ③暗灰色砂混じり粘土　④暗灰色粘土混じり砂		13
55	SD-227	2	D-11	1.40	0.18	9	N77°E	①灰色砂混じり粘土		
56	SD-228	2	D-11	(4.65)	0.36	11	N72°E	①暗灰色砂混じり粘土　②黒色粘土混じり砂		13
57	SD-229	2	D-11～13/E-13	(20.52)	0.65	17	N55°E	①灰色粘土　②灰色砂混じり粘土　③灰色シルト質砂		13
58	SD-230	2	D-11・12	9.00	0.62	7	N63°E	①明灰色礫混じり粘土　②灰色砂混じり粘土 ③暗灰色砂混じり粘土		13
59	SD-231	2	D-12	(3.74)	0.52	8	N67°E	①灰色砂混じり粘土　②灰色砂混じり粘土(砂ブロック状)　③明灰色砂混じり粘土		13
60	SD-232	2	D・E-11	(2.08)	0.30	13	N63°E	①灰色砂混じり粘土　②灰色砂混じり粘土(砂多い)	灰釉碗、灰釉皿	13
61	SD-233	2	D-12/E-12・13	(16.25)	0.31	8	N56°E	①灰色砂混じり粘土　②灰色砂混じり粘土(砂多い)		13
62	SD-234	2	D・E-12	(9.83)	0.55	9	N66°E	①灰色砂混じり粘土		13
63	SD-235	2	E-13	(1.33)	0.55	7	N65°E	①灰色砂混じり粘土　②暗灰色シルト混じり砂		13
64	SD-236	2	D-13	(4.50)	0.33	11	N60°E	①灰色砂混じり粘土(砂ブロック状)		
65	SD-237	2	D-13	(4.32)	0.28	3	N53°E	①灰色砂混じり粘土　②灰色粘土混じり中粒砂		
66	SD-238	2	C-12・13/D-13他	(15.48)	1.56	5	N55°E	①灰色砂混じり粘土　②灰色粘土混じり砂	灰釉碗、緑釉陶器 土師器甕	
67	SD-239	2	D-13・14	(15.48)	0.34	15	N58°E	①灰色砂混じり粘土　②灰色砂混じり粘土(砂少ない) ③灰色砂混じり中粒砂		
68	SD-240	2	D-11	(2.33)	0.24	7	N73°E	①灰色砂礫混じり粘土　②灰色砂混じり粘土		13
69	SD-241	2	C-11/D-11・12	(5.43)	0.52	6	N76°E	①明灰色砂礫混じり粘土　②灰色砂混じり粘土	灰釉碗	13
70	SD-242	2	C・D-11	(2.90)	0.38	12	N28°W	①灰色砂礫混じり粘土		13
71	SD-243	2	C-11	(0.88)	0.33	10	N73°E	①青灰色砂混じり粘土　②暗灰色砂 ③暗灰色粘土混じり砂		13
72	SD-244	2	C-11・12/D-11	(9.20)	0.43	10	N38°W	①灰色砂混じり粘土		13
73	SD-245	2	C-12	1.07	0.48	8	N60°E	①灰色砂混じり粘土 ②暗灰色シルト質砂(粘土ブロック含む)		
74	SD-246	2	C・D-12	(5.23)	0.48	17	N63°E	①灰色粘土　②灰色砂混じり粘土		
75	SD-247	2	E-11・12	(2.24)	0.62	11	N58°E	①灰色砂混じり粘土		13
76	SD-248	2	E-11・12	(1.15)	0.28	5	N60°E	①灰色砂混じり粘土		13
77	SD-249	2	D-13	(0.74)	0.26	9	N33°W	①灰色砂混じり粘土		13
78	SD-250	2	C-12・13/D-13	(3.67)	(0.22)	14	N55°E	①灰色砂混じり粘土　②灰色砂混じり粘土(粘性強い) ③灰色粘土混じり中粒砂		
79	SD-251	2	C-12	(7.04)	2.35	10	N30°E	①灰色粘土　②灰色砂混じり粘土　③暗灰色粘土混じり砂	灰釉碗、灰釉壺 陶器甕、加工木片	
80	SD-252	2	C-12	(1.45)	(0.26)	4	N62°E	①灰色砂混じり粘土　②暗灰色シルト質砂		
81	SD-253	2	G-11・12	(3.38)	(0.32)	10	N55°E	①灰色粘土混じり砂		14
82	SD-254	2	F-12	(1.00)	0.17	8	N60°E	①砂混じり灰色粘土　②暗灰色砂		
83	SD-255	2	D-11	(1.19)	0.29	9	N75°E	①灰色砂混じり粘土　②暗灰色粘土混じり砂 ③灰色砂混じり粘土(砂多い)		13
84	SD-256	2	F-12	1.43	0.33	4	N40°W	①灰色砂混じり粘土		
85	SD-257	2	E-12	(0.37)	0.30	3	N82°E	①灰色砂混じり粘土		
86	SD-258	2	G-12	(0.38)	0.49	9	N30°W	①灰色砂混じり粘土		14
87	SD-260	2	E-11	(2.94)	0.53	4	N50°W	①青灰色砂混じり粘土		
88	SD-303	3	D-8	(1.93)	0.48	48	N59°E	①灰色粘土		
89	SD-304	3	D-8	(2.02)	0.49	18	N27°W	①灰色粘土　②灰色砂混じり粘土　③灰色粘土混じり砂		
90	SD-305	3	D-8	(2.50)	0.30	14	N60°E	①灰色砂混じり粘土		
91	SD-306	3	E-7・8	(8.70)	0.35	9	N52°E	①灰色粘土　②灰色粘土混じり中粒砂		
92	SD-307	3	F-6/G-6・7	12.22	0.45	22	N55°E	①灰色砂混じり粘土　②灰色砂混じり粘土(砂少ない) ③灰色粘土混じり中粒砂		
93	SD-308	3	F-6/G-6・7	(13.53)	0.47	24	N53°E	①灰色粘土　②灰色砂混じり粘土　③灰色粘土混じり砂	山茶碗	
94	SD-309	3	G-7	(1.20)	0.44	17	N72°E	①灰色砂混じり粘土　②灰色砂混じり粘土(砂少ない) ③灰色粘土混じり中粒砂		
95	SD-310	3	G-6・7	(4.72)	0.44	22	N59°E	①灰色砂混じり粘土　②灰色粘土 ③灰色粘土混じり中粒砂		
96	SD-311	3	G-7	(3.28)	0.43	19	N35°W	①灰色砂混じり粘土　②灰色砂混じり中粒砂		
97	SD-312	3	G・H-6	(3.23)	0.45	4	N62°E	①灰色砂		15
98	SD-313	3	G・H-6	(2.81)	0.49	22	N57°E	①灰褐色砂混じり粘土　②灰色砂　③灰褐色腐植土		15
99	SD-314	3	H-6	(3.25)	0.40	17	N68°E	①灰褐色砂混じり粘土　②灰色中粒砂		15
100	SD-315	3	H-6	(3.24)	0.59	7	N56°E	①灰褐色砂混じり粘土　②灰色中粒砂(粘土ブロック混入)		15
101	SD-316	3	H-6	(1.87)	0.44	14	N60°E	①灰褐色砂混じり粘土　②灰色中粒砂(粘土ブロック混入)		15

番号	遺構名	区	グリッド	長さ(m)	幅 (m)	深さ(cm)	主軸方位	覆土	遺物	挿図
102	SD-317	3	H-6	(2.18)	0.42	15	N58°E	①灰褐色砂混じり粘土 ②灰色中粒砂(粘土ブロック混入)		15
103	SD-318	3	H-6	(8.89)	0.48	12	N42°W	①灰褐色砂混じり粘土 ②灰褐色粘土		15
104	SD-319	3	G-6	(1.00)	0.20	9	N63°E	①灰色砂混じり粘土		15
105	SD-320	3	G-6	(1.92)	0.19	2	N45°E	①灰色砂混じり粘土		15
106	SD-321	3	G-6	(1.95)	0.33	7	N65°E	①灰色砂混じり粘土		15
107	SD-322	3	H-6	(1.47)	0.40	14	N59°E	①灰褐色砂混じり粘土(砂多い) ②灰褐色砂混じり粘土(砂少ない) ③灰褐色砂混じり粘土		15
108	SD-323	3	G-7	(0.96)	0.40	11	N69°E	①灰色砂混じり粘土 ②灰色中粒砂(粘土ブロック混入)		
109	SD-324	3	G-7	(0.36)	0.54	17	N66°E	①灰色粘土混じり中粒砂		
110	SD-325	3	F-7	(9.08)	0.38	17	N54°E	①灰色砂混じり粘土 ②灰色砂混じり粘土 ③灰色砂混じり粘土		
111	SD-326	3	F-7	(2.40)	0.20	11	N63°E	①灰色砂混じり粘土 ②灰色粘土混じり砂		
112	SD-327	3	F-7	(3.10)	0.65	15	N58°E	①灰色粘土(粘性強い) ②灰色粘土 ③灰色砂混じり粘土 ④灰色粘土混じり砂		
113	SD-328	3	F-7・8	(2.62)	(0.31)	14	N58°E	①灰色砂混じり粘土 ②灰色中粒砂(粘土ブロック混入)		
114	SD-329	3	F-7・8	(2.40)	0.38	10	N54°E	①暗灰色粘土混じり砂		
115	SD-330	3	E・F-8	(2.26)	0.52	9	N50°E	①灰色砂混じり粘土		
116	SD-331	3	E-8	(1.97)	0.31	9	N50°E	①灰色粘土混じり中粒砂 ②灰色中粒砂		
117	SD-332	3	G-6	(0.92)	0.35	21	N67°E	①灰色砂混じり粘土 ②灰色中粒砂 ③灰色砂混じり粘土(粘性強い)		
118	SD-333	3	F-4・5	(9.40)	0.45	23	N53°E	①灰色砂混じり粘土 ②灰色粘土混じり中粒砂 ③灰色砂混じり粘土(ラミナあり) ④灰色砂混じり粘土(粘性強い) ⑤灰色砂混じり粘土(砂少ない)		
119	SD-334	3	F-4	2.48	0.43	7	N54°E	①灰色粘土		
120	SD-335	3	F-4	(7.70)	0.60	26	N48°E	①灰色砂混じり粘土 ②灰色砂混じり粘土(砂多い) ③灰色砂混じり粘土 ④灰色中粒砂 ⑤灰色粘土混じり砂		16
121	SD-336	3	F・G-4	(4.33)	0.40	17	N50°E	①灰色砂混じり粘土 ②灰色砂混じり粘土(砂多い) ③灰色砂混じり粘土(しまり強い) ④灰色粘土混じり砂		16
122	SD-337	3	F・G-4	(4.14)	0.52	10	N53°E	①灰色粘土 ②灰色砂混じり粘土 ③灰色粘土混じり砂		16
123	SD-338	3	F・G-4	(3.88)	0.42	27	N44°E	①灰色砂混じり粘土 ②灰色粘土(しまり強い) ③灰色粘土 ④暗灰色粘土混じり砂		16
124	SD-339	3	F-4	(2.42)	0.51	7	N30°W	①灰色砂混じり粘土 ②灰色粘土混じり中粒砂		
125	SD-340	3	F-4	(2.58)	0.45	9	N30°W	①灰色粘土 ②灰色中粒砂		
126	SD-341	3	E・F-3	(1.36)	0.35	5	N63°E	①灰色砂混じり粘土		
127	SD-342	3	F-3	(3.10)	0.53	4	N57°E	①灰色砂混じり粘土		
128	SD-343	3	E・F-3・4	(4.90)	0.73	8	N57°E	①灰色砂混じり粘土 ②灰色粘土		
129	SD-344	3	F-5	(0.43)	0.47	12	N71°E	①灰色砂混じり粘土		
130	SD-345	3	G-4	(1.12)	0.45	9	N51°E	①灰色砂混じり粘土		
131	SD-346	3	E-4・5	9.78	0.42	23	N52°E	①灰色砂混じり粘土 ②灰色粘土 ③灰色砂混じり粘土(粘性強い) ④灰色粘土(粘性強い) ⑤灰色砂混じり粘土(砂少ない) ⑥灰色粘土混じり中粒砂		
132	SD-347	3	E-4・5/F-4	(4.74)	0.58	20	N37°W	①灰色砂混じり粘土 ②灰色粘土 ③灰色粘土混じり砂 ④灰色砂混じり粘土(粘性強い)		
133	SD-348	3	H-5	(1.17)	0.31	11	N76°E	①灰色粘土混じり砂		
134	SD-349	3	H-5	(1.40)	0.44	8	N73°E	①灰色砂混じり粘土 ②灰色中粒砂 ③灰色粘土混じり砂(粘土ブロック多い) ④灰色粘土混じり砂		
135	SD-350	3	G・H-5	(1.70)	0.39	7	N64°E	①灰色砂混じり粘土 ②灰色中粒砂(粘土ブロック混入)		
136	SD-351	3	E-4	(0.40)	0.38	10	N57°E	①灰色砂混じり粘土		
137	SD-352	3	E-4	(0.90)	0.33	17	N65°E	①灰色砂混じり粘土		
138	SD-353	3	F-6	(1.24)	(0.48)	12	N62°E	①灰色砂混じり粘土		
139	SD-354	3	F-6	(2.60)	(0.48)	10	N37°W	①灰色砂混じり粘土		
140	SD-355	3	H-6	(0.50)	0.34	10	N53°E	①灰色砂混じり粘土		15
141	SD-356	3	H-6	(0.39)	0.35	8	N55°E	①灰色砂混じり粘土		15



第17図　1区擬似畦畔実測図

第18図　3区擬似畦畔・溝状遺構SD325～327実測図

覆土からは時期差を見いだすことはできなかった。

遺物の出土は非常に少なく、土器を出土した溝はＳＤ233・238・241・251・308の５本だけであり、その他は木片がＳＤ129・251から出土しているにすぎない。出土している土器は灰釉碗・灰釉皿・土師器甕・陶器甕・緑釉陶器・山茶碗であるが、すべて小片であり、時期の詳細な判断はできなかった。

擬似畦畔

擬似畦畔１（第17図　図版４－２）

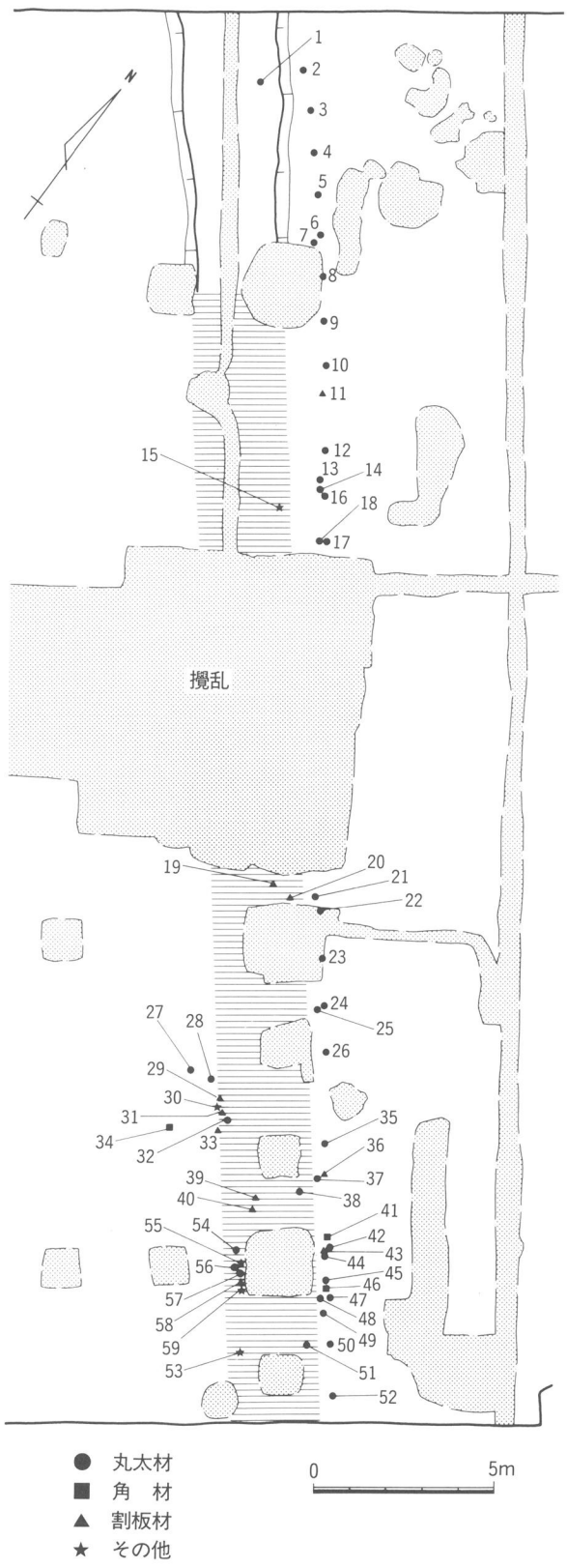
１区Ｉ・Ｈ－13・14グリッドで約８ｍにわたり検出したもので、擬似畦畔Ｂに該当する。南側は建物の基礎と考えられる攪乱により破壊されていたが、それより以南では終息していた。また中央部分にも管を埋設した溝状の攪乱があり、全体に残存状況は悪い。上端幅2.3～2.8m、下端幅2.8～3.3m、高さは最も残りの良い部分で約40cmを計測する。方位はＮ－38°－Ｗであり、静清平野で施工された広域条里の方向に一致しており、坪界線に当たる。

擬似畦畔２（第18図　図版８－２）

３区Ｆ－７グリッドに位置する。攪乱に囲まれた島状の部分から約９ｍほど検出した。北辺は管を埋設した攪乱により破壊されている。また南辺にはＳＤ327があり、全体の規模は不明であるが、ａ－ａ′土層断面から比高差20cm、下端幅約3.7m程度を想定した。また方位は上端と下端が平行する箇所でＮ－52°－Ｅを計測する。これについては規模が不確定である点やＳＤ325・326が存在する点、さらに耕作痕跡のような乱れが認められる点など擬似畦畔とするには問題がある。周辺の標高と比較からは明らかに高まりとして把握できたが、自然地形の可能性もあり、擬似畦畔状の高まりとして考えておきたい。

杭　列（第19図　図版４－３）

１区の擬似畦畔に平行する形で検出された杭列である。Ｇ－15列を境に北では１列、南は２列として把握できる。確認できた杭は全部で59本である。その内訳は表３にあるように丸太材40、割り板材11、角材３、その他（不明を含む）５である。丸太材は先端を３～６面に削り尖らせただけの簡単なものである。その他に関しては15・53のように丸太材の側面を削り取ったものや30のように曲物の底板を転用



第19図　杭列概念図

表３　杭計測表

番号	調査区	グリッド	長さ(cm)	太さ(cm)	先端加工面数	登録番号	番号	調査区	グリッド	長さ(cm)	太さ(cm)	先端加工面数	登録番号
1	1	I－14	29.0	4.0	4	W－137	31	1	F－15	15.4	2.5	不明	W－96
2	1	I－14	48.0	9.0	4	W－136	32	1	F－15	20.0	4.3	4	W－91
3	1	I－14	39.5	5.0	3	W－135	33	1	F－15	16.0	3.0	4	W－92
4	1	I－14	53.0	9.0	4	W－134	34	1	F－15	11.5	3.0	5	W－88
5	1	H－14	51.0	9.5	6	W－133	35	1	F－16	61.0	6.5	4	W－53
6	1	H－14	49.0	8.0	3	W－132	36	1	F－16	17.5	5.2	4	W－52
7	1	H－14	28.5	5.0	4	W－142	37	1	F－16	34.5	4.0	5	W－51
8	1	H－14	56.0	8.0	5	W－131	38	1	F－16	61.0	6.0	4	W－50
9	1	H－14	59.0	6.0	3	W－130	39	1	F－16	24.5	7.2	不明	W－56
10	1	H－14	50.0	6.5	4	W－129	40	1	F－16	22.0	8.3	不明	W－55
11	1	H－14	10.5	3.0	不明	W－128	41	1	F－16	6.2	4.5	1	W－49
12	1	H－14	53.0	6.5	4	W－127	42	1	F－16	74.0	8.5	6	W－47
13	1	H－14	48.0	5.0	4	W－125	43	1	F－16	17.0	9.3	5	W－48
14	1	H－14	31.8	7.6	4	W－127	44	1	F－16	73.0	5.0	3	W－43
15	1	H－14	26.5	5.0	2	W－123	45	1	F－16	24.0	5.8	5	W－44
16	1	H－15	58.0	7.2	5	W－126	46	1	F－16	25.8	5.1	1	W－45
17	1	H－15	59.0	6.0	3	W－122	47	1	F－16	68.0	7.0	4	W－46
18	1	H－15	40.5	7.0	4	W－121	48	1	F－16	6.5	3.0	4	W－42
19	1	G－15	36.0	6.0	4	W－80	49	1	F－16	7.5	3.6	4	W－41
20	1	G－15	28.0	7.1	4	W－79	50	1	F－16	65.0	10.0	5	W－40
21	1	G－15	31.0	5.2	4	W－78	51	1	F－16	59.0	6.0	2	W－39
22	1	G－15	61.0	6.5	4	W－77	52	1	F－16	8.0	8.5	5	W－38
23	1	G－15	77.5	8.5	6	W－76	53	1	F－16	18.0	4.5	4	W－62
24	1	G－15	73.0	8.0	5	W－75	54	1	F－16	15.5	4.0	4	W－54
25	1	G－15	29.5	3.2	4	W－74	55	1	F－16	12.0	3.0	4	W－57
26	1	G－15	66.5	6.5	4	W－73	56	1	F－16	10.7	2.3	不明	W－58
27	1	F－15	26.5	4.0	不明	W－89	57	1	F－16	17.5	4.1	4	W－59
28	1	F－15	18.5	3.5	3	W－90	58	1	F－16	37.0	7.5	5	W－60
29	1	F－15	31.0	8.5	2	W－93	59	1	F－16	11.7	2.3	4	W－61
30	1	F－15	14.8	2.5	不明	W－95							

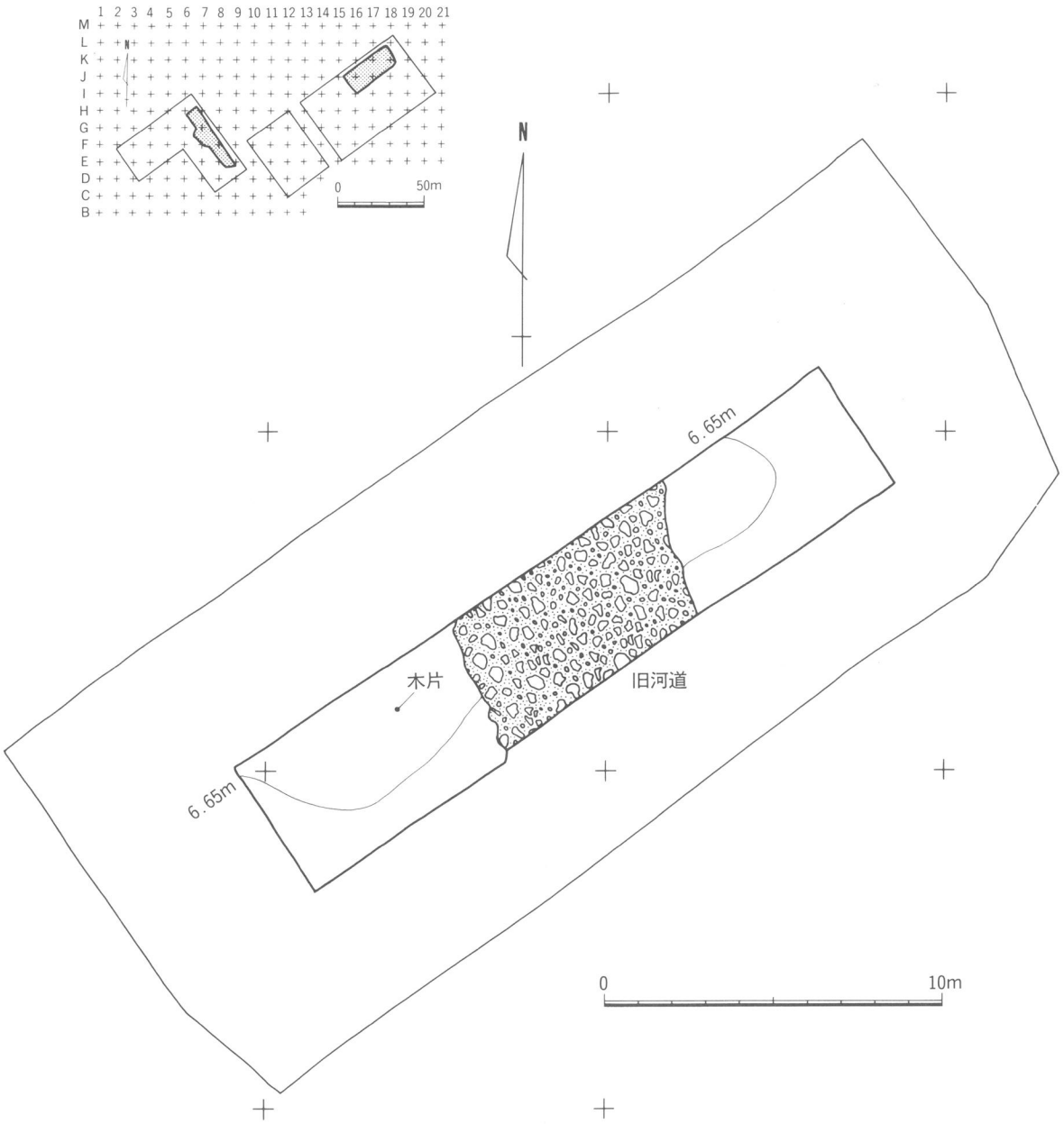
したものである。

東側の杭列は擬似畦畔の東辺から約50～80cmほど離れた箇所にN－38°－Wの方向で一列に並んでいる。ここで用いられているのは、ほとんどが丸太材であり、その中にわずかに角材、割り板材が混在しているという状態である。西側の杭列については、並びが悪くまた用いられている杭も、丸太材、割り板材、転用材などであり、多様性が窺えるとともに擬似畦畔の復元ラインの中に収まるものがほとんどである。両方の杭列ともに時期については決め手がなく、不明とせざるを得ない。東側の杭列に関しては一連のものとして考えられるが、西側については東側とやや性格を異にするようであり、同時期とは考え難い。いずれにせよ、これらの杭列は時期の問題は別として、畦畔に伴って打たれたと考えられ、この杭列からも坪界線の存在を想定することができよう。

3　第３遺構面（第20図　図版９）

１・３区において平面調査を行ったもので、１区は幅13m、長さ30m、３区は幅７ m、長さ40m の規模である。８層黒色泥炭の直上まで重機による掘削を行い、９層上面での精査を行なった。

１区では１点の木片を出土したのみだがN－25°－Wの方向で、北から南へ流れる河道を検出した。砂礫を主体としており強い押し出しがあったと考えられるが、現在でも伏流水が大量に流れている状態で



第20図　1区第3遺構面全体図

あった。下層約5 mほどまで掘り下げたが、底部は検出できなかった。時期については特定し難いが、後述する第6トレンチの3とした砂層に堆積している4とした砂礫と対応するものである。

3区については遺構・遺物ともに認められなかった。

第2節　遺物

小鹿杉本堀合坪遺跡は先述したように後世の建築や造成による攪乱が著しい状況であった。そのような状況の中で、遺物は1区の遺構や水田土壌である2層のほか、攪乱部分からの出土もあった。概して

3区からの出土は少なく、1・2区からの出土が多い傾向にある。

1　土器　（第21図　図版10）

本遺跡から出土した土器はテンバコ（60×40×20cm）で3箱、登録番号503と量的に少ない。1区の遺構出土のほかは、ほとんどが1・2区2層からの出土である。量的には2区の出土が最も多く、3区出土のものは登録数で、64と極端に少ない。全体に小片が多く、実測可能なものはわずかであった。

ここでは遺構出土のもの、遺構外出土のもの、墨書土器に分けて記述を進めたい。

ＳＥ162出土土器

1～6は灰釉陶器で、1・2・6は皿である。1は潰れたような低い三日月高台を持ち、底部にヘラケズリ調整が認められ、刷毛塗りによる施釉が行われている。2は三角形高台をもつもので、全体を回転ナデで成形し、底部は糸切り後ナデを施す。施釉は漬け掛けである。6は底部のみだが、高台接合部を強くナデており、三日月高台の系譜を引くものと考えられる。3～5は碗の底部である。3は三日月高台と考えられるが、端部が成形時に潰れたようで、平坦ないし丸みを帯びている。4は接合部からやや内弯気味に伸びる三角形高台である。5も三角形高台であるが、高台接合部を丁寧にナデている。1・3を黒笹90号窯式段階、2・4～6を折戸53号窯式段階のものとしておきたい。7は甕である。平行タタキ目による成形で、内面は青海波文をナデ消しているが、粘土の継ぎ目が明瞭に認められる。

ＳＦ118出土土器

8～10は灰釉陶器の碗である。8は接合部を強くナデた外に開く厚手の三角形高台である。9はだるくシャープさを欠いた厚手の三角形高台である。10は深碗の高台と考えられるものである。端部を丸く収め、外に大きく開いている。11は山茶碗の小碗であろう。粘土紐を貼り付けただけの粗雑なものである。

ＳＦ120出土土器

12は緑釉陶器である。形態から手付瓶の底部と考えられる。底部をわずかに突出させている。軟質の焼成で、胎土は黄色味を帯びた灰白色を呈する。全体に黄色味が強い透明感のある釉が掛かっている。

ＳＦ131出土土器

13～15はいずれも灰釉陶器である。13は碗の底部である。外に開く三角形高台であるが、整形が雑で、焼き歪みがある。14は深碗の底部と考えられるもので、高台中位で、内側に屈曲する高台を持つ。成形は丁寧で、体部・底部ともにヘラケズリが行われている。15は長頸瓶と思われる体部下半～底部にかけての破片である。高台は粗雑で、潰れた四角形を呈している。

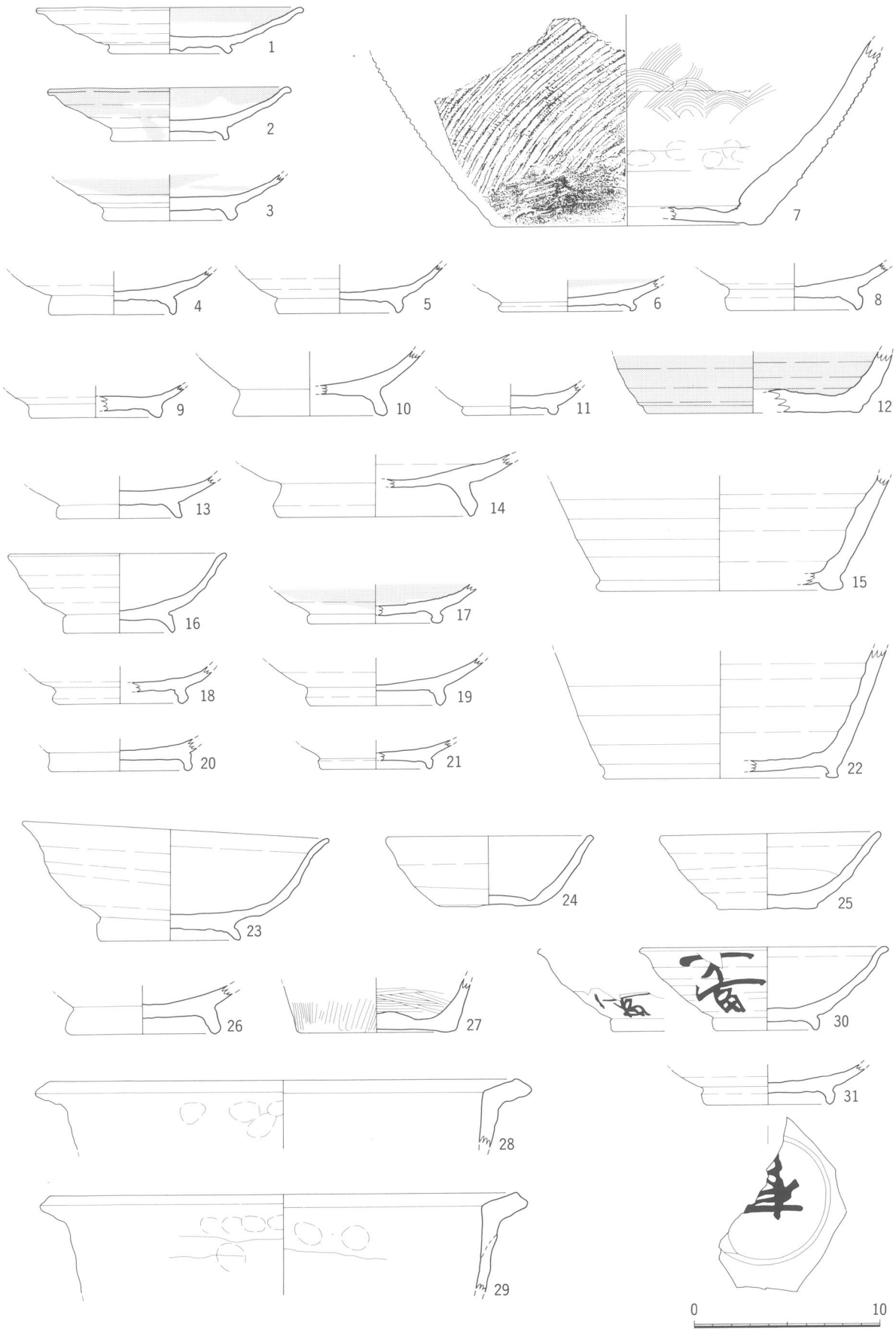
ＳＦ160出土土器

16は口径11.5cmと小振りの碗で、成形がやや粗雑な印象を受ける。体部は張りがあり、内弯して立ち上がり、口縁部をわずかに外反させる。高台はいわゆる爪形高台である。

その他の出土土器

遺構出土以外の土器であるが、2層のほか攪乱土中からの出土も含めている。また、排水溝出土としたものは層位から2層出土のものと考えてよい。

17～23は灰釉陶器である。17・18は碗の底部で、底部にヘラケズリが認められるものである。三日月高台と考えられるが、17は端部が潰れて、断面四角形に近い。18も高台にくずれが認められる。19も碗の底部である。全体をナデ調整しており、高台はやや内弯気味の三角形高台で、接合部を丁寧にナデている。20は端部を丸く収めた三角形高台であるが、外方への開きは小さい。21は皿の底部で、開きの小さい三角形高台である。22は長頸瓶の体部～底部の破片である。外面はヘラケズリ調整を行う。高台は小さな四角形を呈するが、潰れて内側にはみ出している。23は口径が16cmを越える大きなものである。



第21図　出土土器実測図

表4　土器観察表

番号	器種	出土地点	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	胎土・焼成・色調	備考	図版
1	灰釉陶器 皿	1区 H－15 SE162	口　径　〈14.0〉 高台径　〈 6.3〉 器　高　2.5	体部は直線的に開き、口縁部をわずかに外反させる。高台は小さく三日月が潰れた形態。	内外面ともに回転ナデ。外面ノタ目が明瞭。底部ヘラケズリ。内面刷毛塗り施釉。	胎土　白色粒子・砂・小礫を含む。 焼成　良。 色調　灰白N7/ （緑灰7.5GY6/1）	口縁部～底部1/2弱残存。 ロクロ回転左。	10
2	灰釉陶器 皿	1区 H－15 SE162	口　径　〈12.8〉 高台径　〈 6.1〉 器　高　2.8	体部はわずかに内弯、口縁部を外反させる。高台はやや外に開く三角形。	内外面ともに回転ナデ。底部糸切り後ナデ。漬け掛け施釉。	胎土　白色粒子・黒色粒子を含む。 焼成　良。 色調　灰白N7/ （オリーブ灰7.5Y6/3）	口縁部1/4・底部1/2残存。 内面に重ね焼き痕。	10
3	灰釉陶器 碗	1区 H－15 SE162	高台径　〈 6.7〉	接合部のナデが弱い三日月高台。	体部回転ヘラケズリ。底部ヘラケズリ後ナデか。	胎土　白色粒子・黒色粒子を含む。 焼成　良。 色調　灰N6/ （灰白7.5Y8/1）	底部1/2残存。 内面に重ね焼き痕。 ロクロ回転左。	
4	灰釉陶器 碗	1区 H－15 SE162	高台径　6.4	接合部から垂直に伸びる三角形高台。	内外面ともに回転ナデ。底部糸切り後ナデ。	胎土　白色粒子・小礫を含む。 焼成　良。 色調　灰N7/	底部完形。 内面に重ね焼き痕。 内外面に自然釉。	
5	灰釉陶器 碗	1区 H－15 SE162	高台径　6.3	わずかに内弯する三角形高台。	内外面ともに回転ナデ。底部糸切り後ナデ。	胎土　白色粒子・白色小礫を多く含む。 焼成　良。 色調　灰N6/	底部完形。 内面に重ね焼き痕・降灰釉。	
6	灰釉陶器 皿	1区 H－15 SE162	高台径　〈 7.0〉	内弯気味に丸く収めた低い高台。	内外面ともに回転ナデ。底部糸切り後ナデ。漬け掛け施釉。	胎土　白色粒子・黒色粒子・小礫を含む。 焼成　良。 色調　灰白N7/ （灰白N8/）	底部1/5残存。	
7	陶器 甕	1区 H－15 SE162	底　径　〈14.3〉	体部はわずかに内弯しながら立ち上がる。	体部外面斜行の平行タタキ目、内面は底部～体部下位はナデ、上位は青海波文上にナデ。	胎土　白色粒子・黒色粒子を含む。 焼成　良。 色調　灰N6/	底部1/4残存。	10
8	灰釉陶器 碗	1区 I－14 SF118	高台径　〈 6.9〉	接合部を強くナデた肉厚の三角形高台。	内外面ともに回転ナデ。底部糸切り後ナデ。	胎土　白色粒子・小礫を含む。 焼成　良。 色調　灰7.5Y7/1	底部1/2残存。	
9	灰釉陶器 碗	1区 I－14 SF118	高台径　〈 6.8〉	低い三角形高台。	内外面ともに回転ナデ。底部糸切り未調整。	胎土　白色粒子・小礫を含む。 焼成　良。 色調　灰N7/	底部1/4残存。	
10	灰釉陶器 碗	1区 I－14 SF118	高台径　〈 7.8〉	端部を丸く収め、ハの字に開く高台。	内外面ともに回転ナデ。底部糸切り未調整。	胎土　白色粒子・小礫を含む。 焼成　良。 色調　灰オリーブ7.5Y6/2	底部1/4残存。	
11	山茶碗 小碗	1区 I－14 SF118	高台径　4.6	断面半球状を呈する低い高台。	内外面ともに回転ナデ。底部糸切り後ナデ。	胎土　白色粒子・黒色粒子を多く含む。 焼成　良。 色調　灰白7.5Y7/1	底部完形。 見込み部分に黒痕？	
12	緑釉陶器 手付瓶	1区 F－14 SF120	底　径　〈11.4〉	底部をわずかに突出させ、体部は緩やかに内弯しながら立ち上がる。	内外面ともに回転ナデ。内面ノタ目顕著。	胎土　黒色粒子を含む。 焼成　良。軟陶。 色調　灰白2.5Y8/2 （浅黄7.5Y7/3）	底部1/4残存。	10
13	灰釉陶器 碗	1区 F－16 SF131	高台径　6.4	断面直角三角形状の高台。	内外面ともに回転ナデ。底部糸切り未調整。	胎土　白色粒子・黒色粒子を含む。 焼成　良。 色調　灰白2.5Y7/1	底部完形。 内面に重ね焼き痕・降灰釉。	
14	灰釉陶器 碗	1区 F－16 SF131	高台径　〈10.2〉	外面が内側に屈曲する高い高台。	内面回転ナデ。外面体部～底部ヘラケズリ。	胎土　白色粒子・小礫を含む。 焼成　良。 色調　灰白N7/	底部1/4残存。 ロクロ回転右。	
15	灰釉陶器 長頸瓶	1区 F－16 SF131	高台径　〈13.1〉	潰れた四角形を呈する低い高台。体部は直線的に立ち上がる。	体部外面ヘラケズリ。内面および高台接合部ナデ。	胎土　白色粒子・白色小礫・砂粒を多く含む。 焼成　良。 色調　灰白N7/	底部1/4残存。 内面に剝離。	
16	灰釉陶器 碗	1区 E－15 SF160	口　径　〈11.5〉 高台径　5.7 器　高　4.2	体部は内弯して立ち上がり、口縁部をわずかに外反させる。高台は開きの小さい爪形をなす。	体部内外面ともに回転ナデ。底部糸切り未調整。	胎土　白色粒子・白色小礫を多く含む。 焼成　良。 色調　灰白7.5Y7/1	口縁部～体部1/2残存、底部完形。 内面に重ね焼き痕・降灰釉。	10
17	灰釉陶器 碗	2区 表土 除去中	高台径　〈 6.9〉	高台は端部が潰れ、四角形を呈する。	体部内外面ともに回転ナデ。底部ヘラケズリ。漬け掛け施釉。	胎土　白色粒子・黒色粒子を含む。 焼成　良。 色調　灰白 N7/ （灰白7.5Y8/2）	底部1/2残存。 ロクロ回転左？ 内面に重ね焼き痕。	
18	灰釉陶器 碗	2区 撹乱内	高台径　〈 6.6〉	高台はわずかに外方に開き、端部を丸く収める。	体部内外面ともに回転ナデ。底部ヘラケズリ。	胎土　白色粒子・砂粒を含む。 焼成　良。 色調　灰白10YR8/1	底部1/4残存。 ロクロ回転左。 内面に降灰釉。	
19	灰釉陶器 碗	2区 E－11	高台径　〈 7.0〉	内弯気味に開く三角形高台。	体部内外面ともに回転ナデ。底部糸切り後ナデ。	胎土　白色粒子・黒色粒子を多く含む。 焼成　良。 色調　灰白5Y7/1	底部1/2残存。 内面に重ね焼き痕・自然釉。	
20	灰釉陶器 碗	2区 D－12	高台径　〈 7.3〉	端部を丸く収め、開きの小さい高台。	底部糸切り後ナデ。	胎土　白色粒子・白色小礫を多く含む。 焼成　良。 色調　灰白5Y7/1	底部1/2残存。	
21	灰釉陶器 皿	2区 D－11	高台径　〈 5.7〉	端部を内弯させた小さな三角形高台。	体部内外面ともに回転ナデ。底部糸切り後ナデ。	胎土　白色粒子・黒色粒子を多く含む。 焼成　良。 色調　灰白5Y8/1	底部1/3残存。	
22	灰釉陶器 長頸瓶	1区 E－14 排水構内	高台径　〈12.4〉	体部は直線的に外に開く。高台は小さい四角形を呈するが、潰れて内側にはみ出す。	体部外面ヘラケズリ、内面回転ナデ。底部調整不明瞭、ヘラケズリ後、ナデか。	胎土　白色粒子・黒色粒子・白色小礫を多く含む。 焼成　良。 色調　灰白5Y6/1	体部下半～底部1/4残存。 ロクロ回転左。	
23	灰釉陶器 碗	1区 E－15	口　径　〈16.2〉 高台径　7.3 器　高　6.4	体部は腰が張り出し、大きく内弯して立ち上がり、口縁部を外反させる。高台はやや粗雑で、ハの字に外に開く。	全体回転ナデ、体部外面ノタ目顕著。	胎土　白色粒子・白色小礫を含む。 焼成　普通。 色調　青灰5PB6/1	口縁部～体部上半1/3、体部下半～底部3/4、高台1/3残存。 焼き歪み大きい。	10

番号	器種	出土地点	法量（cm）	形態の特徴	技法の特徴	胎土・焼成・色調	備考	図版
24	土師器 坏	2区 F－12	口径 10.8 底径 5.6 器高 4.8	口径に比べ底径が小さく、深い皿状を呈する。体部下半は内弯気味に、上半～口縁部は直線的に立ち上がる。	摩滅により不明瞭。体部外面上半～内面ナデ。体部外面下半ヘラケズリ。底部糸切り痕残る。	胎土 白色粒子・黒色粒子・砂粒を多く含む。 焼成 良。 色調 赤褐色5YR4/6	全体3/4残存。	10
25	土師器 坏	2区 E－11	口径 11.6 底径 5.4 器高 4.1	口径に比べ底径が小さく、深い皿状を呈する。底部をわずかに突出させ、内弯気味に立ち上がる。	全体ナデ。体部内面に粘土紐の接合痕。底部糸切り未調整。	胎土 赤褐色粒子・砂粒を含む。 焼成 良。 色調 浅黄橙7.5YR8/4	口縁部一部欠損。	10
26	土師器 椀	2区 E－11 攪乱 除去中	高台径 7.6	端部を丸く収め、ハの字に開く厚い高台。	全体回転ナデ。	胎土 赤褐色粒子・白色粒子・砂粒・黒色粒子を含む。 焼成 良。 色調 浅橙5YR8/4	底部ほぼ完形。	
27	土師器 甕	2区 E－11	底径 8.5	平坦な底部から体部は直線的に立ち上がる。	体部外面タテハケ（4本/cm）、内面ヨコハケ（5本/cm）。底部内面未調整、外面木葉痕あり。	胎土 白色粒子・黒色粒子・赤色粒子・金雲母を含む。 焼成 良。 色調 にぶい橙5YR7/4 橙5YR7/6	底部完形。	
28	土師器 甕	2区 東側 排水溝	口径 〈24.8〉	口縁部を大きくくの字に屈曲させ、口端部を平坦に仕上げる。	口縁部ナデ。体部未調整で、指頭圧痕が認められる。	胎土 小礫・白色粒子・赤色粒子・透明粒子を多く含む。 焼成 良。 色調 黄灰2.5Y6/1	口縁部1/12残存。	
29	土師器 甕	2区 D－11	口径 〈24.8〉	口縁部を大きくくの字に屈曲させる。口端部は中央がわずかにくぼむ。	口縁部ナデ。体部未調整で、指頭圧痕・粘土接合痕が認められる。	胎土 小礫・白色粒子・赤色粒子・透明粒子を多く含む。 焼成 良。 色調 黄灰2.5Y6/2	口縁部1/10残存。	
30	灰釉陶器 碗 墨書土器	2区 F－11	口径 〈13.0〉 底径 5.3 器高 4.4	体部は内弯して立ち上がり、口端部のみ外方に引き出す。高台は三角形。	全体回転ナデ。底部糸切り後ナデ。	胎土 白色粒子・砂粒を含む。 焼成 良。 色調 灰 N6/	口縁部～体部1/2残存。 底部一部欠損。 体部2ヶ所に墨書。 表「万冨」、裏「×冨」	10
31	灰釉陶器 碗 墨書土器	2区	底径 〈6.6〉	内弯する三角形高台。	全体回転ナデ。底部糸切り後ナデ。	胎土 白色粒子・小礫を含む。 焼成 良。 色調 灰5Y6/1	底部1/2残存。 内外面に煤付着。 内面に降灰釉。 底部に墨書	

体部はゆったりと立ち上がり、口縁部を大きく外反させている。高台は粗雑ではあるが、高い三角形を呈している。百代寺併行に位置づけられるものであろう。24～29は土師器である。24は「駿東型杯」と呼ばれるものである。口径：底径がおよそ2：1であり、口径に比べ底径がかなり小さくなっている。内面の暗文はなくなり、底部のヘラケズリも浅く、中央部の糸切り跡を残している。25も杯である。全体にナデによる成形が行われ、底部は糸切未調整である。内面には粘土紐の接合痕が認められる。26は灰釉模倣碗の底部である。ハの字に大きく開く高台を持つ。27は甕の底部であるが、成形技法および胎土から「甲斐型甕」と判断できるものである。内外面に荒いハケ調整が行われ、雲母等の挟雑物を多く含む粗い胎土である。底部には木葉痕が認められる。28・29は「清郷型甕」と呼ばれる甕の口縁部である。佐野氏による分類中D類に含まれるものであろう（佐野　1987）。口縁部をくの字に屈曲させているもので、口縁部はナデ調整、胴部は指頭による調整が行われており、粘土紐の接合痕が認められる。

墨書土器

2点の墨書土器はともに2区2層からの出土である。釈読については、県教委文化課佐藤正知氏に御教示願った。30は灰釉陶器の碗で、口径13.0cmとやや小振りのもので、口縁部をわずかに外反させる。全体を回転ナデ調整によって成形し、高台は作りの丁寧な三角形高台を持つ。墨書は体部外面に2ヶ所あり、表面は「万冨」（まんとみ）と読める。いわゆる吉祥句として捉えることができよう。31も灰釉陶器の碗であるが、三日月高台の系譜を引くと考えられる三角形高台である。底部に墨書がなされるが、残画であり、また墨痕も薄いため、判読不能であった。

2　木製品　（第22～26図　図版11～14）

小鹿杉本堀合坪遺跡で出土し、登録した木製品の総点数はおよそ250点である。その多くは簡単な加工を施した木片や杭、井戸に用いられた建築部材である。ここでは明らかに製品として用途を限定できる

もの、加工が顕著なもの、遺構出土のものに限って報告することとした。そのため杭の全部、さらに井戸の部材の多くについては省かざるを得なかった。なお分類については『木器集成図録　近畿古代篇』（奈良国立文化財研究所　1984）、『瀬名遺跡III（遺物編Ⅰ）』（静岡県埋蔵文化財調査研究所　1994）を参考にした。

容　器

曲物（1～9）

総計で10点の出土であるが、ここでは井戸ＳＥ162の水溜めとして転用された57を除く9点について報告する。小片のため全体の形状を知り得ないものもあるが、基本的には円形曲物と判断して計測値を出している。曲物については直径のみならず側板の高さも用途と密接な関係があると考えられる。当然分類は直径と側板との相関関係から行われるべきだが、側板の残存したものは皆無であったため、ここでは直径（復元径）から小型品、中型品、大型品の3つに便宜上分けることとした。

小型品は1・2・5・6・9が該当する。直径8.1～14.2cm（2.5～4.5寸）に収まるが、同じサイズのものはない。1はやや歪みのある円形で、計測値は最大径を記載してある。表面には線状の刃痕の他、一部に針書きと考えられる曲線を描く線刻が認められる。2は半切のもので、周縁面に1箇所、小口面に2箇所の木釘孔が認められる。5は小片で周縁部の残りが少ないため、復元径にやや信頼を欠くかもしれない。残存状況が悪く顕著な加工痕は認められなかった。6は最小のものである。周縁部の残存部は少ないが、丁寧に面取りされている。9は表面に朱漆が残されている。表面の加工がやや粗く、斜方向の刃痕が認められる。

中型品としたのは9寸程度のもので、3・4が該当する。3は径に比べ、やや薄手の印象を受けるもので、全体に残りが悪く、加工痕等も不明瞭である。4は溝状遺構ＳＤ251から出土したものだが、小片のため、復元径にやや疑問を残す。周縁部には水平方向の加工痕がわずかに認められる。

大型品は13寸以上のものとしたが、該当するには7・8のみでいずれもＳＥ162から出土している。7は周縁部に8箇所の結合木釘孔が認められたが、不均等な位置にある。表・裏面には加工痕がわずかに残る。周縁部は面取りされ、丸味を帯びた仕上げがなされている。また5箇所に孔が穿たれているが、小口面に近い2箇所はその位置から補修用として考えられる。8は井戸枠転用曲物57の上にあたかも蓋のようにのった状態で出土したものである。周縁面には不均等に11箇所の結合木釘孔が認められ、そのうち1箇所は木釘が外から打ち込まれた状態で残存している。

漆器（10）

10の漆碗1点のみである。残存状態が悪いが、内朱外黒の塗りである。外面には何らかの絵と思われる筆跡が認められるが、モチーフは不明である。

農　具

鍬（11）

鍬の泥除けである。上位が欠損しているため、全体の形状は不明である。柄を通す孔が小さく加工も粗雑であるが、表面から孔へは約26°の角度で削り込んでいる。表面下端には圧痕が、裏面には斜方向の刃痕が認められる。

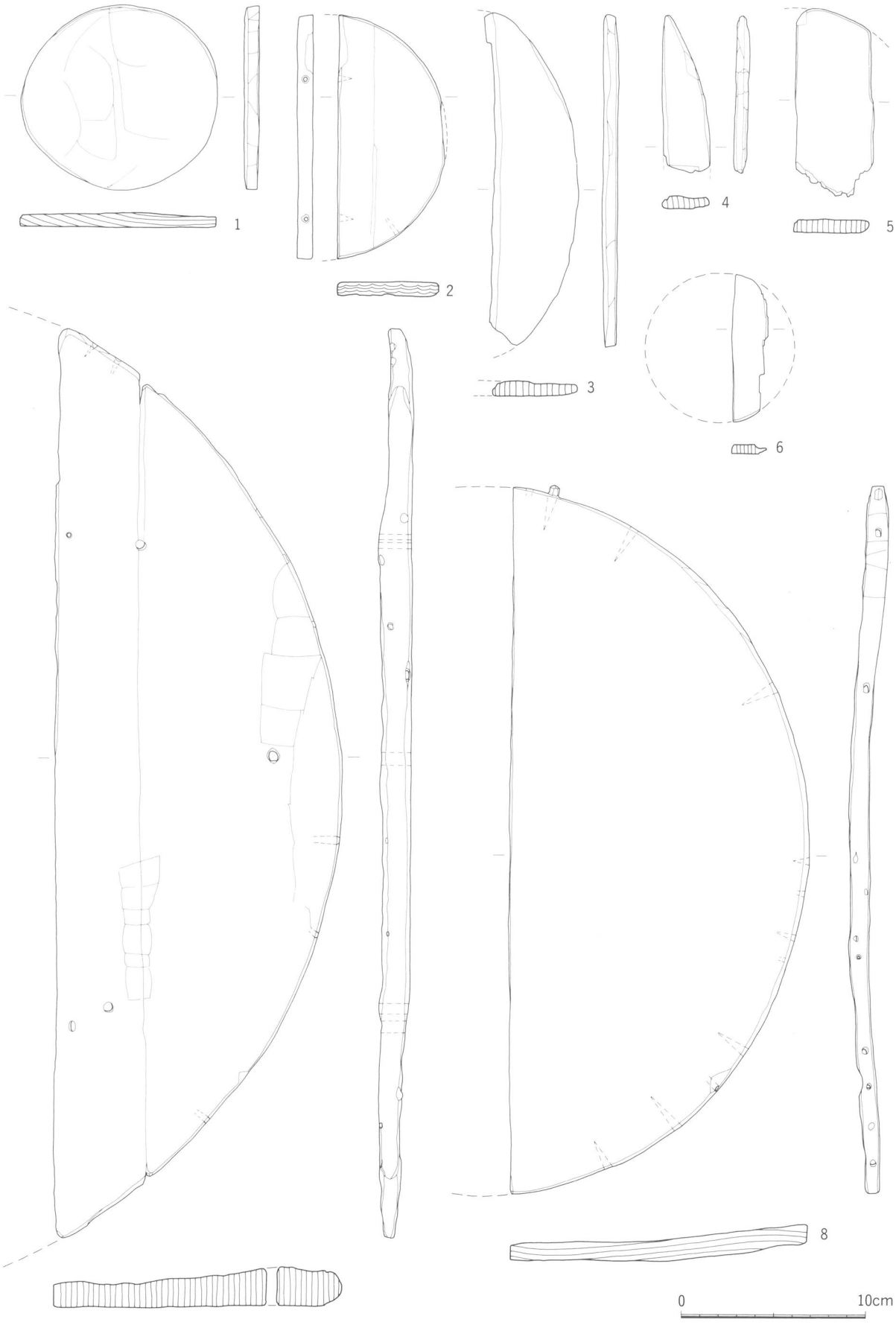
工　具

楔（12）

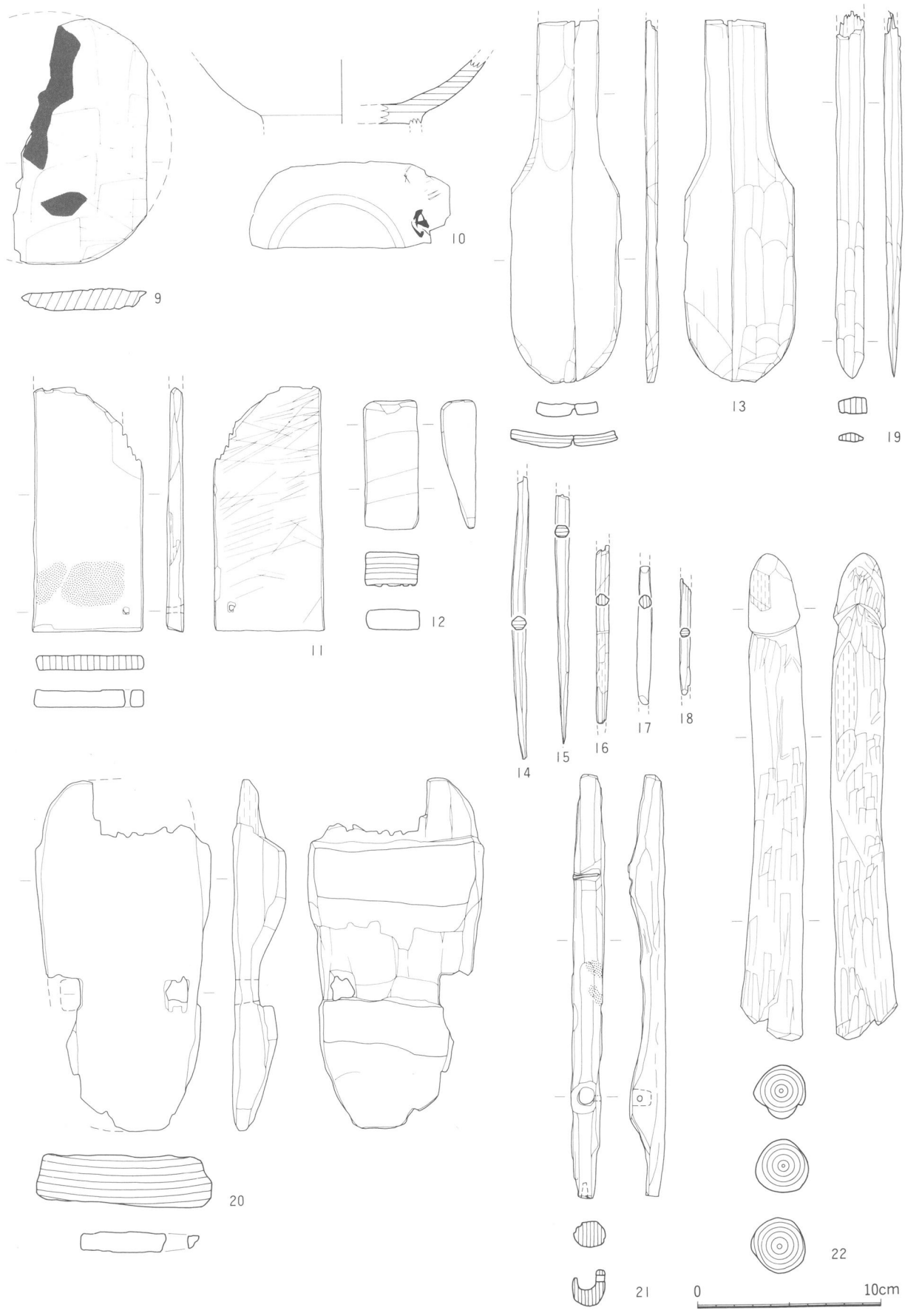
ＳＥ162から出土したものである。長方形を呈した割り面を残す木片の片面を削り出し、刀状に作り出している。先端部分は平坦に加工されている。

食事具

杓子形木器（13）



第22図　出土木製品実測図(1)



第23図　出土木製品実測図(2)

ＳＦ131から半截された状態で別個に出土したものである。いわゆる「めししゃくし」と考えられるもので、身の先縁部分が半円形に整形されており、奈文研分類のＢ型式に当たるものである。身の側縁は直線的に加工され、先端部を薄く削っている。柄は本来さらに長いものと考えられるが、二次的に切断されている。

箸（14～18）

ここでいう箸は木片を小割りにし、棒状に粗雑に削ったものである。箸については食事具としての用途の他に、祭祀具としての用途も考えられているが、小鹿杉本堀合坪遺跡ではその出土量から食事具として判断した。いずれも欠損品であり、全体の形状は不明である。14・15は簡単な面取り加工がなされており、断面は不整形な多角形を呈す。上端を欠損しているが、下端の加工位置から片口箸の可能性を持つものである。16も断面不整形のもので、２つに折れている。先端の削り出しはわずかである。17は両端を欠く、箸の中央部分である。18は欠損部分が多く、断面多角形を呈すと考えられる。

匙型木製品（19）

27はＳＦ131から出土した匙形木製品である。細い割り材を平坦に削ったもので、柄と身との区別は先端を除き同じ幅のため不明瞭であるが、先端部から約8.5cm程の箇所から両面を薄く削ることにより身を作り出している。先端部は柳葉形を呈す。

装身具

下駄（20）

ＳＦ131から出土したもので、一木で、台・歯をつくる連歯下駄である。奈文研分類では①鼻緒孔の位置、②歯の作り方、③平面形態の３項目による分類が行われている。これによれば①については前壺の位置は欠損により不明であるが、後壺が後歯よりも内側につくタイプであることからＢないしＣに当てはまる。②については歯と台とが同じ幅で縦断面が台形を呈すことからＩＩである。ただし、歯の下端は身幅よりわずかであるが広がっており、横断面も台形を呈している。③については欠損部分が多いが、残存部分から前幅より後幅が狭いタイプであり、前・後端も半円形をなすと思われ、ｄと判断できる。このことからＢＩＩｄないしはＣＩＩｄ型式に該当しよう。板目板の裏面を上面として作ったものである。歯の摩滅が著しく、特に後歯は顕著である。

紡織具

糸巻具（21）

ＳＥ162から出土したものである。糸巻具の糸巻部分に当たる。全長23.0cmで、奈文研分類の中型品に当たる。断面はやや横に広い楕円形をなす。結合部分を突出させ、円形にホゾ孔を穿つ。上方のホゾ孔には横木の結合部分が残っており、左側から打たれた固定用の木釘も認められる。また下のホゾ孔の右側面には木釘孔と木釘の一部が残されている。

祭祀具

陽物形（22）

円形の芯持ち材を用いて整形されたもので、亀頭部分を欠損しているが、非常に写実的である。細かい加工痕が全体に認められ、裏面には刃痕が残る。基部については何も加工は施されず、斜めに切り落とされただけである。

用途不明木製品

用途不明品については、形態から板状木製品と棒状木製品、その他の木製品に分類した。

板状木製品（23～27）

23は左側縁を平坦に削り出したもので、端部はやや丸みを帯びている。下位に径４㎜程の孔がある。24は左側縁および下端を欠くもので、上端から右側縁にかけて斜めに削り込む。端部は丁寧に面取りさ

れ丸みを帯びている。裏面には方向不定の刃痕が認められる。25は長方形を呈す薄い板状のもので、左右の側縁は割り面を残す。上位は炭化し欠損しているが、下端は面取りされている。表面に多くの刃痕が認められる。26はＳＥ162から出土したものである。左側縁に割り面を残す。上・下端ともに欠損しているが、中央に径14㎜ほどの丸みを帯びた方形の孔が認められる。27は細い板状のもので、表・裏面に無数の刃痕が付けられている。刃物による切り出しの練習に使われたものであろうか。

棒状木製品（28～32）

28はやや厚めの割り材を加工したもので、上位を欠いている。割り面を残さず、全ての面を丁寧に加工しており、断面は隅丸方形をなす。下端から約13cm程の箇所で、浅い段が付けられている。剣形の柄に当たる部分の可能性を示しておきたい。29は先端部分のみである。下端部分には段がついており、有頭状をなしている。加工痕のほか刃痕が認められる。30はＳＥ162から出土したものである。芯持ち材で、自然に曲がった枝部分を用いている。上端は面取り加工を施し、下端は斜めに切り落としたものである。上位は炭化している。31はＳＦ131から出土したもので、樹皮が付いた芯持ち材の先端の３面を削り杭状にしたものである。加工部分より上は炭化している。32はＳＥ162から出土したもので断面方形と考えられる棒状の割り材を側縁に向けて両側から薄く削り出したもので、側縁には３箇所の切り欠きが認められる。

その他の用途不明木製品（33）

野球用バットのグリップに似た形態のものである。頭頂部から頭部側縁を削り笠形に作り出している。下部には円筒状に伸びる脚状の部分が作られている。鋲形木器の可能性が考えられるが、笠形の下位が平坦をなしていないこと、脚部が方柱状をなしていない点がやや異なる。

建築材

柱根（34・35）

柱根として分類したが、明確な柱穴からの出土ではなく、杭として用いられた可能性もある。しかし、当遺跡で出土した杭と比較して、形態・加工方法ともに異なっていることや、出土地点の相違から、一応柱根として判断した。34は芯持ちの丸太材である。先端部分に加工を加え、わずかにとがらせるような形態をなす。35は芯持ち材を半截したような木取りである。34と同様に端部をとがらせるような加工を施す。

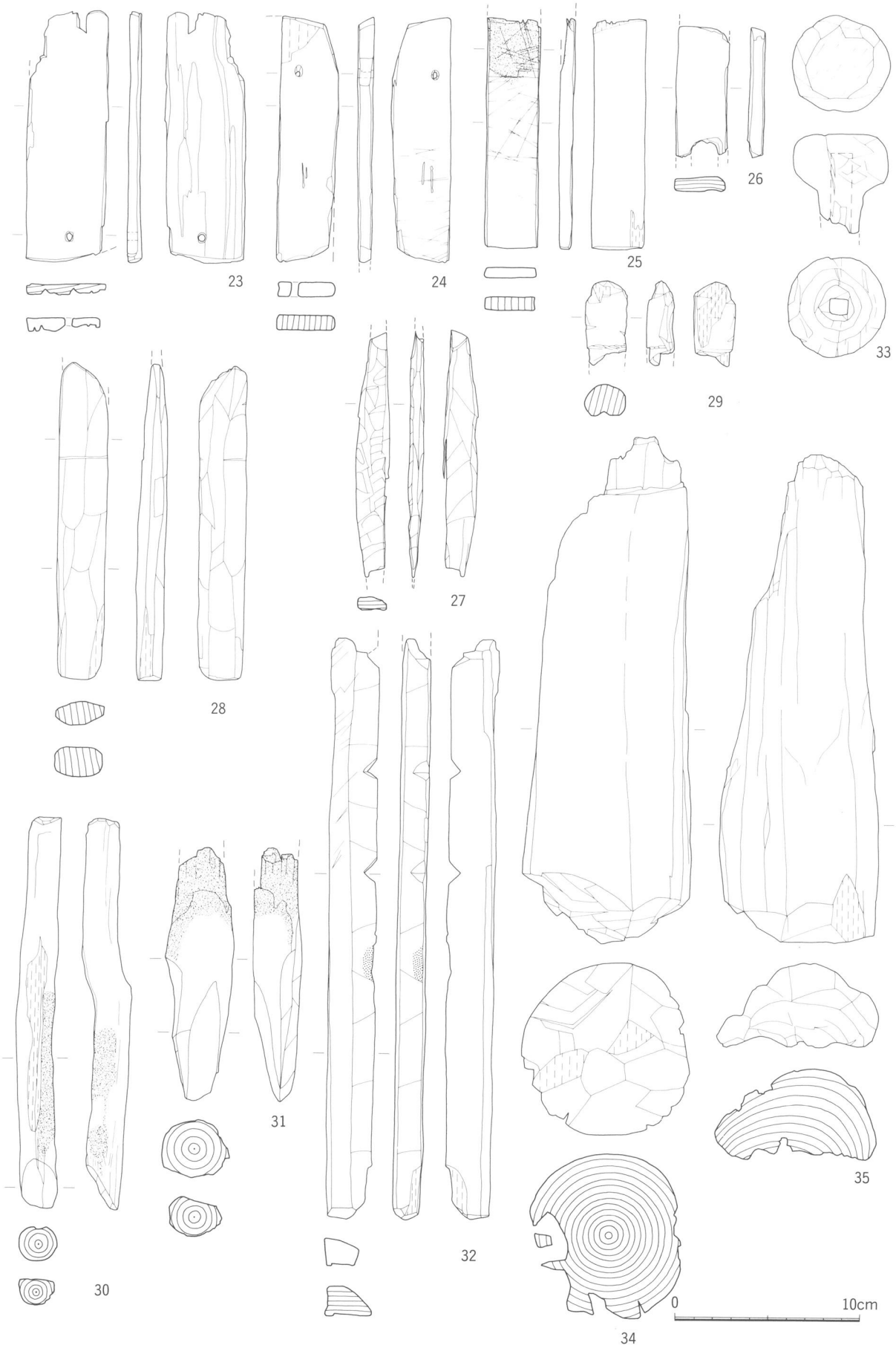
井戸材（36～57）

ＳＥ162の井戸側材である。井戸側材として認定できたのは70点であり、その内訳は横桟木６点、隅柱４点、縦板60点である。

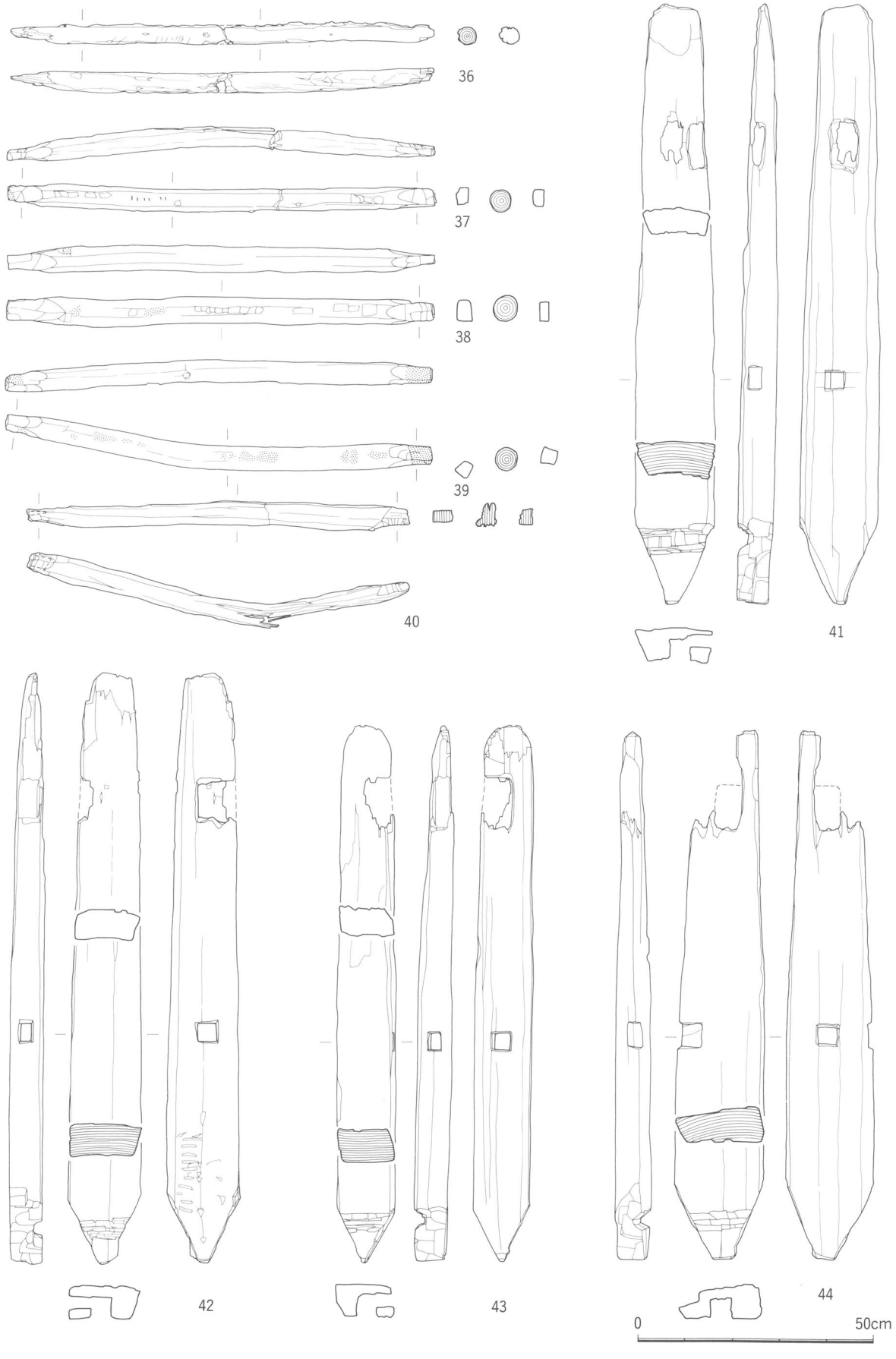
36～40は横桟木である。36は北西壁上段、37は南西壁下段、38は南西壁下段、39は北東壁下段に当たる。これらはいずれも芯持ちの丸太材を用いている。両端を４方向から削り、断面方形にホゾを作り出している。40については法量的には他のものと類似しているが、掘り方内から出土した点や、割り材を使用している点で、ＳＥ162の部材とするには疑問が残る。

41～44はそれぞれ南、西、北、東の隅柱である。粘土層（２層）中にあった上部は残存状態が悪く、やせているが、透水層（砂層）内にあった部分は良好に残っている。厚みのある割り材を用い、先端部分を両側面から削り先端を尖らせることにより、打ち込みやすくしている。また外面先端近くには溝が刻まれている。ホゾ孔は２段あり、上段については朽ちて貫通しているが、本来は下段のように貫通せず、内側に当たる２面にあけられ、横木のホゾがはまることによりそれぞれが固定されるいわゆる包込ホゾと考えられる。ただし、44については内側側面のホゾ孔は四角く切り欠いただけである。

45～56は各側面の壁をなす縦板である。厚さ２～４cmほどの割り材をほとんど加工なしで用いている。柱材と同様、下部の残存状況は良好だが、上部は朽ちて欠損部分が多い。先縁部分の平面形態から①先



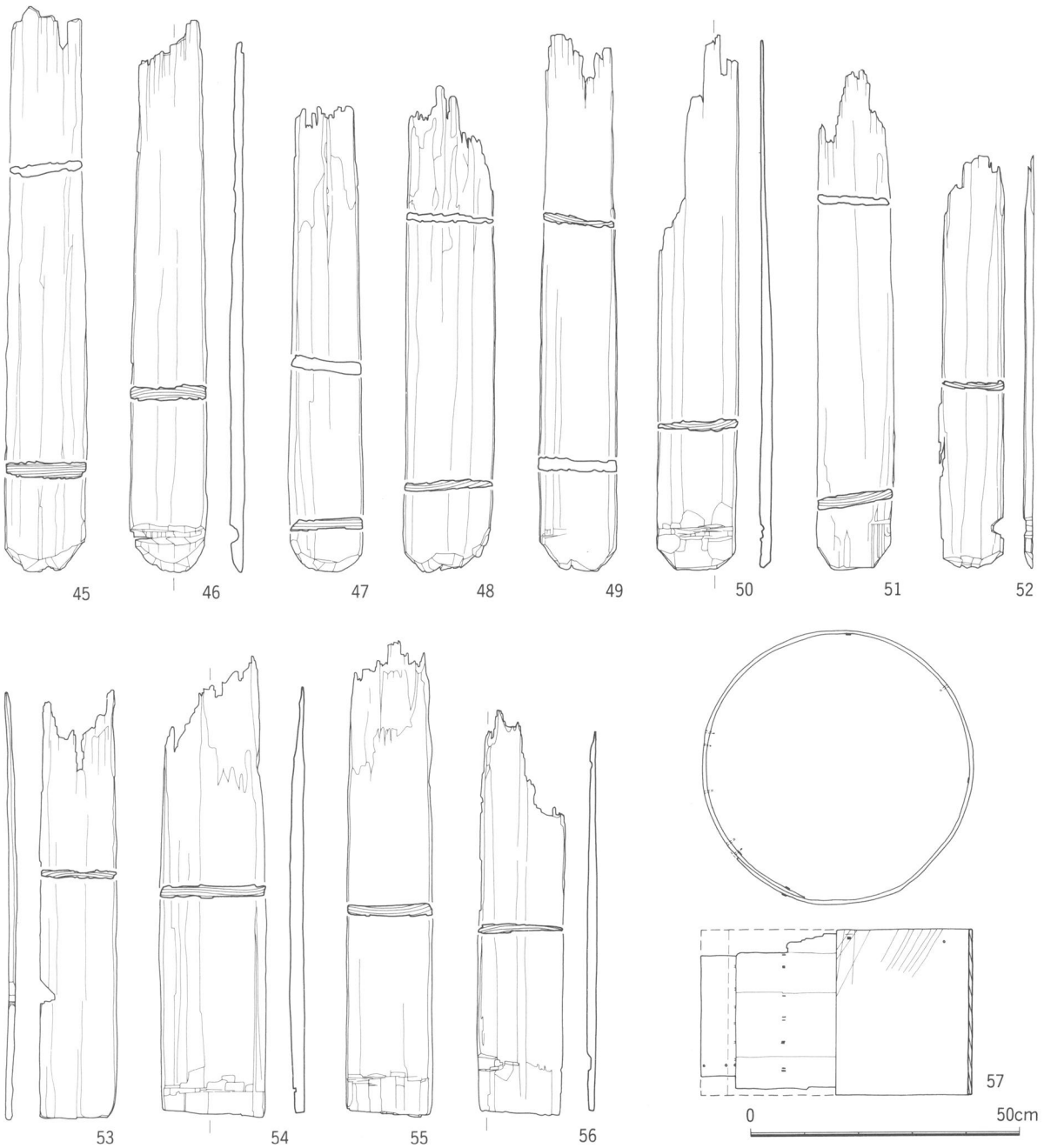
第24図　出土木製品実測図(3)



第25図　出土木製品実測図(4)

縁部を半円形に加工したもの、②先端部分は平坦だが側縁部を斜めに削ったもの、③先縁部が平坦なものに分類した。この内最も多いのは③で、掲載できなかった48点は全てこれに含まれる。①は45～48である。このタイプは45～47で顕著なように先縁部の片側のみを削り込んでいる。46は長辺に直交する水平の溝を削り出している。②は49～52が該当する。先端部分の削りは49・52で認められるが、①に比べその範囲は狭い。50には水平の溝が、52は側縁に切り欠きが施されている。③は薄い割り板をそのまま用いただけのものである。53～56が該当するが、わずかでも加工の痕跡が認められたものだけを取り上げた。53は先縁部の側面がわずかに丸みを帯び、切り欠きが認められるものである。54～56は下端近くに刃痕と加工痕が認められたもので、56には四角い切り欠きが入る。

57は水溜めとして用いられた曲物の側板である。綴じ合わせは2箇所、1列内6段綴じである。内面には縦平行線と斜平行線とによる斜格子状のケビキ線が入る。全体に柿渋が塗られていたような黒色を



第26図　出土木製品実測図(5)

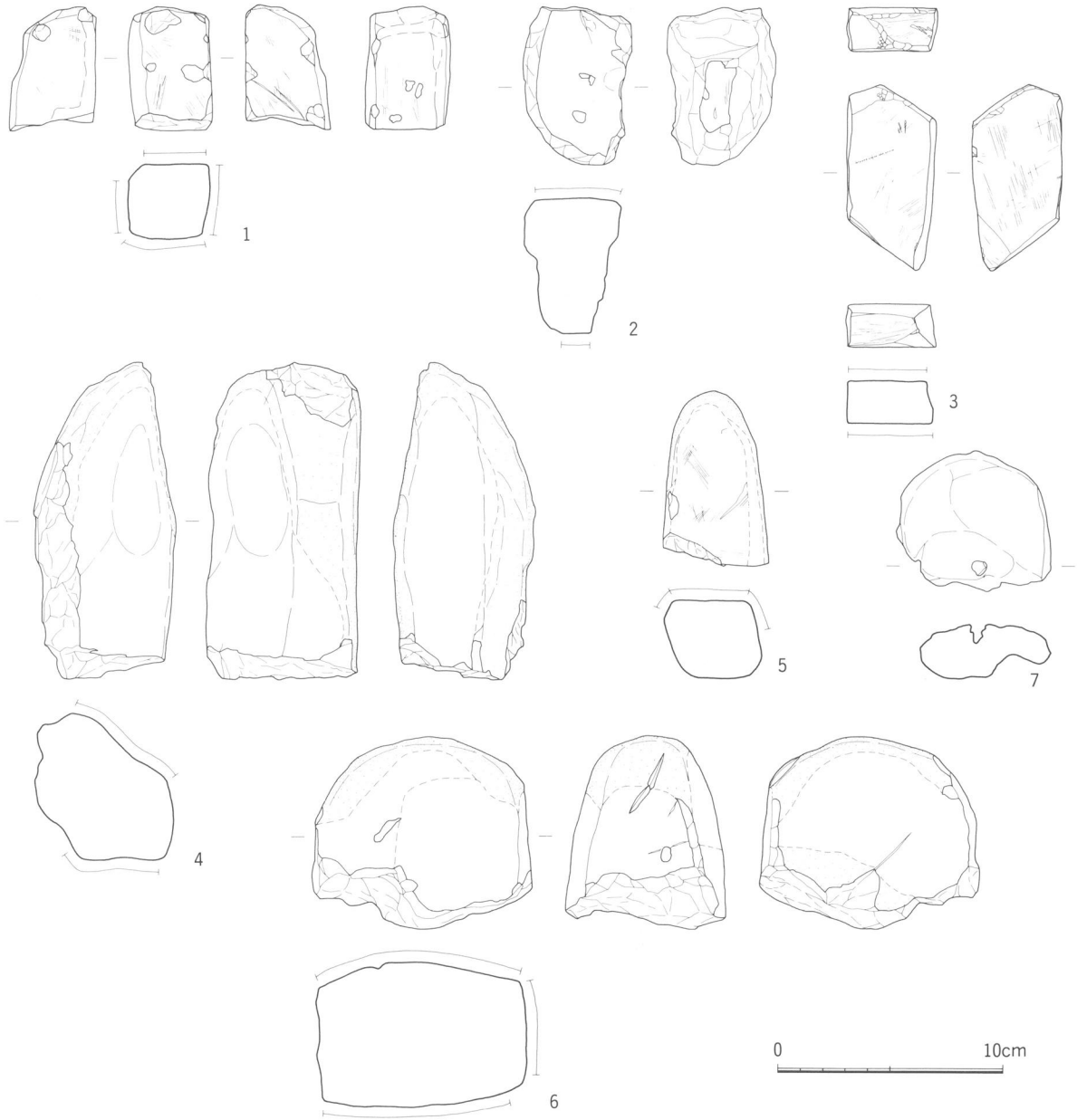
表5　木製品計測表

番号	遺物名			区	出土地点	法量 cm			木取り	樹種	備考	図版
	大項目	中項目	小項目			長さ(口径)	幅・径(底径)	厚さ(器高)				
1	容器	曲物	円形曲物・底	1	SF131		(10.7)	0.8	板目	スギ		11
2	容器	曲物	円形曲物・底	1	E－15		13.3	0.8	板目	スギ		11
3	容器	曲物	円形曲物・底	1	F－16		(26.2)	0.8	柾目	スギ		11
4	容器	曲物	円形曲物・底	2	SD251		(27.1)	0.8	板目	スギ		
5	容器	曲物	円形曲物・底	1	H－16		(11.5)	0.8	柾目	スギ		11
6	容器	曲物	円形曲物・底	1	G－14		(8.1)	0.5	柾目	スギ		
7	容器	曲物	円形曲物・底	1	SE162		(55.0)	2.0	柾目	スギ		11
8	容器	曲物	円形曲物・底	1	SE162		(39.2)	2.0	板目	スギ		11
9	容器	曲物	円形曲物・底	1	F－15		(14.2)	1.2	板目	モミ		11
10	容器	漆器		1	E－15		(7.8)		板目	ケヤキ		12
11	農具	鍬	泥除け	1	G－14	(13.3)	6.0	0.95	柾目	スギ		12
12	工具	楔		1	SE162	7.0	3.0	1.9	板目	スギ		12
13	食事具	杓子形木器		1	SF131	19.8	6.0	0.9	板目	スギ		12
14	食事具	箸		2	F－12	(15.4)	0.8	0.7	板目	スギ		12
15	食事具	箸		1	G－14	(13.6)	0.8	0.7	板目	スギ		12
16	食事具	箸		1	G－14	(9.7)	0.8	0.6	柾目	スギ		12
17	食事具	箸		2	F－12	(7.6)	0.7	0.8	柾目	スギ		12
18	食事具	箸		2	C－12	(6.3)	0.6	0.7	板目	スギ		12
19	食事具	匙状木製品		1	SF131	(20.0)	1.6	0.9	柾目	スギ		12
20	装身具	下駄		1	SF131	(19.1)	9.5	3.0	板目	ヒノキ		12
21	紡織具	糸巻具		1	SE162	23.0	1.9	2.0	柾目	スギ		12
22	祭祀具	陽物		1	F－15	26.5	3.6	3.0	芯持	二葉マツ		12
23	用途不明木製品	板状木製品		1	F－16	13.6	4.4	0.85	板目	スギ		13
24	用途不明木製品	板状木製品		1	G－14	13.3	3.2	0.85	柾目	スギ		13
25	用途不明木製品	板状木製品		1	F－16	(12.5)	2.8	0.75	柾目	スギ		13
26	用途不明木製品	板状木製品		1	SE162	(7.1)	2.85	0.85	柾目	スギ		13
27	用途不明木製品	板状木製品		1	G－13	(13.3)	1.8	0.7	板目	アカマツ		13
28	用途不明木製品	棒状木製品		1	G－14	(17.1)	2.7	1.5	板目	ヒノキ	剣形の可能性	13
29	用途不明木製品	棒状木製品		1	SF131	(4.6)	2.2	1.6	板目	リョウブ		13
30	用途不明木製品	棒状木製品		1	SE162	21.2	1.8		芯持	サカキ		13
31	用途不明木製品	棒状木製品		1	SF131	13.7	3.8	3.1	芯持	コナラ		13
32	用途不明木製品	棒状木製品		1	SF162	(30.2)	2.7	1.7	板目	スギ		13
33	用途不明木製品			1	F－16	5.4	5.2	5.4	板目	カバノキ属	鉢形木器か	13
34	建築材	柱		1	F－15	27.3	9.3		芯持	二葉マツ		13
35	建築材	柱		1	F－15	26.3	8.8			二葉マツ		13
36	建築材	横桟木		1	SE162	90.2	5.0		芯持	イヌマキ		14
37	建築材	横桟木		1	SE162	91.1	5.7		芯持	スギ		14
38	建築材	横桟木		1	SE162	91.1	5.4		芯持	スギ		14
39	建築材	横桟木		1	SE162	90.4	5.0		芯持	スギ		14
40	建築材	横桟木？		1	SE162	81.1	6.1		板目	スギ		14
41	建築材	隅柱		1	SE162	127.7	16.8	7.9	板目	スギ		14
42	建築材	隅柱		1	SE162	125.6	15.5	7.0	板目	スギ		14
43	建築材	隅柱		1	SE162	114.1	12.5	7.2	板目	スギ		14
44	建築材	隅柱		1	SE162	112.5	18.7	7.7	板目	スギ		14
45	建築材	板		1	SE162	104.7	15.0	3.4	板目	スギ		14
46	建築材	板		1	SE162	102.4	14.1	2.8	板目	スギ		14
47	建築材	板		1	SE162	86.1	13.8	3.6	板目	スギ		14
48	建築材	板		1	SE162	90.6	16.6	2.2	板目	スギ		14
49	建築材	板		1	SE162	99.3	14.5	2.8	板目	スギ		14
50	建築材	板		1	SE162	99.1	15.0	2.5	板目	スギ		14
51	建築材	板		1	SE162	92.4	14.1	3.9	板目	スギ		14
52	建築材	板		1	SE162	76.3	12.1	1.8	板目	スギ		14
53	建築材	板		1	SE162	79.4	14.5	2.1	板目	スギ		14
54	建築材	板		1	SE162	85.9	19.5	2.3	板目	スギ		14
55	建築材	板		1	SE162	88.8	16.0	2.5	板目	スギ		14
56	建築材	板		1	SE162	75.4	16.2	1.8	板目	スギ		14
57	建築材	転用曲物		1	SE162		50.3	30.8	板目	スギ		13

呈する。上端から約4.5cm程の箇所までは塗布が薄いため、籠がはまっていた可能性がある。

3　石製品　（第27図　図版15-1）

小鹿杉本堀合坪遺跡から出土している石製品はすべて砥石である。1は断面が正方形に近い柱状のもので、下半を欠損している。表面はやや粗いが、4面を使用している。表面と右側面は顕著に使い込まれており、特に右側面は擦痕のほか刃痕も明瞭に残されている。2は柱状であったと考えられるが、表面を除いては欠損部分が多い。砥面として用いられているのは表・裏の2面のみであるが、表面は良く使い込まれており、上下方向に緩やかな凹凸が認められる。3は板状のもので、側面を割ることによって手持ち用の大きさに加工していると考えられる。左右の側面を除く4面を使用している。いずれも良く使い込まれており、表面は非常に平滑である。すべての面に擦痕が認められる。4は細長い自然礫を利用したもので、下半が欠損している。砥面として表面・左右側面の3面認められるが、側面は使用範



第27図　出土石製品実測図

囲が狭い。また裏面にも平坦な面があるが、砥面として使用する前に簡単に加工を施したものと考えられる。5は土坑ＳＦ118から出土したものである。下半を欠いており不整形で安定感がないが、上端から左側縁部までを打ち欠いて形を整えている。砥面としては表面～右側面と裏面の2面が用いられているが、裏面は使用が非常に顕著で平滑になっている。6は円形の礫の左右側面を打ち欠き整形したもので、下半を欠いている。砥面は表面・右側面・裏面の3面で、3面ともに刃痕が認められる。右側面は非常に良く使い込まれ、鏡面状に平滑になっており、光沢が認められる。7は軽石製のものである。表面に径約6.5㎜程の穿孔があり、管状のものを回転させて研磨したものとして考えた。

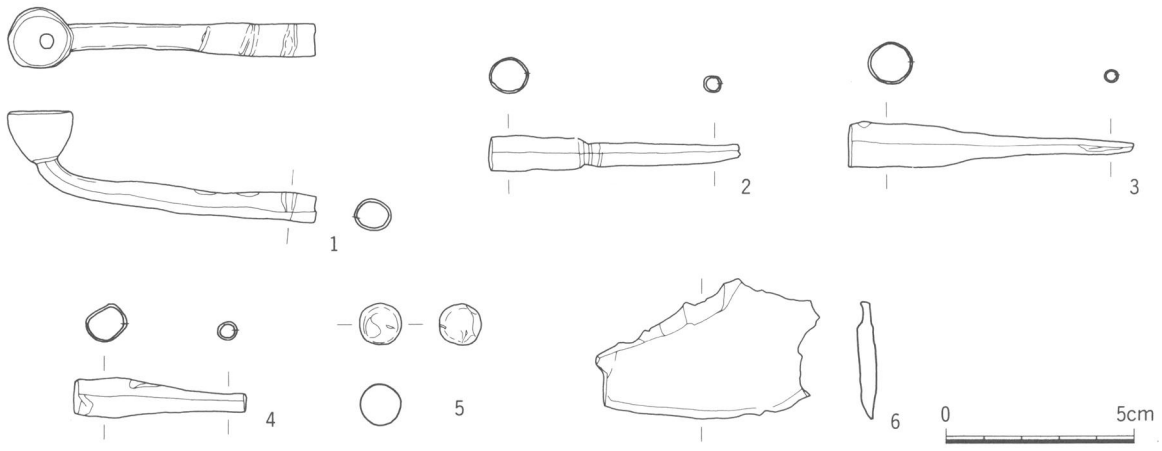
4　金属製品　（第28図　図版15-2）

小鹿杉本堀合坪遺跡で出土した金属製品は合計6点である。このうち遺構から出土したものは1点に限られ、その他は包含層ないしは攪乱土の除去中に発見したものである。

1～4はキセルであるが、ラウのついた完形品はない。雁首は1の1点のみであるが、脂返しが弯曲する河骨形と呼ばれるものである。火皿は椀形を呈すもので、首部の弯曲はやや緩やかである。火皿と首部の接合部に補強帯は巻かれておらず、管を成型する時の継ぎ目が左側に認められる。首部の上面には吸い殻を落とす際のタタキ痕があり、平坦に潰れている。2～4は吸口である。ラウに取り付く部分が一段太く巻かれた「肩付」と呼ばれるタイプは2のみで、その他は1本の管で作られたものである。いずれも左側に銅版の接合部分が認められる。全長にはばらつきがあるものの、継口部径は9～10㎜、吸口部径は3㎜とはぼ一定している。2には肩と吸口の接合部に2条の線刻が認められる。

5は鉄砲玉である。直径11㎜の完形品で、表面には平坦に削り取ったような箇所が認められる。

6は井戸ＳＤ162から出土した包丁である。欠損や腐食により全体の形状は不明だが、刃部の弯曲からやや先端に近い部分と考えられる。断面左側に角度がつけられ、刃が作り出されている。



第28図　出土金属製品実測図

表6　石製品計測表

番号	器種	調査区	出土層位・位置	長さ cm	幅　cm	厚さ cm	重さ g	色	石　材	備　考	図版
1	砥石	1	2層　H－14	5.5	3.7	3.7	119.9	灰褐色	含礫砂岩？	一部黒化	15
2	砥石	1	南側排水溝	7.0	4.8	6.0	208.1	淡黄褐色	流紋岩質凝灰岩		15
3	砥石	2	2層　E－12	8.2	4.0	1.9	125.0	暗緑色	輝緑凝灰岩		15
4	砥石	2	2層　F－11	7.8	4.7	3.5	194.6	灰緑色	凝灰質砂岩		15
5	砥石	1	SF118	14.1	6.8	6.5	766.1	灰褐色	中粒硬質砂岩		15
6	砥石	1	2層　F－16	8.6	9.7	7.1	809.6	帯赤褐色	中粒砂岩		15
7	砥石	1	南側排水溝	6.2	6.8	3.6	25.3	灰色	軽石		15

表7　金属製品（キセル）計測表

番号	種　別	区	出土地点	法量 mm								備　考	図版
				全　長	全　高	火皿径	首部長	継口径	肩部長	吸口径	重さ g		
1	キセル（雁首）	3	F　－　5	82	31	17	74	8	－	－	9.5	首部上面にたたき痕	15
2	キセル（吸口）	3	H　－　6	57	－	－	－	9	25	3	5.5	吸口に線刻	15
3	キセル（吸口）	3	G　－　6	76	－	－	－	10	－	3	6.5		15
4	キセル（吸口）	2	排土中	46	－	－	－	〈12〉	－	3	4.2	継口つぶれ	15

表8　金属製品（鉛玉・包丁）計測表

番号	種　別	調査区	出土層位・位置	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	直径 mm	重さ g	備　考	図版
5	鉛玉	3	2層　E－3				11	8.3		15
6	包丁	1	SE162	(58)	(37)	(5)		16.0		15

第Ⅴ章　トレンチ調査の結果

第１節　調査区外のトレンチ調査

建物建設予定地内の調査は第Ⅳ章で述べたように攪乱部分が多く、目的としていた坪界線の検出が困難であったため、表層条里から推定される坪界線の位置に想定される箇所にトレンチを入れ、坪界線の確認調査を行った。以下、各トレンチについて概要を記述するが、本文中基本層序としたものは第Ⅲ章の層序である。またグランドおよび既存建物部分を除いて敷地内は砕石を盛って整地を行っているが、ここでは砕石と攪乱（埋土）を分離せず攪乱として一括して扱った。

第１トレンチ

３区北側、Ｇ－２′・Ｈ－１グリッドに設定し、南北方向の坪界線検出を目的として設定した。現地表面下約1.8m ほど掘り下げたが、攪乱が1.5m ほどあり、残存していた土層は基本層序の３層に相当する砂・シルトの互層の一部のみであった。

第２トレンチ

３区の西側、Ｄ－６グリッドに設定し、東西方向の坪界線の検出を目的とした。確認することができた土層は４層あるが、全体に攪乱による乱れが大きく、特に南側で顕著で、４の砂・シルト互層にまで影響を与えている。１の暗灰色砂質粘土は基本層序１層に、２・３の灰色砂混じり粘土は砂の混入の度合いから２つに分離したものだが、基本層序２層に該当する。４は３層に相当するが、北側では最上位が砂となっているのに対し、南側はシルトとなっている点で、他の地点とやや様相を異にしている。このトレンチは基本層序と同一の堆積を認めることができたが、断面では明確な遺構は確認できなかった。

第３トレンチ

３区の南側に設定し、第１トレンチと同方向の坪界線検出を目的としたものである。東側には建物の基礎と考えられる深い攪乱があったが、西側は現地表面下約65㎝で、１層に対応する暗灰色砂質粘土が残存しており、比較的残りが良かった。２層に対応する２の灰色砂混じり粘土上面で、わずかに西側に下がっている印象を受ける。また４の砂・シルト互層（３層対応）上面でも西側の落ち込みが認められた。これについては表層条里の位置と対応しており、坪界線の西側の立上がりである可能性が高い。

第４トレンチ

旧図書館の南側に設定したもので、今回の調査では最南端に位置するトレンチである。攪乱が現地表面下約1.0～1.1m と厚く、２層に対応する１の灰色砂混じり粘土まで削り込んでいる。また２の灰色粘土は調査区内およびＡ列以北に設定したトレンチでは確認されていない。後述する体育館部分のトレンチでも確認されており、Ａ列以南（南西）のみで堆積していると考えられる。２および３でわずかに東側が高くなっていくような印象があったが、既存の建物の関係でトレンチの拡幅ができず、性格は判断することができなかった。

第５トレンチ

旧体育館の東側に設定し、東西方向の坪界線の検出を目的とした。現地表面下約１ｍほど攪乱があ

り、基本層序として確認できたのは基本層序2層以下のもので、1・2が対応する。だが、残存している部分はごくわずかである。このうち、2の砂礫混じり粘土はE′ポイント付近でのみ確認されたものである。5の砂・シルト互層は3層に対応する。3は約40cm程の層厚を計測する粗砂～砂礫、4は層厚約10～40cmの砂層である。

第6トレンチ

1区の南側に設定し、第5トレンチに平行して入れたものである。このトレンチでは基本層序に該当する層として確認できたのは2の灰色砂混じり粘土のみであるが、攪乱および1の砂礫によって削られており、残りは非常に悪い。2の下には中粒の灰色砂が厚く堆積し、南側には砂礫が続いている。この砂礫についてはFポイントから19m地点より南側では1と4とを分けることができなかった。また4の砂礫は1区の第3遺構面で確認した旧河道に対応するものであり、北から南に流れる非常に押し出しの強い河道であったことが窺われる。16～23列付近が幾度にもわたり河道となっていたと考えられる。

第7トレンチ

1区の南側に設定したもので、第5・6トレンチと同様の東西方向の坪界線の検出を目的としたものである。現地表面から25～80cmほど攪乱が続く。1の灰色砂混じり粘土は基本層序の2層に対応すると考えられるが、2の砂・シルト互層（3層対応）の浅い窪みに堆積しているように認められるだけである。また2は非常に厚く堆積しており、調査した範囲では1m以上にもわたっている。このトレンチ周辺は旧薬科大学のグランド部分に当たっており、造成時の削平により調査対象とした層は失われたと考えられる。

第8トレンチ

1区南側に東西方向のトレンチとして設定した。攪乱が現地表面下約40～60cmほどあり、建物の基礎と考えられる部分も存在する。1の灰色砂混じり粘土と2の暗灰色粘土は2層に対応するが、2は西側での確認のみである。3は中粒～粗粒の砂で第5トレンチの3・4、第6トレンチの3に対応すると考えられる。このトレンチの東側では攪拌の痕跡および竪根がみられたが、明確な畦畔遺構は認められなかった。

第2節　体育館建設予定地のトレンチ調査

体育館建設予定地については既存の建物として図書館と体育館が残っており、平成6年度の解体工事終了を待って、平成7年度にトレンチによる調査を行った。なおトレンチの番号については混乱を避けるため調査区外のトレンチ調査の続きとした。

第9・10トレンチ

旧体育館部分にT字型に設定したトレンチで、東西方向のものを第9、南北方向のものを第10とした。第9トレンチは全体を約2m掘削した。現地表面から約60～70cmほどの攪乱が入っており、建物の基礎と思われる深い部分も存在する。全体を6つの層に分けたが、1の暗灰色砂質粘土は基本層序1層に、2の灰色砂混じり粘土と3の灰色粘土は2層に対応する。このうち3は砂の混入がない堅くしまった粘土で、トレンチ西側にのみ堆積しており、第4トレンチの2と同様のものである。2層対応の土には竪根が認められ、水田耕作土として考えられるが、Aポイントから約1.2～1.8m部分には竪根がほとんど

認められなかった。これについては畦畔状の盛り上がりは認められなかったが、畦畔が存在していた可能性を窺わせるものである。4は中粒～粗粒の砂層が堆積しているが、東側は砂層が薄く下位に砂礫が20～30cmの厚さで堆積している。

第10トレンチは解体工事により掘削が行われており、現地表面の標高が他に比べ低い。残存している層は砂混じり粘土で、基本層序2層に対応するが、第9トレンチ3の灰色粘土は認められなかった。また基本層序3層に対応する砂・シルト互層については非常に厚く、1m以上の堆積がある。

第11トレンチ

旧図書館部分に入れたトレンチで、東側は拡幅し、現表面下約4mまで掘り下げ、下層の確認を行った。攪乱部分が多く、安定的に土層が認められたのはBポイントから5.5～12mの地点である。1の暗灰色砂質粘土は基本層序1層に対応する。2は灰色粘土で基本層序の2層に対応させるが、砂がほとんど混入しておらず、第1トレンチの3と同一のものであり、第9トレンチの灰色砂混じり粘土は認められかった。また西側では灰色粘土の下に3の灰色シルト混じり粘土が堆積しており、12m地点では幅1.3mほどの落ち込みが認められた。また4の砂・シルト互層は他地点では上位にあった砂層が欠落し、シルトが最上層に堆積しており、全体に堆積は薄い。5は灰色粘質シルトで基本層序4層に対応するが、層厚は50～60cmを計測しており、かなり厚い。6は5層に、また7は7層に対応するが、基本層序の6層である砂・シルトの互層は欠落している。また7においては1・2区で確認した攪拌痕跡は認められなかった。8・9・10はそれぞれ基本層序の8・9・10層に対応している。このうち1・3区で平面調査を行った9層については遺構・遺物ともに認められなかった。11は12層に対応するが、この層の上面から幅1.3m、深さ25cm程の落ち込みが認められた。またこの落ち込みを挟んで両側には粗砂をベースにした砂礫層がレンズ状に堆積している。13・14・15はそれぞれ基本層序の12層・13層・14層に対応すると考えられる。

このトレンチでは4および11で落ち込みを確認したが、前者は覆土から調査区第2遺構面で確認された溝状遺構と同様のものと考えられる。後者については遺構と考えるよりもむしろ自然の落ち込みと考えた方がよいと判断した。

第12トレンチ

第9トレンチの北側に設定したトレンチで、1～3までは第9トレンチと共通している。4の灰色砂質粘土についてはこのトレンチのみで確認できた層であるが、基本的に2～4は基本層序の2層に対応するものとして考えられる。Dポイントから5mより東側にわずかに盛り上がりを認めることができ、畦畔の可能性がある。またこの箇所は先述した第1トレンチの竪根の少ない部分と位置的に対応する。

第1トレンチ南壁土層断面図

A 11.20m A′

撹乱

1

1 砂・褐灰色シルト互層

第2トレンチ東壁土層断面図

B 10.20m B′

撹乱

1 暗灰色砂質粘土
2 灰色砂混じり粘土
3 灰色砂混じり粘土（砂少ない）
4 砂・シルト互層

第3トレンチ南壁土層断面図

C 11.20m C′

撹乱

撹乱

1 暗灰色砂質粘土 3 灰色粘土
2 灰色砂混じり粘土 4 砂・シルト互層

第4トレンチ南壁土層断面図

D 11.20m D′

撹乱

1 灰色砂混じり粘土
2 灰色粘土
3 砂・シルト互層

第5トレンチ東壁土層断面図

E 11.20m E′

撹乱

1 灰色砂混じり粘土
2 灰色砂礫混じり粘土
3 灰色粗砂～砂礫
4 灰色中粒砂
5 砂・シルト互層

第6トレンチ東壁土層断面図

F 11.20m

撹乱

F′ 10.20m

撹乱

1 砂礫
2 灰色砂混じり粘土
3 灰色砂（中粒）
4 砂礫

第7トレンチ西壁土層断面図

G 11.10m G′

撹乱

1 灰色砂混じり粘土
2 砂・シルト互層

第8トレンチ南壁土層断面図

H 10.60m H′

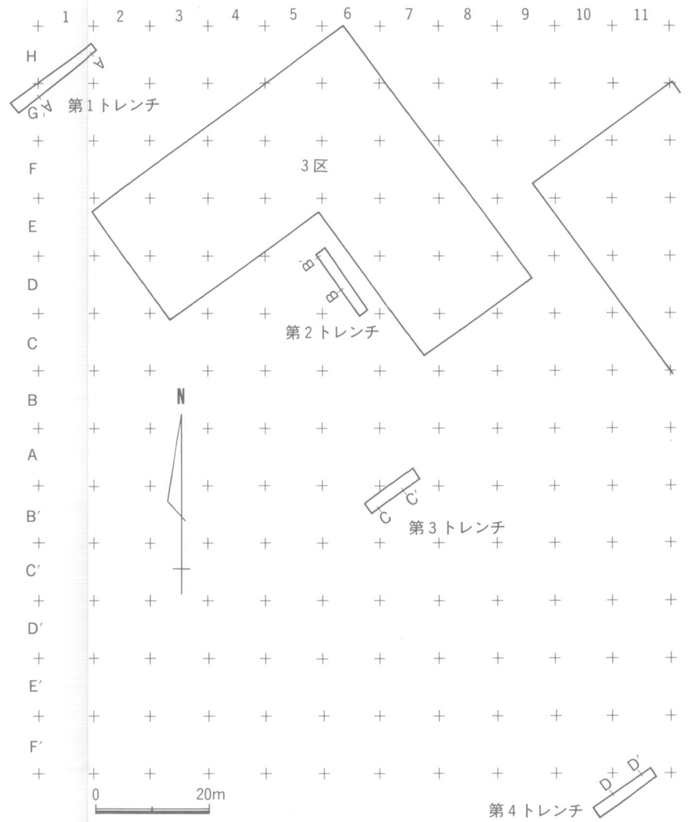
撹乱

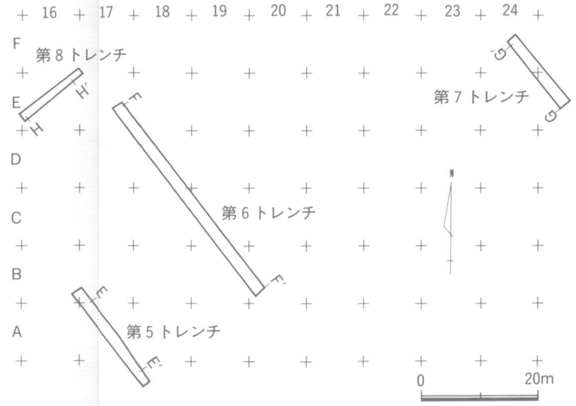
1 灰色砂混じり粘土
2 暗灰色粘土
3 砂（中粒～粗粒）

砂
砂礫
砂・シルト互層

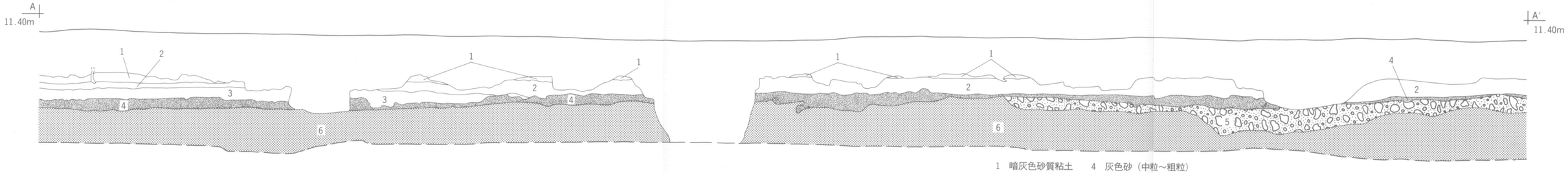
0 4m

第29図　調査区外トレンチ土層断面図



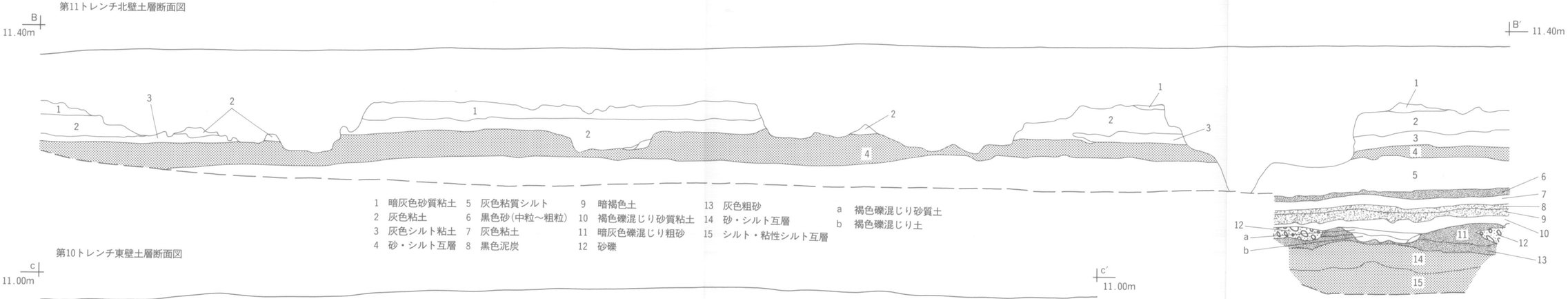


第 9 トレンチ北壁土層断面図



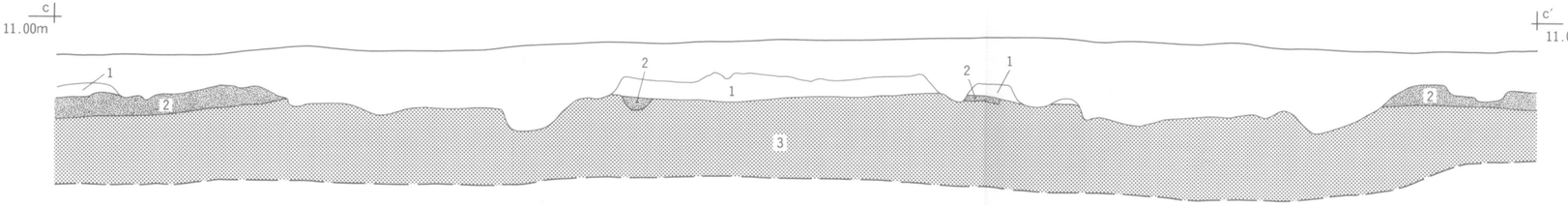
1 暗灰色砂質粘土　4 灰色砂（中粒～粗粒）
2 灰色砂混じり粘土　5 砂礫
3 灰色粘土　6 砂・シルト互層

第11トレンチ北壁土層断面図



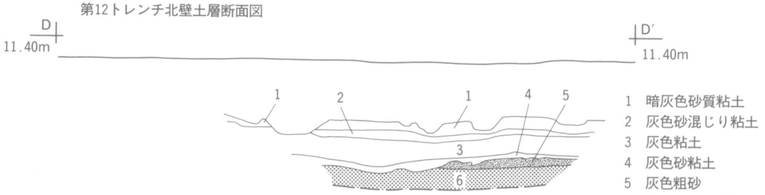
1 暗灰色砂質粘土　5 灰色粘質シルト　9 暗褐色土　13 灰色粗砂　a 褐色礫混じり砂質土
2 灰色粘土　6 黒色砂（中粒～粗粒）　10 褐色礫混じり砂質粘土　14 砂・シルト互層　b 褐色礫混じり土
3 灰色シルト粘土　7 灰色粘土　11 暗灰色礫混じり粗砂　15 シルト・粘性シルト互層
4 砂・シルト互層　8 黒色泥炭　12 砂礫

第10トレンチ東壁土層断面図

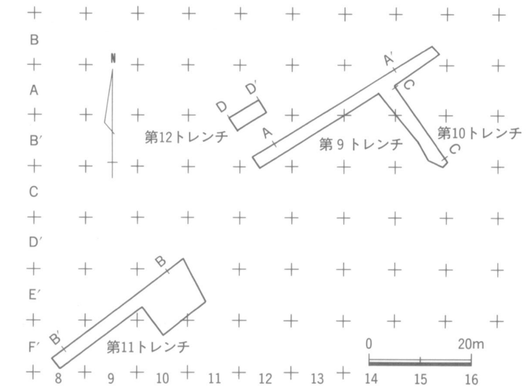


1 灰色砂混じり粘土
2 灰色砂（中粒～粗粒）
3 砂・シルト互層

第12トレンチ北壁土層断面図



1 暗灰色砂質粘土
2 灰色砂混じり粘土
3 灰色粘土
4 灰色砂粘土
5 灰色粗砂
6 砂・シルト互層



砂
砂礫
砂・シルト互層
腐植土

第30図　体育館建設予定地内トレンチ土層断面図

第Ⅵ章　まとめ

小鹿杉本堀合坪遺跡の調査成果について簡単に整理し、まとめとするが、平成４年から行われた調査の最終報告として、新たな知見を得たこともあり、前２回の調査成果も踏まえたまとめとしたい。

１　条里型地割について

今回の調査の成果の１つとして、１区で検出した擬似畦畔の検出がある。これについては２層上面での精査段階においては、削平等による影響のためか確認することができなかった。長さも約８ｍ足らずであり、これをもって埋没条里の存在とするにはいささか問題があるかもしれない。第30図は、小鹿杉本堀合坪遺跡周辺の表層条里から復元した条里型地割に、今回の調査範囲を組み合わせて作製したものである(1)。これによれば、１区の擬似畦畔は、条里型地割の坪界線に乗っていることが判明した。また第３トレンチで確認した立ち上がりも、わずかにずれがあるものの、坪界線に相当すると考えられる。平成５年度調査においては、２区及びＡ区で畦畔の検出、また３区・Ｂ区で土層断面による推定畦畔が報告されているが（静岡県教育委員会　1994）、２区については今回の調査で落ち込み（自然流路）の立ち上がりであると判断できた点や、畦畔推定位置図が、静清平野で確認されている107mピッチ(2)ではなく、95mピッチで復元されている点からも、疑問を持たざるを得なかった。そのため、二次調査で報告されたものと今回の調査において坪界畦畔としたものについての関連性は認めることができず、小鹿杉本堀合坪遺跡での条里型地割の坪界線の検出は１区と第３トレンチの２ケ所であるとしておきたい。

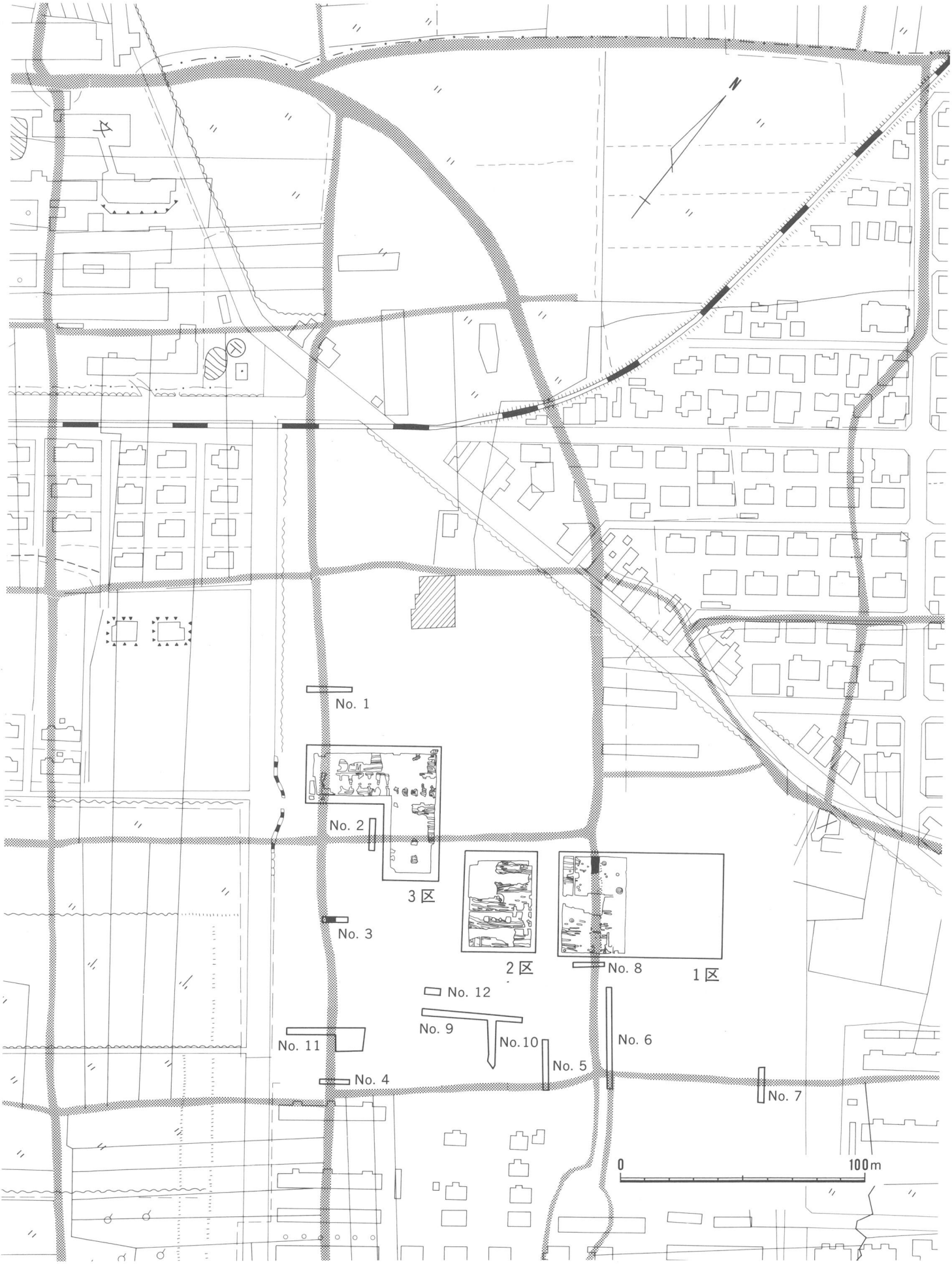
ところで、静岡平野南部地域での発掘調査における条里型地割の検出は、鷹ノ道遺跡（静岡市教育委員会　1991）、神明原・元宮川遺跡（稲妻地区）（静岡県埋蔵文化財調査研究所　1988）が知られているのみであり、今回の調査は、静清平野南部における埋没条里が表層条里と一致する広域条里型であったことを示す一例となったとしておきたい。

２　溝状遺構について

今回の調査で最も多く検出されたのは、溝状遺構である。これについては、本分中の記述及び計測表により示したが、ここでは、主軸方位から再度分析を試みた。表９は主軸方位別の割合であり、第31図は主軸方位をグラフに示したものである。図中のスクリーントーンは静清平野で施行された広域条里Ｎ－38°～39°－Ｗを表している。ここでは数的に卓越している東西方向の溝状遺構についてのみ述べておきたい。主軸方位には本文中で述べたように、Ｎ－30°－Ｅ～Ｎ－82°－Ｅというバラツキが存在するが(3)、およそＮ－50°～60°－Ｅという10°の範囲に全体の65.4％が占められている。広域条里の方向と一致するものの割合は、3.9％と少ないが、概ね方向は軌を一つにしているものと言うことができ、この溝状遺構が、広域条里型の水田に関わりを持って形成されたと考えることができそうである。

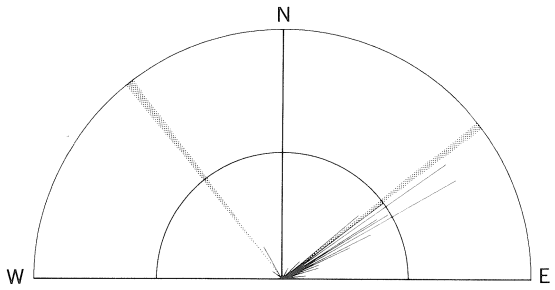
これらの溝に類似する例として神明原・元宮川遺跡の稲妻地区の溝状遺構をあげることができる。およそＮ－52°～55°－Ｅの方向を持つ溝状遺構が幅約12mの範囲に10数本検出されている。南北方向の溝は１本でＮ－32°－Ｗの方向である。この溝について、矢田氏は、表層条里型地割の坪界線にあたることから同一地点での畦畔復興・補強のための採土の可能性を指摘しておられる（矢田　1990）が、その北側に井戸や柱穴などが存在することから区画の意味も持ち合わせていたと思われる。小鹿杉本堀合坪遺跡の溝状遺構については、坪界線部分だけではなく、水田域として考えた全域から検出されており、間隔や形状も企画性を持つようには考えられず、性格は若干異にすると思われる。

ところで、今回検出した溝状遺構では、南北方向が少なく、東西方向が卓越している点をどのように



第31図　小鹿杉本堀合坪遺跡周辺条里推定図

考えたらよいであろうか。曲金微高地は、駿府城付近から東へ延びる微高地であり(加藤　1983)、当遺跡の所在する微高地南側は南に向かう斜面となっている。矢田氏によれば、この曲金微高地の等高線に直交して長地型の長辺がくるものであり、交差する方向での取排水の効率から坪内の地割が行われたとされている（矢田　1987)。この考えに従うならば、当遺跡周辺は、基本的には横長地割（東西方向の地割）であったと想定できる。今回検出の溝状遺構において、東西方向が卓越していることはそのことと関連づけられるのかもしれない。すなわち、これらの溝状遺構が畦畔の造成・復興・補強と考えるよりは、むしろ、耕起など水田耕作そのものに関わる行為から生じたものと判断したい。遺物の出土がほとんどないことからも水田とのかかわりを窺えるのであり、その方向は坪内部の地割方向に規制された方向であったと考えたい。



第32図　溝状遺構方位図

表９　溝状遺構方位別一覧表

角　度	本　数	比　率（%）	角　度	本　数	比　率（%）
N － 30°－ E	1	0.8	N － 62°－ E	4	3.1
N － 44°－ E	1	0.8	N － 63°－ E	8	6.2
N － 45°－ E	2	1.6	N － 64°－ E	1	0.8
N － 48°－ E	1	0.8	N － 65°－ E	6	4.7
N － 49°－ E	1	0.8	N － 66°－ E	3	2.3
N － 50°－ E	8	6.2	N － 67°－ E	2	1.6
N － 51°－ E	2	1.6	N － 68°－ E	1	0.8
N － 52°－ E	3	2.3	N － 69°－ E	1	0.8
N － 53°－ E	10	7.8	N － 71°－ E	1	0.8
N － 54°－ E	3	2.3	N － 72°－ E	2	1.6
N － 55°－ E	17	13.3	N － 73°－ E	3	2.3
N － 56°－ E	3	2.3	N － 75°－ E	1	0.8
N － 57°－ E	9	7.0	N － 76°－ E	2	1.6
N － 58°－ E	10	7.8	N － 77°－ E	1	0.8
N － 59°－ E	3	2.3	N － 82°－ E	2	1.6
N － 60°－ E	16	12.5	合　計	128	100

角　度	本　数	比　率（%）
N － 27°－ W	1	7.7
N － 28°－ W	1	7.7
N － 30°－ W	3	23.0
N － 33°－ W	1	7.7
N － 35°－ W	1	7.7
N － 37°－ W	2	15.4
N － 38°－ W	1	7.7
N － 40°－ W	1	7.7
N － 42°－ W	1	7.7
N － 50°－ W	1	7.7
合　計	13	100

3　集落関連遺構の検出

今回の調査は、当初水田遺構の検出を目指したものであったが、図らずも集落関連遺構の検出があった点は成果の１つとしてあげられる。

２層上面での精査時にはいずれも検出できなかったものであり、生活面は２層堆積中のいずれかの時期に存在したものと考えられる。このうち井戸ＳＥ162及びＳＦ118(4)などは坪界線とした擬似畦畔１の東側に位置しており、曲金微高地（小鹿街道微高地）の縁辺部に存在している。このことは集落本体が曲金微高地上に存在しており、その端部であったことが窺えるのである。さらに先述した溝状遺構は２・３区に比べ、１区では極端に少ない点、またＨ－14列グリッドよりも北及び東側のグリッドでは検出されていないことからも、坪界線付近を境に集落域と水田域に分けられていた可能性を指摘することができる(5)。

4　水田耕作について

今回水田耕作土の可能性を指摘できる層として２層・7a 層・９層がある。それぞれの層について過去２回の調査を踏まえ、簡単に整理したい。尚、ここで言うイネのプラント・オパール分析は平成４年度に実施した分析結果に基づいている（静岡県教育委員会　前掲書）。

まず、２層であるが、上面で畦畔が検出されており、イネのプラント・オパールも4,700個／ｇという高い数値を示しており、水田耕作土として明らかに認識されよう。この層は現地表面から約50～80cmという高さから検出されており、耕作土として用いられた期間は極めて長いと考えられる。２層および３層においては水田検出の指標である巻き上げ痕や攪拌痕などは非常に不明瞭で、土質が均質化していた。それは永年にわたる耕作の結果として捉えることができるのだが、そのため特定時期としての水田やそれに伴う畦畔や溝などの検出を困難にしている。今回の調査においても２層中での遺構検出はできず、２層下面の調査では、２層上面で検出された畦畔よりもより古い時期の水田が存在していた可能性を示すにとどまってしまった。この水田に関しては１区Ｆ－16グリッドに位置する土坑ＳＦ131が注目される。この土坑は擬似畦畔１の推定延長部分の西側に位置しており、水田域と考えられる部分に当たる。詳細は本文中で報告したが、他の土坑とは覆土が異なっており、滞水していたような状況を示すものであった。調査中にも湧水があり、水田用の取水のための施設として考えられる(6)。

7a 層については7b 層に明瞭な攪拌痕（図版９－７）があったことから、水田耕作土として指摘したもので、平成５年度調査の6m 層に該当する。しかし、同年の調査には明確な遺構としては確認されておらず、さらにイネのプラント・オパールも０個／ｇである。果たして断面で認められる攪拌痕＝水田として捉えることが可能なのか疑問を抱かざるを得ない(7)。

９層については今回の調査では遺構としては何も検出することができなかった。平成５年調査時にはシガラ状遺構・埋設杭などが検出されている。またイネのプラント・オパールは700個／ｇをカウントしているが、その数値からは水田耕作が行われていたと断定することは避けたほうが妥当と考える。

5　年代について

小鹿杉本堀合坪遺跡においては３層以下の遺物の出土がほとんど無く、年代の押さえを非常に困難なものにしている。そこで、今回の調査では火山灰の分析と泥炭層での年代測定を実施し、年代決定の資料とした。

まず２層における遺構の年代については、井戸ＳＥ162から出土した灰釉皿から判断し、９世紀後半としたが、その他の遺構や２層内から出土した土器からは概ね11世紀末までは継続するものと考えた。ところで、静岡平野北部の調査例においては条里型地割が、出土した土器から８世紀後半にまでさかのぼる可能性が出てきている(8)。また、曲金北遺跡から発見された古代東海道の側溝からは８世紀半ばとされる土器が出土しており（及川　1994）、静岡平野においては条里型地割の施工が少なくとも８世紀半ばには始まっていたと考えられよう。静岡平野南部においては現在のところ神明原・元宮川遺跡稲妻地区の溝状遺構が平安時代前期、鷹ノ道遺跡の水田跡が10～11世紀に比定されているのみで、資料に乏しく今後の課題とせざるをえない状況である。先述したように小鹿杉本堀合坪遺跡では出土土器からは９世紀後半を上限とした。しかも、今回行なった火山灰分析では溝状遺構ＳＤ101の覆土中から採取された火山灰が838（承和５）年の神津島天上山テフラ（Iz-Kt）ないしは886（仁和２）年の伊豆新島向山テフラ（Iz-Nm）に同定された。このことから先述したように溝状遺構が条里型地割に関連するものとするならば、少なくとも９世紀後半には静岡平野南部にも条里型地割が施工されていたとすることができよう。今後の資料の蓄積に期待したい。

次に下層の年代について簡単に触れておきたい。３層以下には遺物の出土が全く無く、平成５年度調査の報告書では泥炭層を鍵層として静岡平野北部での調査例に併行関係を求め、７層の黒色泥炭層（今回調査の８層に対応）を平安時代とした。しかし、今回の年代測定によれば、泥炭層（８層）からは1,850±60.B.P.の年代が得られた(9)。このデータによれば弥生時代後期という時期が与えられる。静岡平野においては古墳時代前期に湿地化があり、泥炭層が広く堆積することが知られている。年代測定の結果とはずれが生じるが、周辺遺跡の調査結果からはその時期として捉えるのが妥当であろう。そこで平成５年度調査のシガラ状遺構および埋設杭は一応、弥生時代後期～古墳時代初頭としておきたい(10)。

6　おわりに

今回の調査は何度も述べているとおり、近代以降の建築物により大きく破壊され、遺跡の広がりや性格も十分に解明できないものであった。しかし、集落関連遺構と溝状遺構の検出は当遺跡が曲金微高地上に平安時代の集落が存在している可能性を示し、当遺跡がその南側末端部分であったこと、またそこから南西へ広がる低地部分には水田が営まれていたことなど多分に想像の域を出ないが、当時の集落景観を復元できる資料になったのではないかと考えている。静岡平野北部に比べ、南部は調査例も少なく、未解明の部分が多いと言わざるをえない。今後、資料が蓄積されることにより、当該期の歴史像がより具体化されていくことに期待したい。

最後に、今回の調査にご理解とご協力をいただいた方々に、深く感謝して報告を終えたい。

註

(1)　原図については当研究所が助成を行っている静清平野条里研究の成果の一部を用いた。現在作成中のものであり、未発表資料であることを断っておきたい。

(2)　ただし、静岡市瀬名遺跡では103～109mのばらつきがあることが報告されている。（静岡県埋蔵文化財調査研究所　1992）

(3)　溝状遺構の方位についてはその認識により大きく異なると考えられ、今回の計測についても傾向という程度で考えている。

(4)　ＳＦ118は形状や規模から素掘り井戸の可能性もある。

(5)　遺物については水田域と考えた３区からの出土は極めて少ない。また、木製品については用途不明品・井戸部材を除くと農具１点に対し、生活用具は21点を数える。また１区からの出土が多いことからも集落域であった蓋然性は高いと言えよう。

(6)　乙益氏が述べられている「置簀」（オキス）と言われるものかもしれない（乙益　1980）。内部に肥料を入れ湧水により施肥を行ったとも考えられる。また年代的には異なるが、静岡市豊田遺跡からは水田内に湧水施設が作られており（静岡市教育委員会　1982）、これらも類似例として考えても良いかもしれない。

(7)　浜松市箕輪遺跡（静岡県埋蔵文化財調査研究所　1993）や島田市矢崎遺跡（静岡県埋蔵文化財調査研究所　1994）では畦畔は検出されているが、イネのプラント・オパールがカウントされていない水田が確認されている。遺構とプラント・オパールとの関係は今後検討すべきであると考える。

(8)　岳美遺跡出土の須恵器が８世紀後半に比定されている（山本　1995）。

(9)　この層の上層からは天城カワゴ平軽石（Kg）が見つかっている。量的には少なく、２次堆積と考えたほうが良いと思われる。

(10)　この時期の水田は杭や横木などによる強固な畦畔であることが多い。単純な比較はできないが、当遺跡の遺構は水田に直接関わるものではないかもしれない。イネのプラント・オパールが少ないことからも言えるのではないだろうか。

引用・参考文献

宇野隆夫　1982　「井戸考」　『史林』　65-5

及川　司　1994　「速報　古代東海道の調査　－静岡市曲金北遺跡」　『研究所報』52　静岡県埋蔵文化財調査研究所

乙益重隆　1980　「古代水田区画雑考」　『鏡山猛先生古稀記念文化論攷』　鏡山猛先生古稀記念論文集刊行会

加藤芳朗　1983　「有東遺跡をめぐる地形・地質的背景」　『有東遺跡Ⅰ』　静岡県教育委員会

古泉　弘　1985　「江戸の街の出土遺物　－その展望－」　『季刊考古学』第13号　雄山閣出版

斉藤孝正　1987　「施釉陶器年代論」　『論争・学説　日本の考古学』第６巻　雄山閣出版

佐野五十三　1990　「清郷型甕の研究　－煮沸形態からみた古代末の東海地方－」　『研究紀要』III
静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県　1992　『静岡県史　資料編３　考古三』

静岡県教育委員会　1988　『静岡県文化財地図Ⅰ』

静岡県教育委員会　1988　『静岡県文化財地名表Ⅰ』

静岡県教育委員会　1989　『静岡県の窯業遺跡（静岡県内窯業遺跡分布調査報告）』

静岡県教育委員会　1994　『曲金東遺跡』

静岡県埋蔵文化財調査研究所　1988　『大谷川（稲妻地区）』

静岡県埋蔵文化財調査研究所　1993　『瀬名遺跡II（遺構編II）』

静岡県埋蔵文化財調査研究所　1993　『箕輪遺跡』

静岡県埋蔵文化財調査研究所　1994　『瀬名遺跡III（遺物編Ⅰ）』

静岡県埋蔵文化財調査研究所　1994　『矢崎遺跡』

静岡市教育委員会　1982　『駿河・豊田遺跡』

静岡市教育委員会　1989　『有東梔子II』

静岡市教育委員会　1991　『鷹ノ道遺跡第２次発掘調査の概要』

奈良国立文化財研究所　1984　『木器集成図録　近畿古代編』

矢田　勝　1987　「第II章　環境」　『大谷川（遺構編）』　静岡県埋蔵文化財調査研究所

矢田　勝　1990　「静岡平野北部条里型地割の復元と立地環境の変遷」『研究紀要』III　静岡県埋蔵文化財調査研究所

山本真央　1995　「条里型水田から出土した８世紀後半の須恵器　－岳美遺跡－」　『研究所報』58　静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県、小鹿杉本堀合坪遺跡の火山灰分析・年代測定

株式会社　古環境研究所

1　はじめに

小鹿杉本堀合坪遺跡の発掘調査では、沖積層の良好な土層断面が作成された。そしてそこには堆積年代が不明な土層が多く認められた。そこで地質調査と火山灰分析さらに年代測定を合わせて行って、土層の堆積年代に関する資料を収集することになった。調査分析の対象となった地点は、３区トレンチとＳＤ101の２地点である。

2　土層の層序

（１）３区トレンチ

３区トレンチでは、下位より灰色シルト層（層厚10cm以上，25層）、黒泥層（層厚７cm，24層）、灰色シルト層（層厚34cm，23層）、黒灰色シルト層（層厚９cm，22-b層）、暗灰色粘土層（層厚６cm，22-a層）、黒褐色泥炭層（層厚10cm，21層）、暗灰色粘土層（層厚５cm，20層）、黒褐色泥炭層（層厚７cm，19層）、細かく成層した灰色シルト層（層厚14cm，18層）、灰色シルト層（層厚21cm，17-b層）、暗灰色シルト層（層厚３cm，17-a層）、灰色シルト層（層厚22cm，16層）、黄灰色砂層（層厚10cm，15層）、灰色シルト層（層厚15cm，14-d層）、黄灰色シルト層（層厚９cm，14-c層）、灰色シルト層（層厚４cm，14-b層）、灰色シルト層（層厚11cm，14-a層）、植物遺体混じり灰色シルト層（層厚11cm，13-e層）、成層した灰色シルト層（層厚20cm，13-d層）、灰色砂層（層厚７cm，13-c層）、灰色砂層（層厚２cm，13-b層）、成層した灰色砂層（層厚14cm，13-a層）、灰色砂礫層（層厚45cm，12層）、灰色砂層（層厚７cm，11-b層）、亜円礫混じり灰色砂層（層厚10cm，礫の最大径18mm，11-a層）、亜円礫に富む褐灰色砂層（層厚38cm，礫の最大径42mm，10層）、褐色シルト層（層厚７cm，９層）、黒褐色泥炭層（層厚９cm，８層）、灰色シルト層（層厚６cm，7-b層）、褐灰色シルト層（層厚11cm，7-a層）、細かく成層した灰色シルト層（層厚66cm，6-b層）、淘汰のよい灰色砂層（層厚12cm，6-a層）の連続が認められた（図１）。

（２）ＳＤ101

平安時代に構築されたと推定されている１区ＳＤ101の覆土（2a層）中には、厚さ0.2cmの白色の細粒火山灰層がパッチ状に認められた。

3　テフラ検出分析

（１）分析試料と分析方法

３区トレンチにおいて、基本的に５cmまたは５cm以下の土層ごとに採取された試料のうち、試料番号17以下の奇数番号の試料24点およびＳＤ101のテフラ試料について、テフラ検出分析を行い、示標テフラの検出を試みた。テフラ検出分析の手順は次の通りである。

１）試料10gを秤量。

２）超音波洗浄装置により泥分を除去。

３）80℃で恒温乾燥。

４）実体顕微鏡下でテフラ粒子の特徴を観察。

（２）分析結果

テフラ検出分析の結果を表１に示す。３区トレンチの試料番号３および１には、スポンジ状によく発

泡した白色の軽石型ガラスが少量認められた。最大径は1.1㎜である。斑晶には、角閃石が認められる。この軽石は、その特徴から約2,800～2,900年前に伊豆天城火山カワゴ平火口から噴出した天城カワゴ平軽石（Kg，町田・新井，1992）に由来すると考えられる。ただし軽石の量は少なく、その層準は、より下位の層位にある可能性も考えられる。したがってここでは、試料番号３以下の層準にKgの降灰層準があると考えられる。

ＳＤ101の2a層中に認められる白色火山灰層は、繊維束状やスポンジ状に発泡した軽石型や分厚い中間型の透明のガラスを特に多く含んでいる。そのほか、黒雲母も認められる。この火山ガラスは、その特徴から838（承和５）年に神津島天上山から噴出した神津島天上山テフラ（Iz-Kt，町田・新井，1992）あるいは886（仁和２）年に新島向山から噴出した伊豆新島向山テフラ（Iz-Nm，町田・新井，1992）に同定される。

4　年代測定

（１）試料と方法

試料名	層準	種類	前処理・調整	測定法
No.1	7層上部	泥炭	酸－アルカリ－酸洗浄 ベンゼン合成	ＡＭＳ法
No.2	27層最上部	泥炭	酸－アルカリ－酸洗浄 石墨調整	ＡＭＳ法
No.3	31層上部	炭化物	酸洗浄 石墨調整	ＡＭＳ法

（２）測定結果

試料名	^{14}Ｃ年代 （年 BP）	δ^{13}Ｃ ‰	補正^{14}Ｃ年代 （年 BP）	歴年代	測定No. （CAMS－）
No.1	1,690±50	-14.6	1,850±50	AD160＋80/-50	20260
No.2	4,420±60	-27.5	4,380±60	BC2,930＋140/-20	20261
No.3	5,520±60	-19.8	5,600±60	BC4,450＋35/-90	20262

１）^{14}Ｃ年代測定値

試料の^{14}Ｃ／^{12}Ｃ比から、単純に現在（1950年 AD）から何年前（BP）かを計算した値。^{14}Ｃの半減期は5,568年を用いた。

２）δ^{13}Ｃ測定値

試料の測定^{14}Ｃ／^{12}Ｃ比を補正するための炭素安定同位体比（^{13}Ｃ／^{12}Ｃ）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差‰で表す。

３）補正^{14}Ｃ年代値

δ^{13}Ｃ測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、^{14}Ｃ／^{12}Ｃの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

４）歴年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中^{14}Ｃ濃度の変動を補正することにより、歴年代を算出した。補正には年代既知の樹木年輪の^{14}Ｃの詳細な測定値を使用した。この補正は10,000年 BP より古い試料には

適用できない。

5　まとめ

小鹿杉本堀合坪遺跡において地質調査、テフラ検出分析、加速器質量分析法（ＡＭＳ法）による放射性炭素年代測定を合わせて行い、土層の堆積年代に関する資料を得た。その結果、31層上部からは5,600±60y.B.P.（CAMS-20262）、27層最上部からは4,380±60y.B.P.(CAMS-20261)、７層上部から1,850±50y.B.P.(CAMS20260)の^{14}C年代が得られた。とくに７層上部については、テフラ検出分析から天城カワゴ平軽石（Kg）の降灰（約2,800～2,900年前）以降であると考えられており、得られた^{14}C年代は、このこととも矛盾しない。なお１区SD101の覆土からは、神津島天上山テフラ（Iz-Kt，838年）あるいは伊豆新島向山テフラ（Iz-Nm，886年）に同定されるテフラが検出された。

文献

町田　洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス。東京大学出版会，276p.

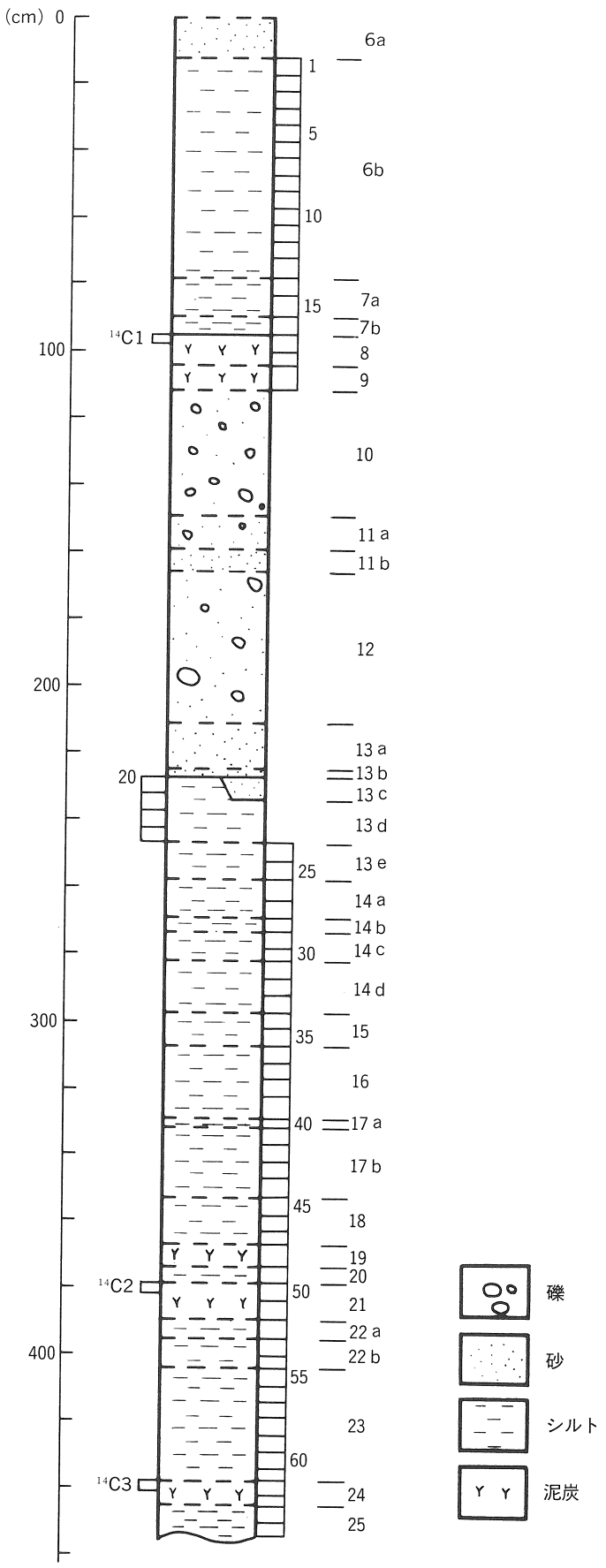


図１　小鹿杉本堀合坪遺跡の土層柱状図

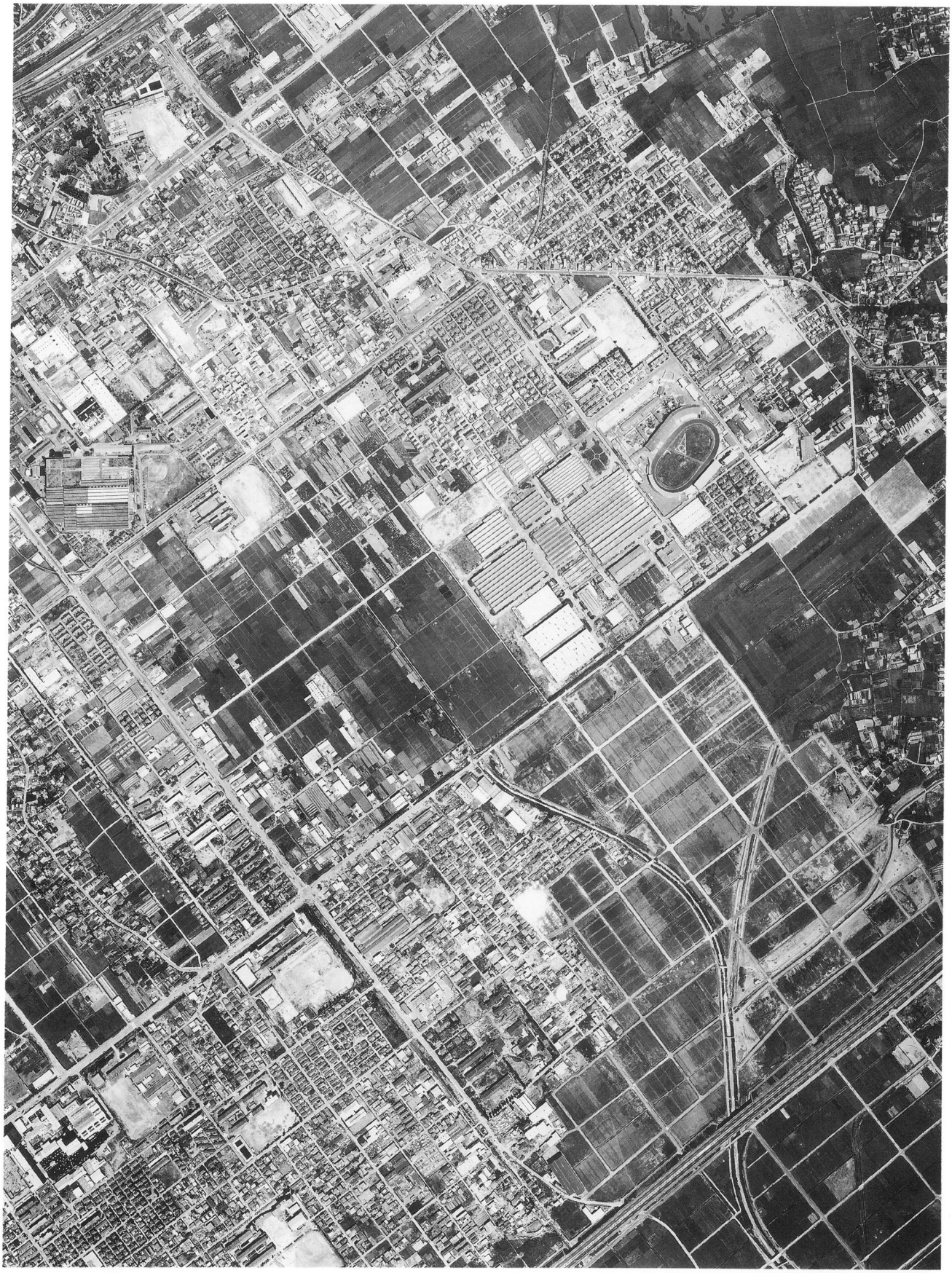
表１　小鹿杉本堀合坪遺跡のテフラ検出分析結果

地点	試料	スコリア			火山ガラス		
		量	色調	最大径	量	色調	形態
３区	17	－	－	－	＋	白	pm
トレンチ	19	－	－	－	＋	白	pm
	21	－	－	－	－	－	－
	23	－	－	－	－	－	－
	25	－	－	－	－	－	－
	27	－	－	－	－	－	－
	29	－	－	－	－	－	－
	31	－	－	－	－	－	－
	33	－	－	－	－	－	－
	35	－	－	－	－	－	－
	37	－	－	－	－	－	－
	39	－	－	－	－	－	－
	41	－	－	－	－	－	－
	43	－	－	－	－	－	－
	45	－	－	－	－	－	－
	47	－	－	－	－	－	－
	49	－	－	－	－	－	－
	51	－	－	－	－	－	－
	53	－	－	－	－	－	－
	55	－	－	－	－	－	－
	57	－	－	－	－	－	－
	59	－	－	－	－	－	－
	61	－	－	－	－	－	－
	63	－	－	－	－	－	－
	65	－	－	－	－	－	－
ＳＤ101	1	－	－	－	＋＋＋＋	透明	pm,md

＋＋＋＋：とくに多い，＋＋＋：多い，＋＋：中程度，＋：少ない，
－：認められない．最大径の単位は，mm．pm：軽石型，md：中間型．

図　　版

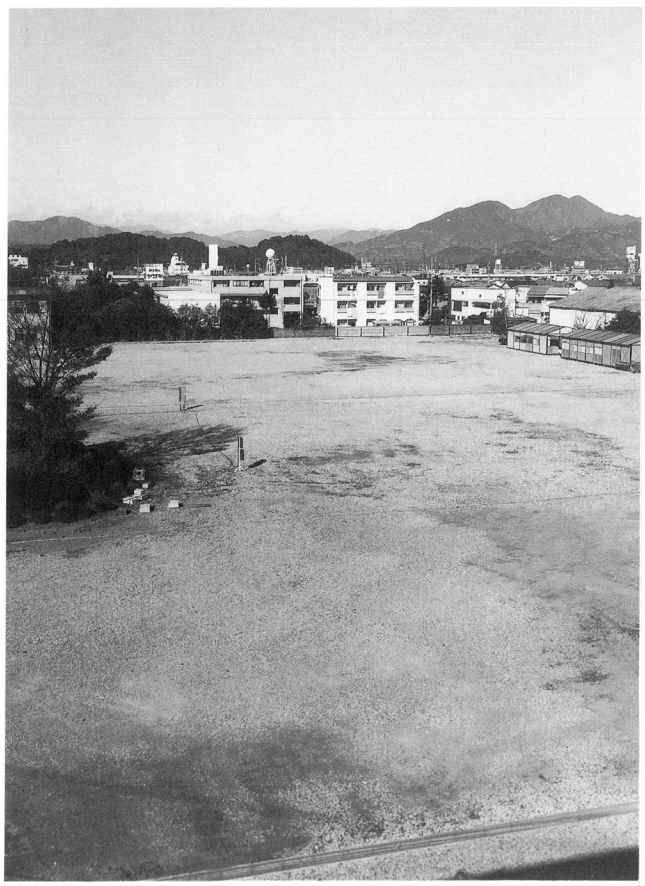
(写 真)



周辺地形（空中写真）

図版　2

1　遺跡遠景（南東から）



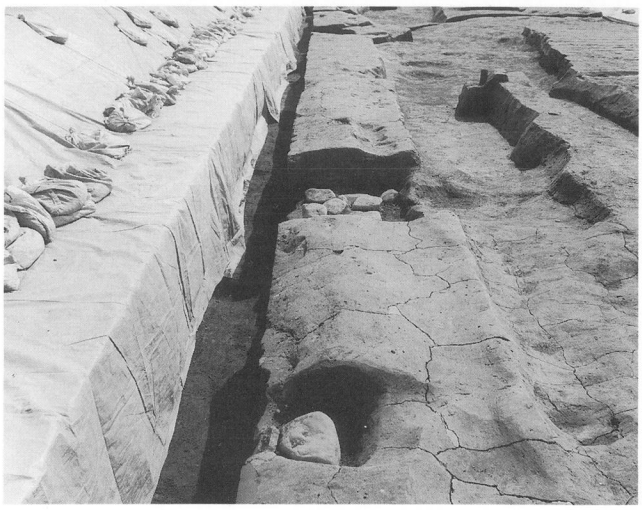
2　調査前状況（3区）

3　調査前状況（1・2区）

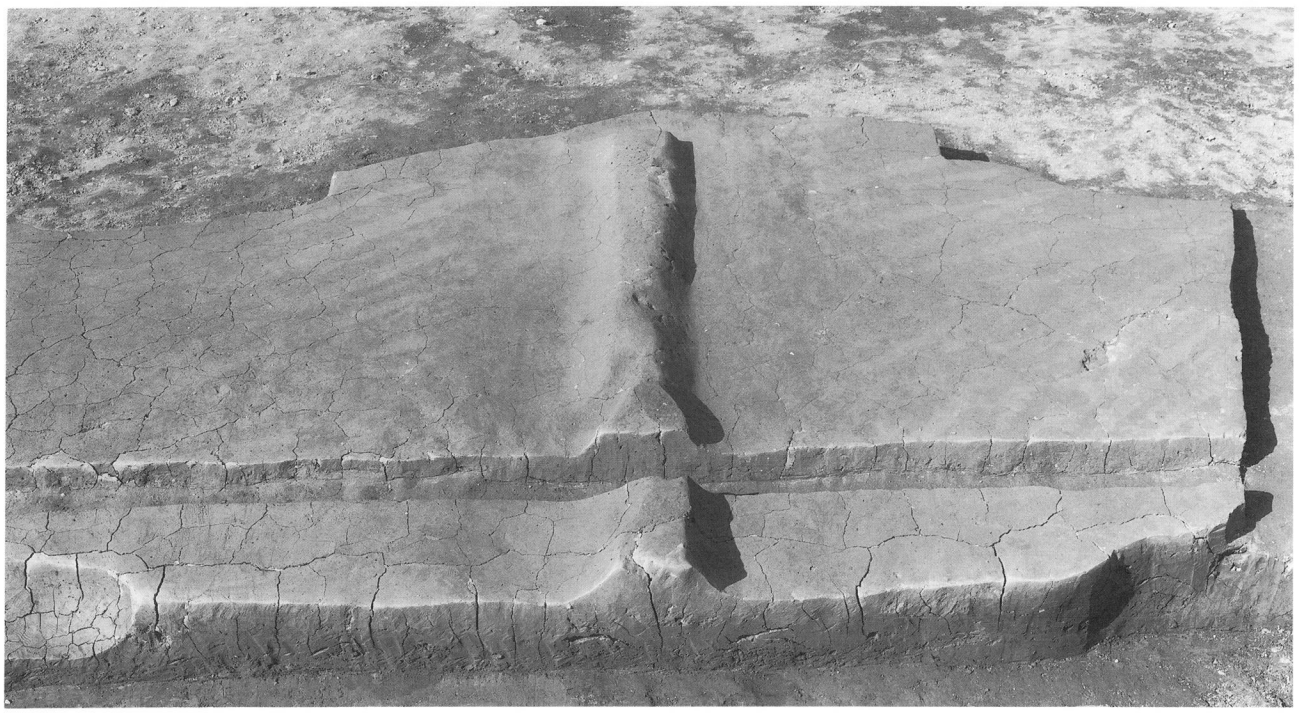
1　2区第Ⅰ遺構面遺構検出状況（南西から）

2　2区第Ⅰ遺構面完掘状況（南西から）

3　畦畔SK 201（北東から）

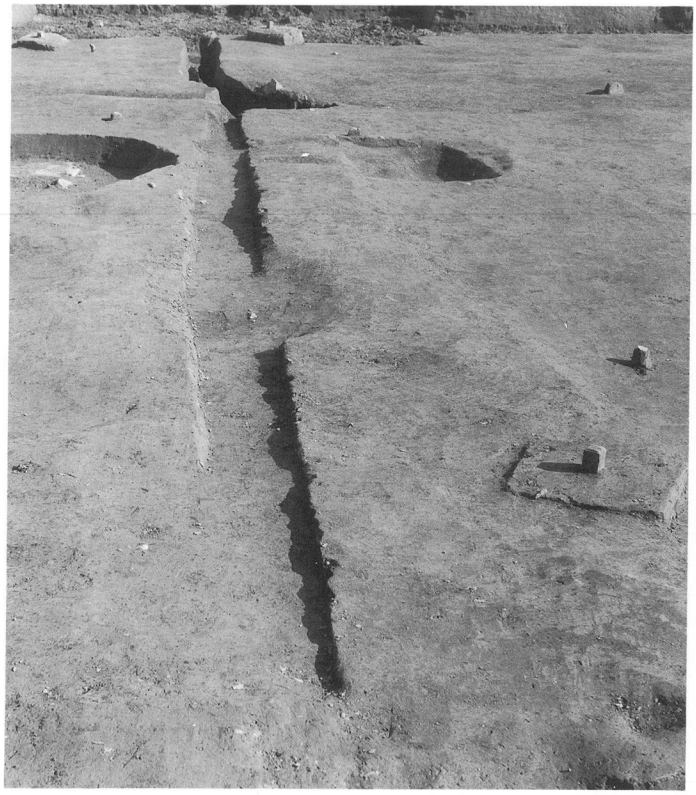


4　畦畔SK 202（北西から）

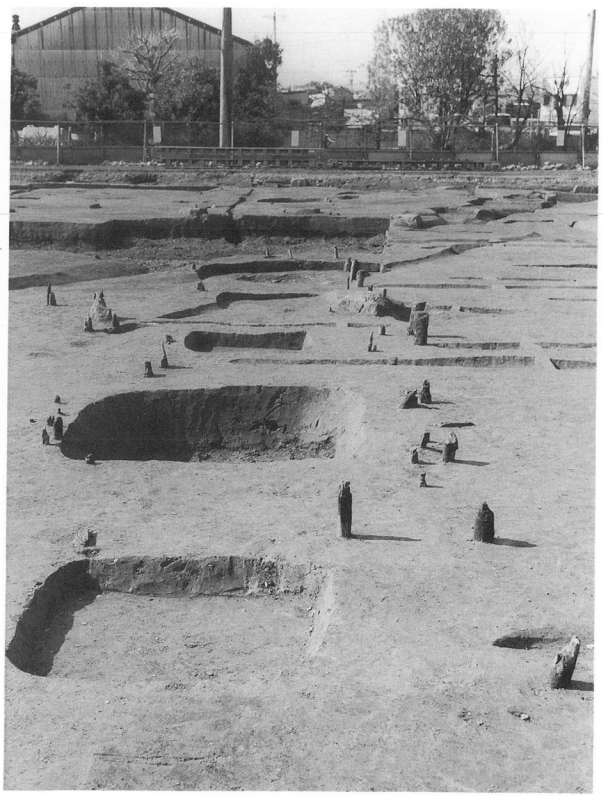


5　畦畔SK 301（南西から）

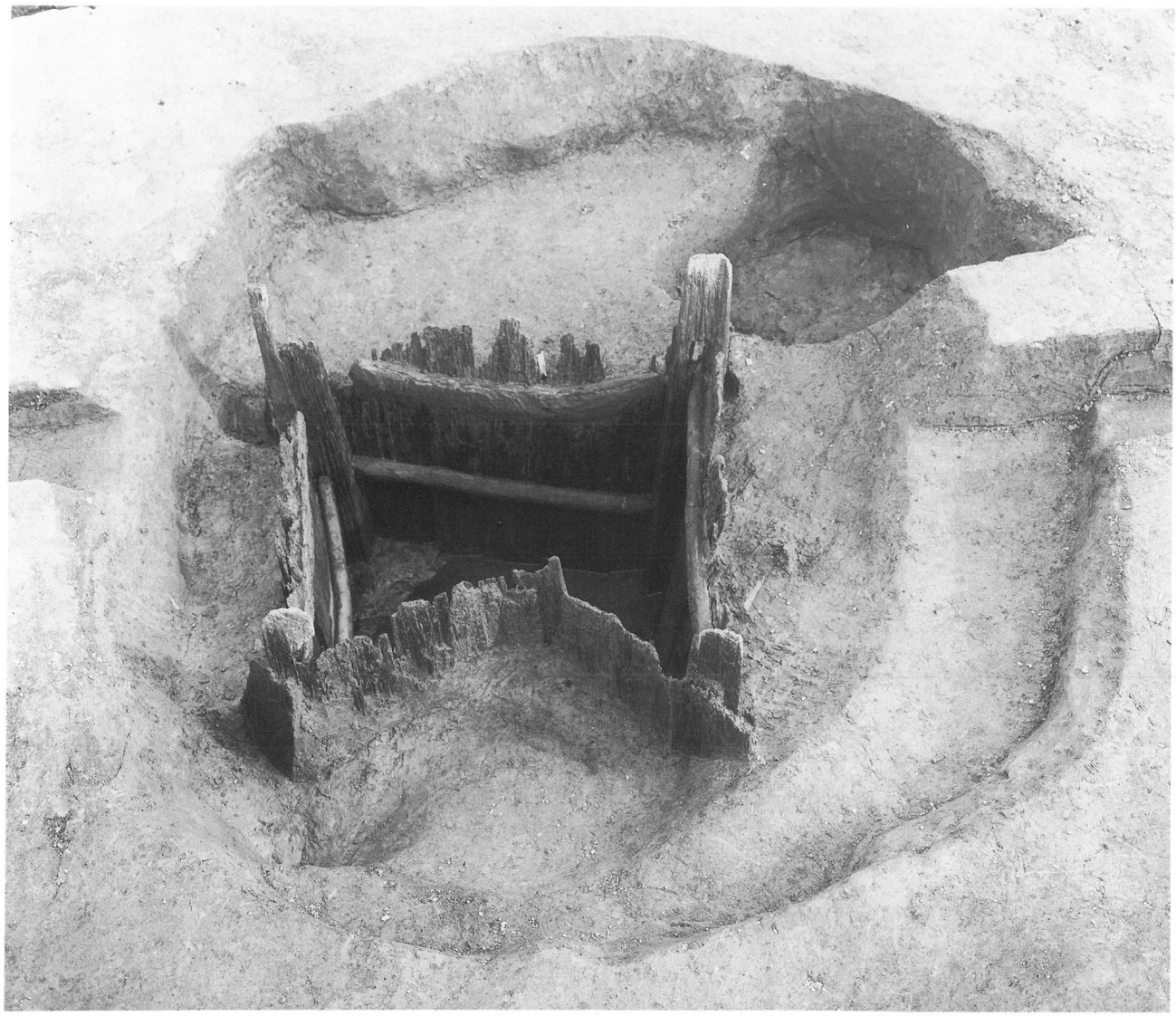
1　Ⅰ区第２遺構面全景（西から）



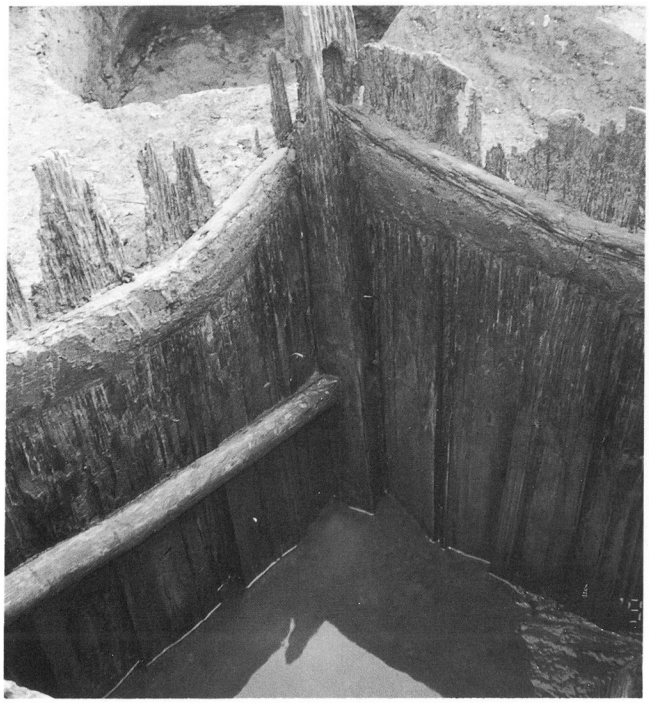
2　Ⅰ区擬似畦畔（北西から）



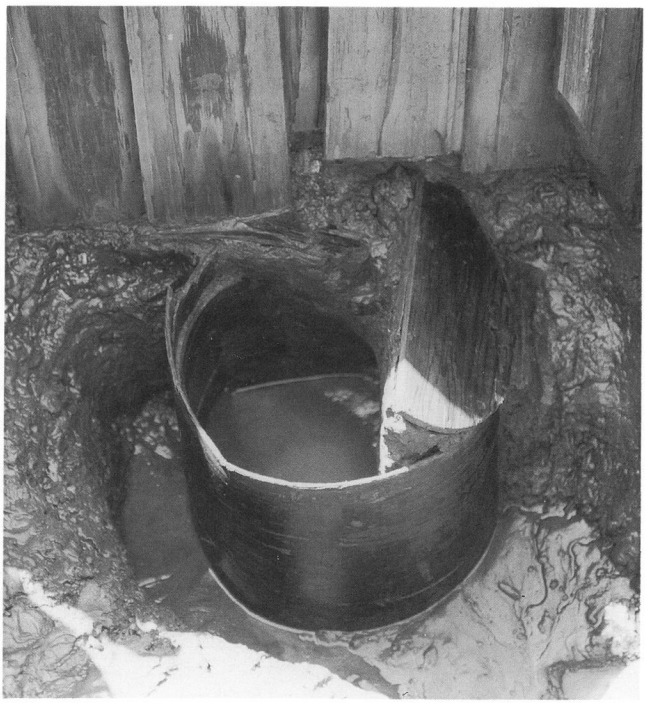
3　Ⅰ区杭列（南東から）



1　井戸SD162　全景（北から）



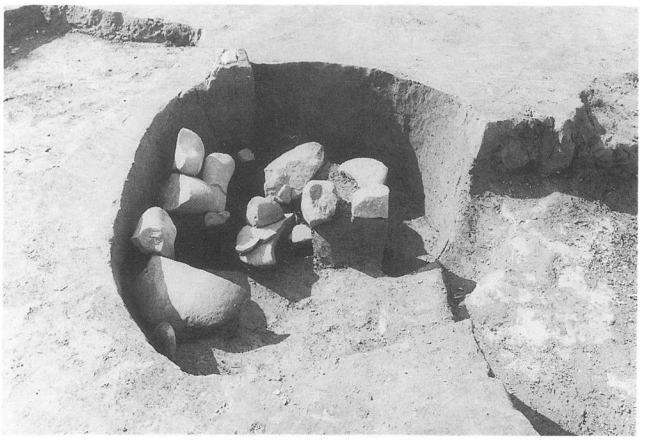
2　井戸SD162隅柱・横桟木組み合わせ



3　井戸SD162水溜内曲物

図版　6

1　土坑SF118（東から）



2　土坑SF120（南東から）

3　土坑SF131覆土堆積状況

4　土坑SF131内下駄出土状況

5　溝状遺構SD129・130

6　溝状遺構SD124～127

7　I区曲物出土状況

8　I区陽物出土状況

1　2区第2遺構面全景（南西から）

2　溝状遺構SD203～207他

3　溝状遺構SD211～217・256

1　3区第2遺構面全景（北から）

2　3区擬似畦畔・溝状遺構SD325～328

3　溝状遺構SD334～340・350

1　Ⅰ区第3遺構面全景（南西から）

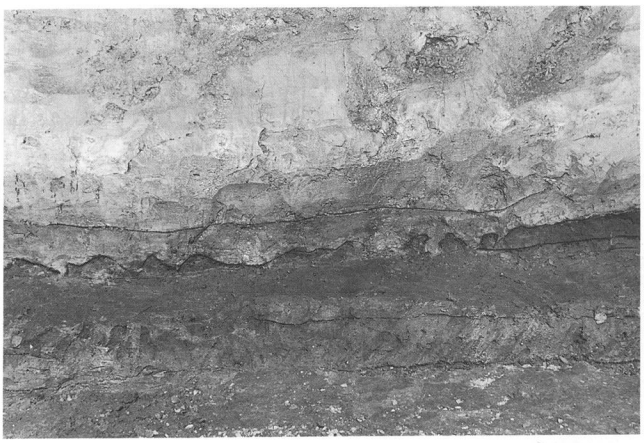
2　Ⅰ区北壁土層断面（東から）

3　Ⅰ区北壁土層断面（西から）

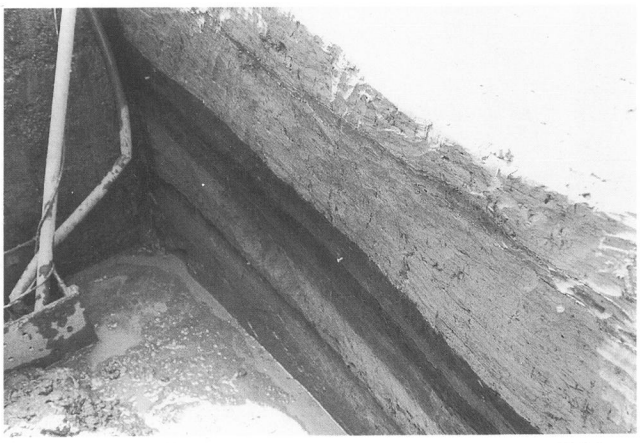
4　Ⅰ区第3遺構面出土木片

5　3区第3遺構面全景（南東から）

6　3区東壁土層断面



7　3区東壁7層攪拌状況



8　3区西壁土層断面

図版10　出土遺物（土器）

1　灰釉陶器・皿（1）
2　灰釉陶器・皿（2）
3　緑釉陶器・手付瓶（12）
4　灰釉陶器・碗（16）
5　灰釉陶器・碗（23）
6　土師器・杯（24）
7　土師器・杯（24）
9　墨書土器（30）
8　陶器・甕（7）

1

2

3

4

5

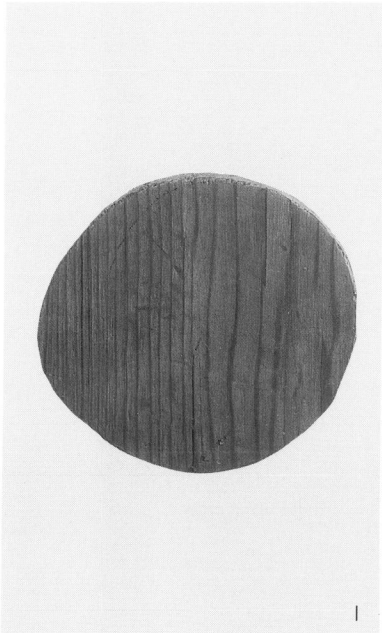
6

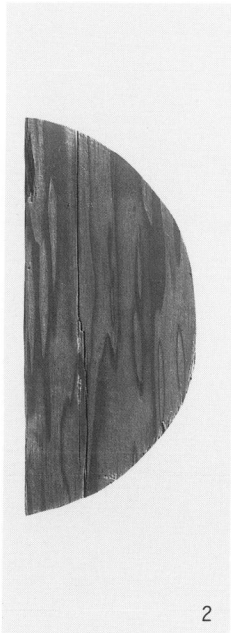
7

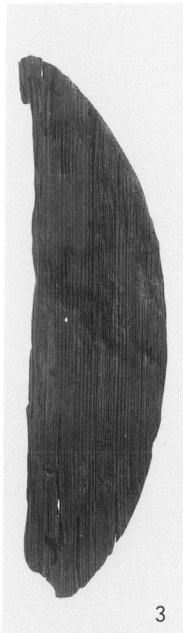
9

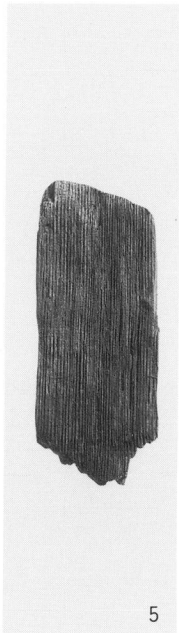
8

図版11　出土遺物（木製品１）
実測図番号　１～３・５・７～９

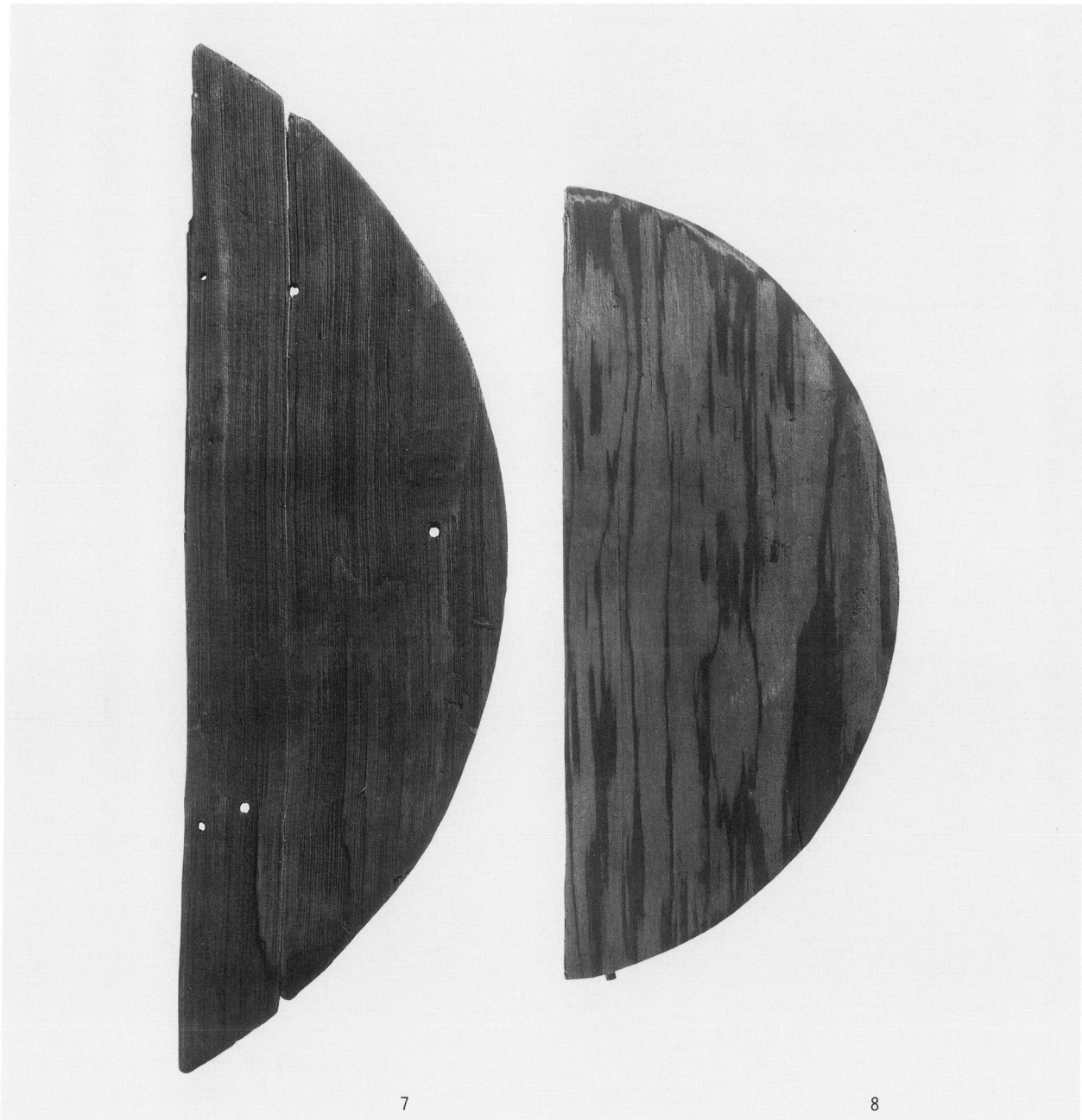

1


2

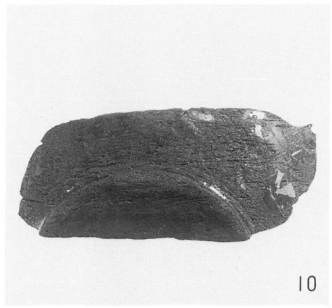

3

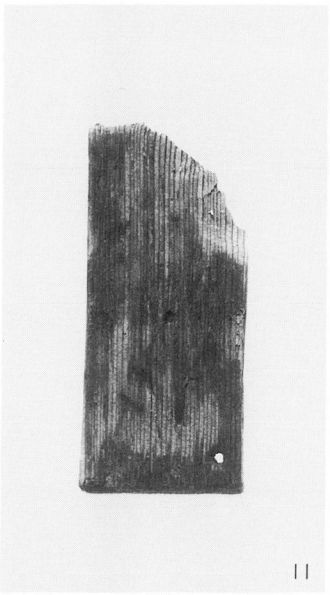

5

9

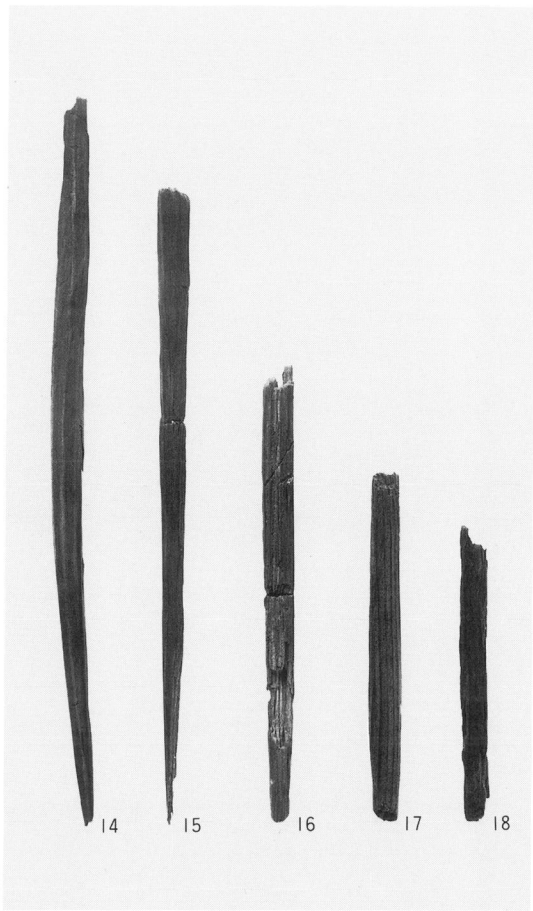

7　8

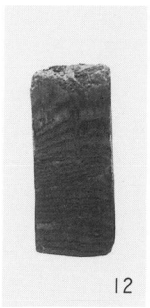
図版12　出土遺物（木製品２）
実測図番号　10～22

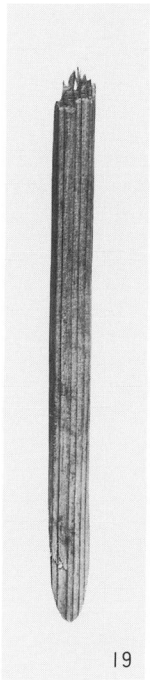

10


11

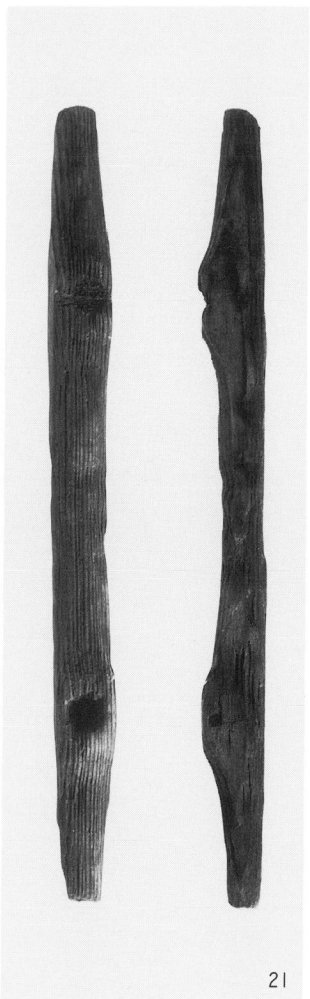
13


14 15 16 17 18


12

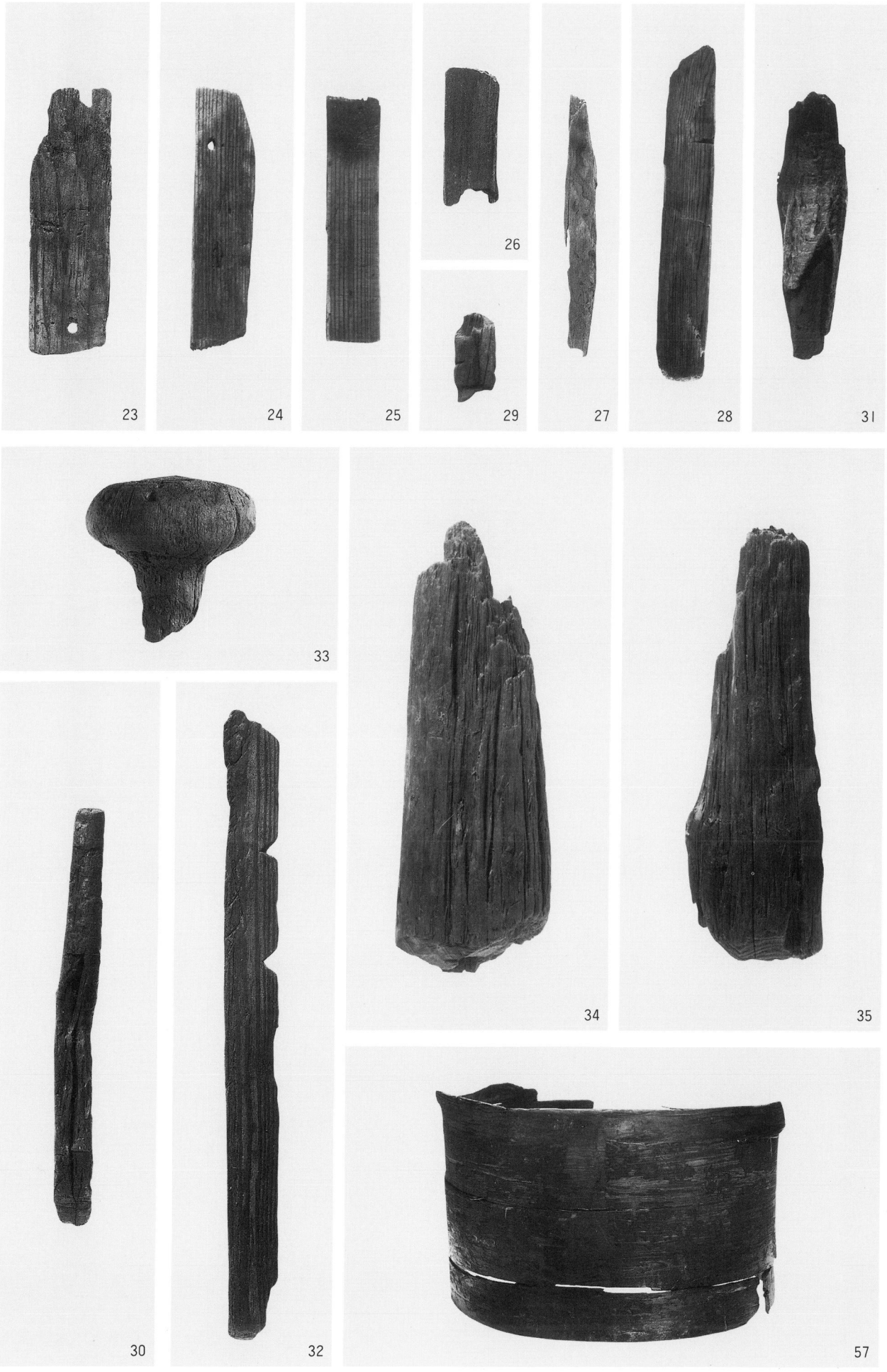

19

20

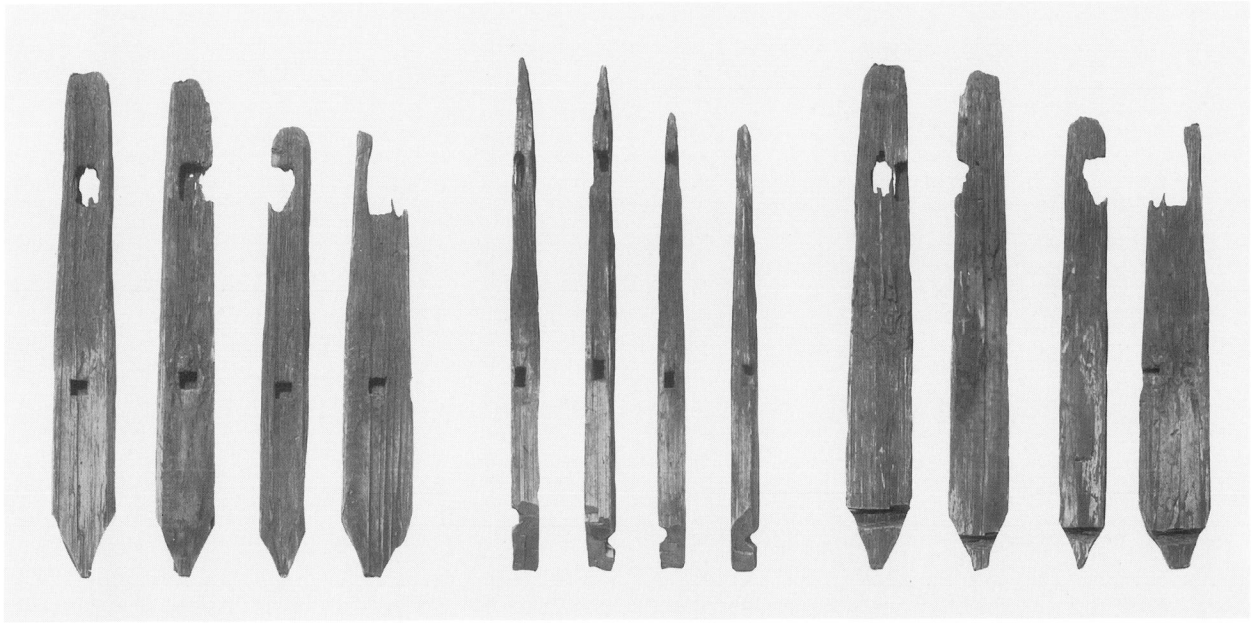

21

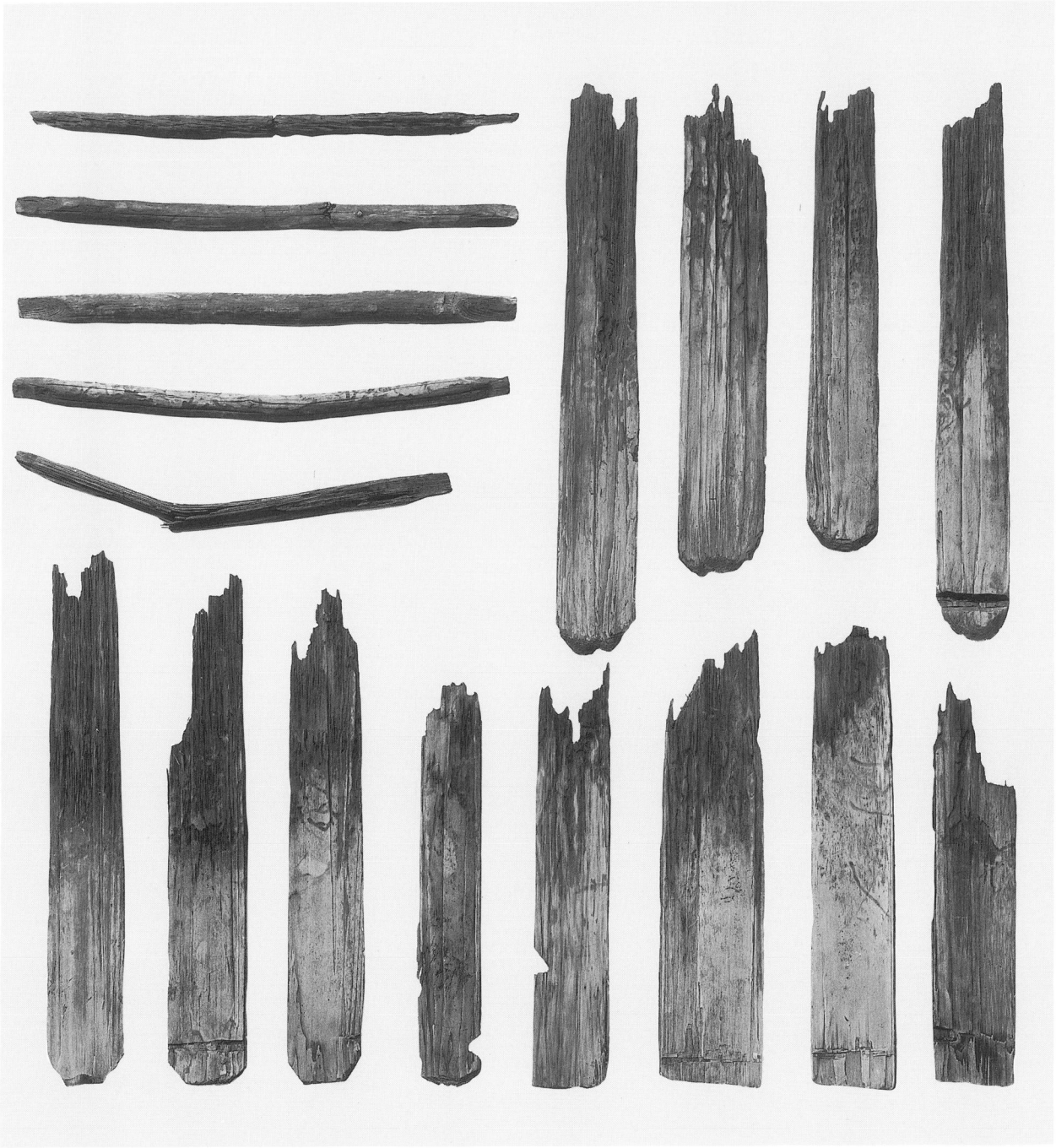
22

図版13　出土遺物（木製品３）
実測図番号　23～35・57

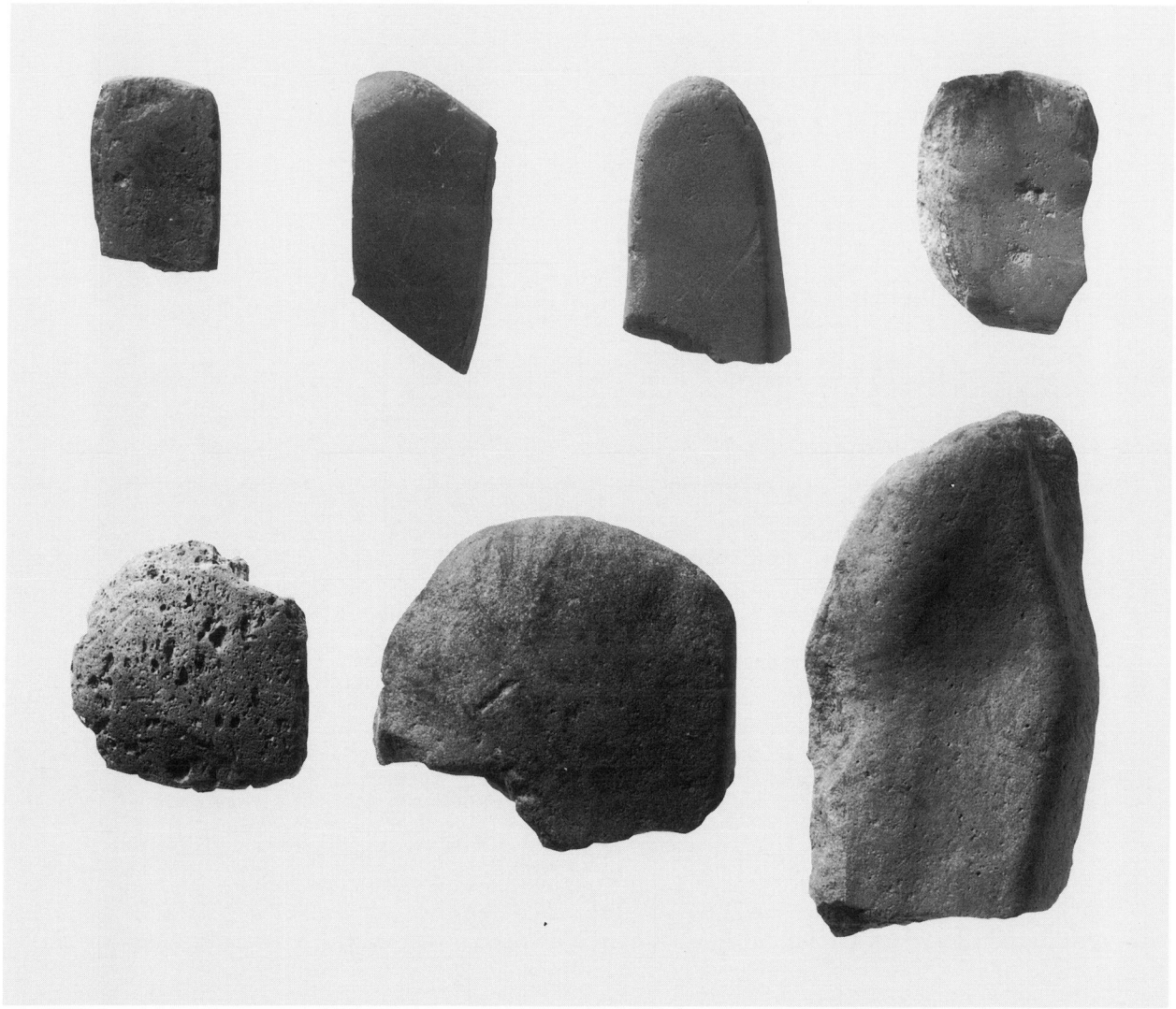

23
24
25
26
29
27
28
31
33
34
35
30
32
57

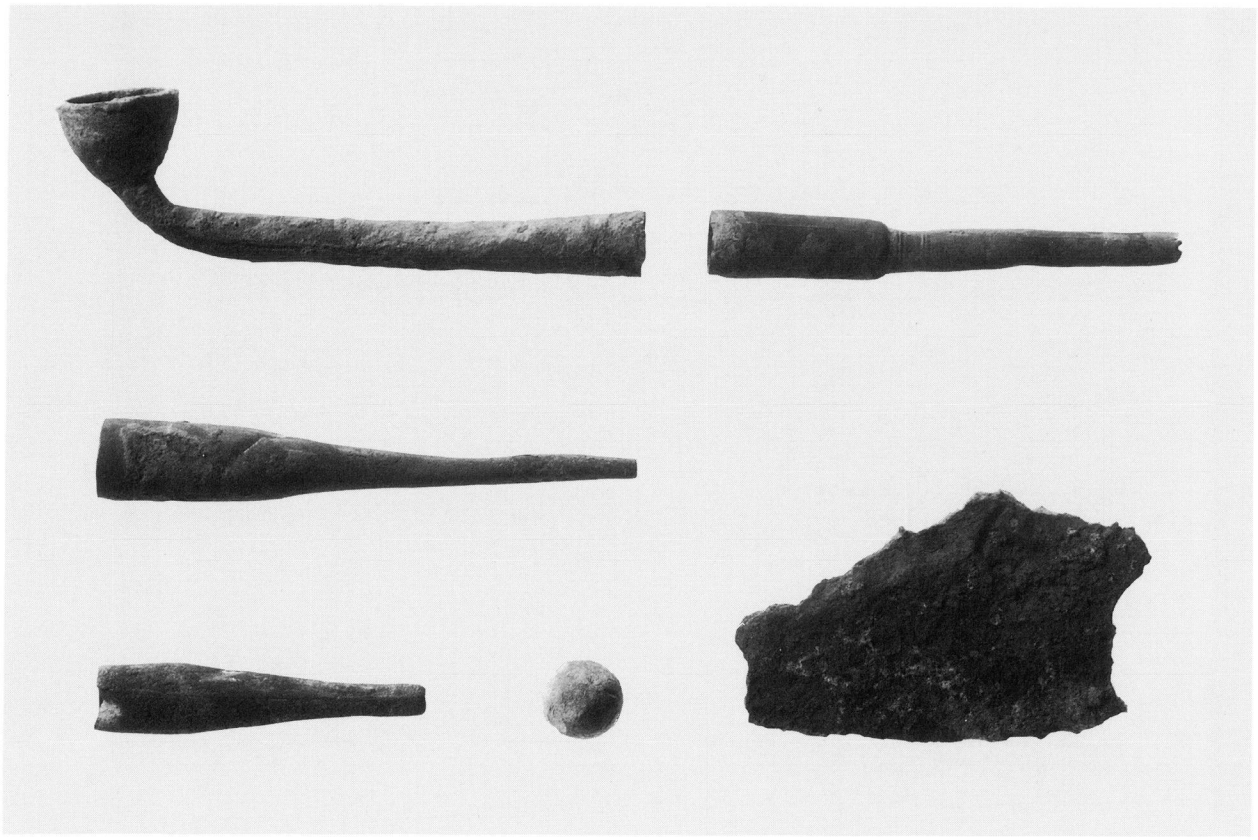
図版14　出土遺物（木製品４）
実測図番号　36～44





図版15　出土遺物（石製品・金属製品）





報告書抄録

ふりがな	おしかすぎもとほりあいつぼいせき
書名	小鹿杉本堀合坪遺跡
副書名	平成6年度静岡県立大学短期大学部静岡校（仮称）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告
シリーズ番号	第70集
編集者名	中鉢賢治
編集機関	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
所在地	〒424　静岡県清水市江尻台町18-5　TEL 0543-67-1171(代)
発行年月日	1996年3月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m²	調査原因
小鹿杉本堀合坪（おしかすぎもとほりあいつぼ）	静岡県静岡市小鹿（しずおかけんしずおかしおしか）	22201		34°58′17″	138°25′12″	19941201〜19950525	延11,439	短期大学建設工事

所収遺跡名	種別	主な年代	主な遺構	主な遺物	特記事項
小鹿杉本堀合坪遺跡	集落跡 生産跡	平安時代	水田跡 畦畔　5条 井戸　1基 土坑　9基 溝　141条 擬似畦畔　2条	灰釉陶器　土師器 緑釉陶器　墨書土器 木製品(容器・食事具・装身具・紡織具・祭祀具) 石製品(砥石) 金属製品(キセル・鉄砲玉・包丁)	擬似畦畔による条里型地割の復元資料

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第70集

小鹿杉本堀合坪遺跡

平成６年度静岡県立大学短期大学部静岡校（仮称）建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1996年３月29日

発行所　財団法人
静岡県埋蔵文化財調査研究所

印刷所　黒船印刷株式会社
静岡市登呂二丁目４番25号
ＴＥＬ（054)286－0236㈹